平成４年度

神戸市埋蔵文化財年報

１９９５

神戸市教育委員会

平成４年度

神戸市埋蔵文化財年報

１９９５

神戸市教育委員会

序

この神戸市埋蔵文化財年報の発行を始めてから、本書で12冊目になります。本年度も例年通り、印刷準備をしておりました1月17日未明、阪神・淡路大震災に見舞われ、甚大な被害を被りました。神戸市域でも約234haもの埋蔵文化財包蔵地において、家屋や店舗等が倒壊・焼失しました。

そのような中で、すでに新しい神戸の街への復興が始まっています。ところが、復興事業の促進と埋蔵文化財保護という、未だ経験したことのない困難な問題も生じています。これらの苦難を乗り越えることにより、神戸の歴史が、新しい街づくりのなかに生かされることと信じております。

さて、平成4年度も貴重な発見が相次ぎました。垂水・日向遺跡で干潟を歩いた8,000年前の縄文時代人の足跡、狩口台きつね塚古墳の金銅装の馬具、二ツ屋遺跡の平安時代の屋敷跡などです。

本書は、平成4年度に実施した主な発掘調査の成果を掲載するもので、現地調査中に公開できなかった多くの遺跡も、本書を通し、理解していただければ幸いです。

最後に、この年報作成にご協力いただきました関係諸機関、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1．本書は、神戸市教育委員会が平成４年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財専門委員会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

檀上重光	大阪経済法科大学客員教授
和田晴吾	立命館大学文学部教授
細見啓三	奈良国立文化財研究所建造物研究室長

教育委員会事務局

教育長	福尾重信
社会教育部長	松田康宏
文化財課長	杉田年章
社会教育部主幹	照井紘介
埋蔵文化財係長	奥田哲通
文化財課主査	中村善則・渡辺伸行
事務担当学芸員	口野博史・佐伯二郎
〃	東　喜代秀
調査担当学芸員	西岡巧次
〃	菅本宏明
〃	千種　浩（保存科学担当）
〃	谷　正俊
〃	山本雅和
〃	富山直人
〃	橋詰清孝
〃	内藤俊哉
〃	浅谷誠吾
〃	川上厚志
〃	藤井太郎
〃	石島三和

㈶神戸市スポーツ教育公社

理事長	緒方　学
副理事	福尾重信
専務理事	谷　明
常務理事	飯塚日出雄
事業課長	村田　徹
文化財調査係長（文化財課主査兼務）	中村善則
調査担当学芸員	丸山　潔
〃	丹治康明
〃	黒田恭正
〃	西岡誠司
〃	安田　滋
〃	前田佳久
〃	須藤　宏
〃	山口英正
〃	斎木　巌
〃	池田　毅
〃	松林宏典
〃	阿部敬生
〃	井尻　格

2．本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究会社会科研究部編集（神戸市スポーツ教育公社発行）の５万分の１神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の１地形図を使用した。

3．本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当者が執筆し、丸山　潔、橋詰清孝が編集した。

4．表紙写真は狩口台きつね塚古墳出土の須恵器、裏表紙は狩口台きつね塚古墳出土の金銅装馬具である。いずれも楠本真紀子氏（楠華堂）の撮影である。

目　　次

序
例言

Ⅰ．平成４年度　事業の概要 …… 1
　平成４年度　埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 4
　平成４年度　神戸市埋蔵文化財調査地位置図 …… 9

Ⅱ．平成４年度の発掘調査 …… 15
　1．本庄町遺跡 …… 15
　2．本山遺跡　第14次調査 …… 19
　3．郡家遺跡　篠之坪地区　第５次調査 …… 27
　4．郡家遺跡　篠之坪地区　第６次調査 …… 31
　5．郡家遺跡　篠之坪地区　第７次調査 …… 35
　6．篠原遺跡　第７次調査 …… 37
　7．篠原遺跡　第８次調査 …… 43
　8．都賀遺跡　第３次調査 …… 45
　9．五毛遺跡 …… 49
　10．楠・荒田町遺跡　第11次調査 …… 55
　11．楠・荒田町遺跡　第12次調査 …… 67
　12．塚本遺跡 …… 73
　13．大開遺跡　第３次調査 …… 75
　14．大開遺跡　第４次調査 …… 81
　15．上津遺跡 …… 83
　16．宅原遺跡　宮ノ元地区　第６次調査 …… 87
　17．北神第４地点遺跡 …… 97
　18．上小名田遺跡　第10次調査 …… 101
　19．屏風遺跡 …… 103
　20．戎町遺跡　第９次調査 …… 105
　21．垂水・日向遺跡　第７・８次調査 …… 109
　22．垂水・日向遺跡　天ノ下地区 …… 113
　23．高塚山古墳群 …… 117
　24．狩口台きつね塚古墳 …… 123
　25．今池尻遺跡 …… 131
　26．白水遺跡 …… 133
　27．白水瓢塚古墳 …… 137
　28．新方遺跡　北方地点　第２次調査 …… 139
　29．今津遺跡　第４次調査 …… 143
　30．二ツ屋遺跡 …… 147
　31．玉津田中遺跡　第６次調査 …… 155
　32．西神ニュータウン内第65地点遺跡 …… 161

Ⅲ．平成４年度の大規模試掘調査 …… 169

Ⅳ．平成４年度の保存科学処理 …… 187

挿　図　目　次

fig. 1　調査地点位置図 …… 15
fig. 2　グリッド・トレンチ配置図 …… 16
fig. 3　木器出土状況〔写真〕 …… 16
fig. 4　田下駄〔写真〕 …… 17
fig. 5　田下駄実測図 …… 18
fig. 6　調査地点位置図 …… 19
fig. 7　遺構平面図 …… 20
fig. 8　Ⅲ区木器出土状況〔写真〕 …… 21
fig. 9　Ⅱ区 SD 01 獣下顎骨出土状況〔写真〕 …… 21
fig. 10　Ⅱ区 SD 01 出土土器 …… 22
fig. 11　Ⅲ区 SX 01〔写真〕 …… 23
fig. 12　Ⅲ区 SD 01・02 出土土器 …… 24
fig. 13　Ⅳ区 SD 02 木器出土状況〔写真〕 …… 25
fig. 14　Ⅳ区 SD 02 木器出土状況〔写真〕 …… 25
fig. 15　Ⅳ区 SD 02 木器出土状況〔写真〕 …… 25
fig. 16　Ⅳ区 SD 02 木器出土状況〔写真〕 …… 25
fig. 17　調査地点位置図 …… 27
fig. 18　第 2 遺構面平面図 …… 28
fig. 19　SB 01 平面図 …… 28
fig. 20　第 2 遺構面全景〔写真〕 …… 29
fig. 21　SB 01 全景〔写真〕 …… 29
fig. 22　SB 01 カマド〔写真〕 …… 30
fig. 23　第 3 遺構面平面図 …… 30
fig. 24　調査地点位置図 …… 31
fig. 25　第 2 遺構面平面図 …… 32
fig. 26　SB 02・03 全景〔写真〕 …… 33
fig. 27　第 3 遺構面平面図 …… 33
fig. 28　SB 05・06 全景〔写真〕 …… 34
fig. 29　調査地点位置図 …… 35
fig. 30　流路－1 出土土器実測図 …… 36
fig. 31　調査地点位置図 …… 37
fig. 32　第 2 遺構面平面図 …… 38
fig. 33　第 3 遺構面平面図 …… 39
fig. 34　第 2 遺構面〔写真〕 …… 40
fig. 35　第 3 遺構面〔写真〕 …… 40
fig. 36　第 4 遺構面平面図 …… 41
fig. 37　調査地点位置図 …… 43
fig. 38　調査地区全体図 …… 44
fig. 39　出土土器実測図 …… 44
fig. 40　調査地点位置図 …… 45
fig. 41　調査地区名 …… 46
fig. 42　第 3 遺構面平面図 …… 47
fig. 43　第 4 遺構面平面図 …… 48
fig. 44　調査地点位置図 …… 49
fig. 45　Ｂ区遺構平面図 …… 49
fig. 46　石垣Ｂ〔写真〕 …… 50
fig. 47　石垣Ａ平・立面図 …… 51
fig. 48　石垣Ｂ平・立面図 …… 51
fig. 49　出土土器実測図 …… 52
fig. 50　出土土器実測図 …… 53
fig. 51　SD 02 瓦出土状況〔写真〕 …… 54
fig. 52　SD 04 土師器皿出土状況〔写真〕 …… 54
fig. 53　石垣Ｃ全景〔写真〕 …… 54
fig. 54　調査地点位置図 …… 55
fig. 55　第 4 遺構面平面図 …… 57
fig. 56　第 5 遺構面弥生時代掘立柱建物平面図 …… 59
fig. 57　第 6 遺構面平面図 …… 60
fig. 58　第 6 遺構面トレンチ配置図 …… 61
fig. 59　出土土器実測図 …… 63
fig. 60　第 5 遺構面 SD 02 出土土器実測図 …… 64
fig. 61　調査地点位置図 …… 67
fig. 62　周溝平・断面図 …… 68
fig. 63　周溝内土器出土状況 …… 68
fig. 64　調査区全景〔写真〕 …… 68
fig. 65　周溝上層及び包含層出土土器実測図 …… 69
fig. 66　周溝及び包含層出土土器実測図 …… 70
fig. 67　石器実測図 …… 70
fig. 68　周溝内下層出土土器実測図 …… 71
fig. 69　周溝内出土状況〔写真〕 …… 72
fig. 70　周溝出土土器〔写真〕 …… 72
fig. 71　調査地点位置図 …… 73
fig. 72　出土土器実測図 …… 74
fig. 73　調査地点位置図 …… 75
fig. 74　第 2 遺構面平面図 …… 76
fig. 75　第 3 遺構面平面図 …… 76
fig. 76　SB 11 平面図 …… 77
fig. 77　SB 11 全景〔写真〕 …… 77
fig. 78　SB 13 全景〔写真〕 …… 77
fig. 79　SD 201 平面図 …… 78
fig. 80　出土土器実測図 …… 79
fig. 81　出土土器実測図 …… 80
fig. 82　調査地点位置図 …… 81

fig. 83　第１遺構面平面図 …… 82
fig. 84　井戸出土土器実測図 …… 82
fig. 85　調査地点位置図 …… 83
fig. 86　Ｃ区遺構平面図 …… 85
fig. 87　Ｃ区全景〔写真〕 …… 85
fig. 88　SB 01 平・断面図 …… 86
fig. 89　SB 02 平・断面図 …… 86
fig. 90　包含層出土土器実測図 …… 86
fig. 91　調査地点位置図 …… 87
fig. 92　遺構平面図 …… 88
fig. 93　溜め池堤南北断面図 …… 89
fig. 94　溜め池全景〔写真〕 …… 90
fig. 95　溜め池堤〔写真〕 …… 90
fig. 96　余水吐 01〔写真〕 …… 91
fig. 97　余水吐 01 水位調節板〔写真〕 …… 91
fig. 98　余水吐 02 水位調節板〔写真〕 …… 92
fig. 99　樋 01〔写真〕 …… 92
fig.100　溜め池堤盛土及び盛土直下出土土器実測図 …… 93
fig.101　溜め池１出土土器実測図 …… 94
fig.102　流路 02〔写真〕 …… 95
fig.103　流路 01 出土土器実測図 …… 95
fig.104　流路 02 出土土器実測図 …… 95
fig.105　溜め池・流路出土土器〔写真〕 …… 96
fig.106　調査地点位置図 …… 97
fig.107　遺跡付近空中写真〔写真〕 …… 99
fig.108　遺構検出状況空中写真〔写真〕 …… 99
fig.109　調査区全体図 …… 100
fig.110　調査地点位置図 …… 101
fig.111　遺構平面図 …… 102
fig.112　調査地点位置図 …… 103
fig.113　SP 01 出土土器実測図 …… 104
fig.114　SP 01 平・断面図 …… 104
fig.115　SK 01 出土土器 …… 104
fig.116　調査地点位置図 …… 105
fig.117　第１遺構面平面図 …… 106
fig.118　第４－１遺構面平面図 …… 106
fig.119　第４－２遺構面平面図 …… 107
fig.120　８層出土土器実測図 …… 108
fig.121　９層出土土器実測図 …… 108
fig.122　河道出土土器実測図 …… 108
fig.123　調査地点位置図 …… 109
fig.124　鎌倉時代掘立柱建物 …… 110
fig.125　平安時代掘立柱建物 …… 110
fig.126　庄内併行期竪穴住居 …… 110
fig.127　井戸〔写真〕 …… 111
fig.128　木材化石出土状況〔写真〕 …… 111
fig.129　火山灰層中の漣痕〔写真〕 …… 112
fig.130　ヒト足跡〔写真〕 …… 112
fig.131　調査地点位置図 …… 113
fig.132　Ｂ区古墳時代住居址平面図 …… 114
fig.133　Ｃ区遺構平面図 …… 115
fig.134　Ｄ区遺構平面図 …… 115
fig.135　出土土器実測図 …… 116
fig.136　高塚山古墳群　１～15号墳位置図 …… 117
fig.137　高塚山古墳群航空写真〔写真〕 …… 118
fig.138　１号墳墳丘測量図 …… 119
fig.139　７号墳墳丘測量図 …… 119
fig.140　８号墳墳丘測量図 …… 120
fig.141　８号墳石室実測図 …… 120
fig.142　９号墳墳丘測量図 …… 121
fig.143　９号墳石室実測図 …… 121
fig.144　移築した１号墳石室〔写真〕 …… 122
fig.145　調査地点位置図 …… 123
fig.146　第１トレンチ平面図 …… 124
fig.147　第１トレンチ横穴式石室平・断面図 …… 125
fig.148　玄室床面遺物出土状況平面図 …… 126
fig.149　出土須恵器実測図 …… 128
fig.150　出土須恵器実測図 …… 129
fig.151　墳丘整備平面図 …… 130
fig.152　調査地点位置図 …… 131
fig.153　SD 401 出土土器実測図 …… 132
fig.154　調査地点位置図 …… 133
fig.155　SB 201 平・断面図 …… 134
fig.156　SD 301 平・断面図 …… 135
fig.157　SD 301 出土土器実測図 …… 136
fig.158　調査地点位置図 …… 137
fig.159　瓢塚古墳出土朝顔形埴輪〔写真〕 …… 138
fig.160　調査地点位置図 …… 139
fig.161　SR 101 出土下駄実測図 …… 140
fig.162　第３遺構面平面図 …… 141
fig.163　第４遺構面平面図 …… 141
fig.164　SR 401 出土分銅型土製品実測図 …… 142
fig.165　調査地点位置図 …… 143
fig.166　第１遺構面平面図 …… 144
fig.167　第１遺構面全景〔写真〕 …… 145
fig.168　出土土器実測図 …… 146
fig.169　調査地点位置図 …… 147
fig.170　井堰縦柱検出状況〔写真〕 …… 148
fig.171　４・５区航空写真〔写真〕 …… 149
fig.172　４・５区遺構平面図 …… 150
fig.173　SK 10 検出状況〔写真〕 …… 151

fig.174　SB 01 ～ 03 航空写真〔写真〕…… 152
fig.175　出土土器実測図 …… 154
fig.176　調査地点位置図 …… 155
fig.177　11トレンチ中央区第 2 遺構面平面図 … 156
fig.178　11トレンチ北地区第 3 遺構面平面図 … 156
fig.179　11トレンチ中央区出土土器 …… 157
fig.180　第 3 遺構面 SK 01 出土土器 …… 158
fig.181　SB 01 ～ 07 平面図 …… 159
fig.182　12トレンチ出土土器実測図 …… 160
fig.183　調査地点位置図 …… 161
fig.184　調査地区地形図 …… 162
fig.185　SB 01 平・断面図 …… 163
fig.186　SB 04 平・断面図 …… 164
fig.187　SB 02 平・断面図 …… 165
fig.188　SB 01 全景〔写真〕…… 166
fig.189　SB 02 全景〔写真〕…… 166
fig.190　SB 04 全景〔写真〕…… 166
fig.191　北地区出土土器・石器実測図 …… 168
fig.192　北区試掘地域全体図 …… 170
fig.193　八多地区試掘調査地点 …… 171
fig.194　八多（上小名田）地区試掘調査地点 … 172
fig.195　八多地区試掘調査地点 …… 172
fig.196　西畑深谷地区試掘調査地点 …… 173
fig.197　淡河・西畑地区試掘調査地点 …… 174
fig.198　淡河・中山地区試掘調査地点 …… 174
fig.199　淡河・東畑地区試掘調査地点 …… 175
fig.200　淡河・東畑地区試掘調査地点 …… 176
fig.201　淡河・北畑地区試掘調査地点 …… 177
fig.202　淡河・木津地区試掘調査地点 …… 178
fig.203　淡河・萩原地区試掘調査地点 …… 179
fig.204　淡河・本町・萩原地区試掘調査地点 … 179
fig.205　淡河・萩原地区試掘調査地点 …… 180
fig.206　西区試掘地域全体図 …… 181
fig.207　菅野地区試掘調査地点 …… 182
fig.208　菅野地区試掘調査地点 …… 183
fig.209　松本（東）地区試掘調査地点 …… 184
fig.210　松本（西）地区試掘調査地点 …… 184
fig.211　高津橋地区試掘調査地点 …… 185
fig.212　平野（玉津・田中）地区試掘調査地点 …… 186
fig.213　ロープを使って剥がし取る〔写真〕…… 187
fig.214　搬出するために巻いていく〔写真〕…… 188
fig.215　垂水・日向遺跡縄文時代後期土石流断面土層転写〔写真〕…… 188
fig.216　転写用樹脂を全体に塗布する〔写真〕…… 188
fig.217　断面から剥がし取る〔写真〕…… 188
fig.218　堆積状態が克明に観察できる〔写真〕…… 188
fig.219　垂水・日向遺跡足跡切取り　周囲を切取り梱包する〔写真〕…… 189
fig.220　室内で足跡の裏側を合成樹脂で補強する〔写真〕…… 189
fig.221　台座を固定する〔写真〕…… 189
fig.222　引っ繰り返して梱包を解くと足跡があらわれる〔写真〕…… 189
fig.223　垂水・日向遺跡縄文時代足跡 1 歩単位の切取り〔写真〕…… 190
fig.224　現地での発泡ウレタン梱包作業〔写真〕…… 190
fig.225　高塚山 8 号墳人骨及び焼土の平面転写パネル〔写真〕…… 191
fig.226　同左の砕片人骨の状態〔写真〕…… 191
fig.227　ＰＥＧ含浸の完了した木製品を取り上げる〔写真〕…… 191
fig.228　ＰＥＧ含浸の完了した木製品を接合する〔写真〕…… 191
fig.229　高塚山古墳群出土鉄鏃〔写真〕…… 192
fig.230　同左拡大（茎部に繊維が巻かれている）〔写真〕…… 192
fig.231　高塚山古墳群出土鉄鏃の茎部〔写真〕…… 192
fig.232　同左拡大（矢柄と繊維の痕跡が見える）〔写真〕…… 192

Ⅰ．平成４年度　事業の概要

１．普及啓発事業

〔神戸市埋蔵文化財センター〕

平成３年９月に開館した神戸市埋蔵文化財センターは、「よみがえる神戸の歴史」を常設展示しており、隣接する収蔵展示室には、約3,000点の土器を並べ、見学コースに入れており、その圧倒的な量で研究者のみならず、一般見学者からも好評を得ている。当年度中の入館者は、46,564人であった。

企画展示は、「西神第65地点遺跡出土銅鐸鋳型展」を平成４年４月７日から５月10日まで開催した。埋蔵文化財センターの西約1.5㎞の、弥生時代中期の高地性集落である西神ニュータウン内第65地点遺跡から出土した、銅鐸鋳型２点の速報展である。この期間中の入館者は、11,781人であった。

市民への公報活動として、埋蔵文化財センターの最寄り駅のビル内において、10月31日から11月８日の間、「古代からのメッセージ」と題し、パネル等の展示を行った。入場者数は、1,506人であった。

なお、埋蔵文化財センターが所在する西神中央公園の整備に伴い、高塚山古墳群第１号墳の横穴式石室を移築、埴輪・銅鐸のレプリカを設置、「歴史と樹木の学習オリエンテーリング」用に植栽を行った。

〔文化財保護強調月間の催し〕

大歳山遺跡公園（垂水区西舞子坂４丁目）では例年どおり、11月１日から11月７日までの間、復元した竪穴住居の内部の公開とともに、古代人の生活の一部を実際に体験できるよう、火おこし、脱穀等を行った。７日間の参加者は1,200人であった。

なお、昭和49年に復元した竪穴住居も９年を経過し、茅の傷みが著しく、当年度に全面葺き替えを実施した。

〔地域活動への参加〕

市内各地の公民館や学校では、さまざまな地域・文化活動が行われているが、各地域の歴史を地元の方々に知っていただくことを目的に、周辺遺跡の出土遺物や写真パネルの展示会を開催している。今年度は以下の場所で文化財展を行った。

(1)　西区玉津南公民館「文化財展」（５月23日～５月29日）

今年度で８回目の文化財展で、同公民館の近隣に位置する新方遺跡の遺物を展示した。

(2)　北区長尾町公民館　第７回長尾町埋蔵文化財展（11月１日～11月３日）

長尾町内の発掘調査で発見された、７世紀築造の溜池出土遺物を中心に「長尾古池物語－古い『岡堂池』の発見－」と題し展示した。

〔現地説明会の開催〕

埋蔵文化財の調査、保存に欠くことのできない市民への普及・啓発活動である現地説明会を、下記の５遺跡で開催し、多数の参加者を得た。

遺跡名	開催年月日	参加人数
１．狩口台きつね塚古墳	平成４年４月26日	1,000人

2．垂水・日向遺跡	平成４年７月19日	2,400 人
3．宅原遺跡宮ノ元地区	平成４年８月30日	53 人
4．二ツ屋遺跡	平成４年９月23日	330 人
5．西求女塚古墳	平成５年３月28日	雨天中止

神戸市立西灘小学校において、スライド説明、遺物展示を行った。

〔刊行物〕

平成４年度の埋蔵文化財関係の刊行物は以下の４点である。

1．大開遺跡　発掘調査報告書	頒価 4,000 円
2．平成２年度　神戸市埋蔵文化財年報	頒価 2,500 円
3．平成元・３年度　遺跡現地説明会資料	頒価　300 円
4．神戸市埋蔵文化財センター常設展示案内	頒価　500 円

2．文化財調査事業

埋蔵文化財発掘調査件数は、全国的に増加し、当市においてもその傾向は同様である。平成４年度の調査件数は78件で、発掘調査面積は 60,968 ㎡、調査に要した経費は12億７千６百万円である。当市の近年の傾向として、調査対象面数の増加があげられる。発掘調査対象面積 60,968 ㎡に対し、延発掘調査面積は 105,426 ㎡である。調査精度の向上もさることながら、近世遺構面及び縄文時代遺構面への積極的取組みがあげられる。近世の遺構については、江戸、大阪城下のようなきわだった成果はないが、地道な積み重ねによって、将来その成果は認められるであろう。また縄文時代については、低地においてほとんど不明であったものが、現地表下数ｍで遺跡の存在が徐々に明らかになりつつある。

開発に伴う埋蔵文化財分布調査は 251 件で、それに基づく試掘調査は 208 件であった。分布調査件数は、その時代を反映して減少傾向にあるのに対し、試掘調査件数は増加している。これは、都市化した部分における遺跡の存否確認には、試掘調査が最良の手段であるとの認識から、その徹底がはかられているからである。

その結果、古くから市街地化している東灘・灘・中央・兵庫・長田・須磨・垂水では、小規模な調査が大部分であるにもかかわらず、確認遺跡数の増加により、調査面積では30％を占めている。

公共事業と民間事業の比率を発掘対象面積で比較してみると、圧倒的に公共事業が多く、85％を占めている。中でも圃場整備関連事業が17％、区画整理および再開発関連事業が18％を占め、神戸市の現状を如実に示しているといえよう。

3．市内発掘調査の概要

本年度調査の成果には、トピックス的なものはない。しかし、各遺跡を理解していく上で重要なものが数多く含まれている。調査次数を重ねることにより、自然環境も含めた歴史的環境の復元がより詳細にできるようになってきている。縄文時代においては、垂水・日向遺跡の調査成果は、各方面から注目されるべきもので、多量の大型植物化石、Ｔ．Ｐ．２ｍ前後に堆積したアカホヤ火山灰層中の漣痕、干潟を歩くヒトの足跡などである。特に漣痕は、縄文海進を直接的に示すものとして高く評価されるものであろう。

弥生時代の遺跡では、前期の環濠集落として著名になった大開遺跡において、近接地で、環濠内で確認した竪穴住居と土器編年上は同時期の竪穴住居を検出している。居住域が環濠内で完結していないと理解するなら、環濠のもつ意味を考える上で重要な問題を提起す

るものになる。現在の考古学レベルで、同時期とできるものが同時であるか否かという証明は困難であるが、環濠の存続期間とともに、その存在意義を考える上で重要な資料である。

古墳時代は、高塚山古墳群で、「馬」に次いで「魚」の線刻画を確認した。また、T字形で複室構造をもつ石室や、石室内における火葬が明らかになった。これらは、ただ単に稀有なものとしてとらえるより、築造主体となった集団の出自等を解き明かす必要をせまられたことになる。

奈良時代は、宅原遺跡宮ノ元地区において、溜池を検出した。この溜池は小規模なものであるが、奈良時代に築造され、鎌倉時代に至るまで幾度かの修築を経て、連続して使用されていたことが確認された。この遺跡では、かねてより「評」「五十戸」などの墨書土器が出土しており、また今回人面墨描土器が出土し、律令組織と直接的に関わりのあったことをうかがわせる資料を追加した。

平安時代およびそれ以降では、掘立柱建物を中心に、数多くの遺跡で資料が増加している。垂水・日向遺跡では、調査次数を重ねるにしたがい、建物配置が明らかになってきてはいるが、文献に見られる東大寺領「垂水荘」との関連については、未だ結論に近づけない。また、二ツ屋遺跡における礎石建物と、その両側に置かれた掘立柱建物は、貴族の館を思わせるものである。当遺跡の位置から見た、これらの建物群の性格の解明が待たれる。

なお、様々な遺跡で資料増加の著しい建物遺構の方位と方画地割の発生時期および相関性については、重要課題であるが、未だ追求されていない。

以上のように、資料の蓄積は確実になされているが、資料の分析から結論を導くまでには至っていない。これは報告書の刊行によって、ひろく検討されることが、より近道であることを考えれば、調査件数にしめる当市の報告書刊行数は、いかにも少なすぎよう。

平成４年度埋蔵文化財発掘調査一覧表　(1)

No.	遺　跡　名	所　在　地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	本庄町遺跡	東灘区深江北町３丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	斎木　巌	100㎡ 200㎡	4. 8.17～ 4. 9.22	水田層、堤間低地の木製品	幼稚園建設
2	出口遺跡第２次調査	東灘区本山北町１丁目	神戸市教育委員会	富山直人	140㎡	5. 3.15～ 5. 3.27	弥生時代土坑、中世ピット	道路立体改良
3	本山遺跡第14次調査	東灘区本山南町８丁目	神戸市教育委員会	菅本宏明 石島三和	629㎡ 2,041㎡	4. 6.11～ 4.12.18	弥生前期～中期　自然流路、土坑、ピット	ビル建設
4	東求女塚古墳	東灘区住吉南町３丁目	神戸市教育委員会	内藤俊哉	80㎡	4. 8.31～ 4. 9.10	古墳時代流路１条、時期不明ピット	共同住宅建設
5	住吉宮町遺跡第15次調査	東灘区住吉宮町７丁目	神戸市教育委員会	内藤俊哉	50㎡	5. 1.18～ 5. 1.26	中世遺物包含層、土石流	個人住宅建設
6	郡家遺跡篠之坪地区第５次調査	東灘区御影町御影字篠之坪	神戸市教育委員会	西岡誠司	140㎡ 420㎡	4. 2. 4～ 4. 4.18	古墳時代流路２条、竪穴住居１棟・土坑３基・溝１条・ピット、弥生時代後期の竪穴住居１棟・土坑	共同住宅建設
7	郡家遺跡篠之坪地区第６次調査	東灘区御影町御影字篠之坪	神戸市教育委員会	西岡巧次	120㎡ 480㎡	4. 3. 2～ 4. 5. 7	弥生時代後期河道、古墳時代後期竪穴住居４棟	個人住宅建設
8	郡家遺跡篠之坪地区第７次調査	東灘区御影町御影字篠之坪	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	20㎡	4. 6. 9～ 4. 6.12	古墳時代流路	区画整理
9	郡家遺跡篠之坪地区第８次調査	東灘区御影町御影字篠之坪	神戸市教育委員会	内藤俊哉	30㎡ 45㎡	4.11.10～ 4.11.12	古墳時代前期流路、古墳時代の土坑１基	区画整理
10	郡家遺跡篠之坪地区第９次調査	東灘区御影町御影字城之前、篠之坪	神戸市教育委員会	川上厚志	12㎡	5. 3.10～ 5. 3.17	範囲確認調査	共同住宅建設
11	篠原遺跡第７次調査	灘区篠原北町３丁目	神戸市教育委員会	西岡巧次	80㎡ 400㎡	4. 8. 4～ 4. 9.25	縄文後晩期土器、古墳時代竪穴住居３棟、掘立柱建物１棟、落ち込み、ピット	個人住宅建設
12	篠原遺跡第８次調査	灘区篠原北町２丁目	神戸市教育委員会	菅本宏明	220㎡	5. 2.17～ 5. 3.28	弥生時代後期竪穴住居１棟、土坑、ピット	地域福祉センター建設
13	都賀遺跡第３次調査	灘区神前町４丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	西岡誠司	600㎡ 1,900㎡	4. 7.13～ 5. 3.29	弥生後期方形周溝墓４基、古墳時代竪穴住居４棟、中世掘立柱建物２棟	市営住宅建設
14	五毛遺跡	灘区五毛通１丁目	神戸市教育委員会	富山直人	450㎡ 900㎡	5. 1. 6～ 5. 3. 8	中世石垣、ピット、瓦	個人住宅建設
15	西求女塚古墳	灘区都通３丁目	神戸市教育委員会	安田　滋 石島三和	360㎡	5. 1.22～ 5. 3.31	後円部埋葬施設（竪穴式石室）確認 墳丘地滑りの跡、墳砂	復元整備
16	吾妻遺跡	中央区日暮通５丁目	神戸市教育委員会	内藤俊哉	1,420㎡	5. 2. 1～ 5. 3.31	中世ピット	老人健康センター他建設
17	雲井遺跡第４次調査	中央区旭通５丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	安田　滋 藤井太郎	㎡		遺物整理のみ	区画整理
18	雲井遺跡第５次調査	中央区旭通５丁目	神戸市教育委員会	富山直人	83㎡	4. 4.15～ 4. 4.27	縄文土器、弥生時代溝、中世ピット・土坑	医院兼個人住宅建設
19	旧三宮駅構内遺跡	中央区北長狭通４丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	山口英正	700㎡	4. 4. 1～ 4. 4.19	近代土坑・溝・柱穴 土人形	中学校校舎建設
20	旧三宮駅構内遺跡	中央区北長狭通４丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	阿部敬生	5㎡	4. 6. 9	中世　須恵器・土師器 遺構なし	中学校防球ネット建設
21	楠・荒田町遺跡第11次	兵庫区荒田町２丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	黒田恭正 阿部敬生	4,800㎡ 24,547㎡	4. 5. 7～ 5. 3.31	縄文時代土坑、弥生中期掘立柱建物 壷棺・溝・中世掘立柱建物	地下駐車場建設
22	楠・荒田町遺跡第12次	兵庫区楠町６丁目	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	40㎡	4. 5.11～ 4. 5.28	弥生時代中期　周溝墓	共同住宅建設

平成４年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (2)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
23	大開遺跡第３次	兵庫区塚本通２丁目	神戸市教育委員会	内藤俊哉	450㎡ 1,200㎡	4. 4.17～ 4. 8. 8	弥生前期以前のピット、弥生時代前期竪穴住居３棟・溝・土坑 中世掘立柱建物	ビル建設
24	大開遺跡第４次	兵庫区水木通４丁目	神戸市教育委員会	富山直人	130㎡ 260㎡	4. 9. 4～ 4. 9.22	中世　ピット・溝・井戸５基	ガソリンスタンド建設
25	塚本遺跡	兵庫区塚本通６丁目	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	200㎡ 250㎡	4. 8.25～ 4. 9.23	弥生時代中期　溝 中～近世遺構・遺物	共同住宅建設
26	水木遺跡第２次	兵庫区水木通９丁目	神戸市教育委員会	藤井太郎	730㎡	4.10. 5～ 4.11.13	中～近世水田	小学校校舎改築
27	龍ケ坪遺跡	北区大沢町市原字宇滝	(財)神戸市スポーツ教育公社	斎木　巌	44㎡	4. 7.15～ 4. 7.21	文化財なし	道路改良
28	龍ケ坪遺跡	北区長尾町上津字龍ケ坪	神戸市教育委員会	斎木　巌	75㎡	5. 1.25～ 5. 1.29	遺物包含層	道路改良
29	龍ケ坪遺跡	北区長尾町上津字龍ケ坪	神戸市教育委員会	西岡巧次	600㎡	5. 3.23～ 5. 3.31	次年度継続	道路改良
30	上津遺跡	北区長尾町上津字三谷垣内	(財)神戸市スポーツ教育公社	黒田恭正	300㎡	4. 4. 6～ 4. 4.24	中世水田	道路改良
31	上津遺跡	北区長尾町上津字三谷垣内	神戸市教育委員会	富山直人 藤井太郎	1,400㎡	4. 6. 1～ 4. 7.21	中世掘立柱建物・土坑・溝	土地改良
32	宅原遺跡宮ノ元地区第６次調査	北区長尾町宅原岡堂	神戸市教育委員会	須藤　宏	2,200㎡ 2,695㎡	4. 5. 6～ 4.11.25	飛鳥時代流路 奈良時代～中世溜池 中世掘立柱建物１棟	街路築造
33	北神２・３地点遺跡第４次調査	北区道場町日下部	(財)神戸市スポーツ教育公社	安田　滋	215㎡	4. 9. 8～ 4.10. 5	トレンチ調査 墳丘断ち割り	区画整理
34	北神第４地点遺跡	北区長尾町宅原字上龍ケ谷	(財)神戸市スポーツ教育公社	斎木　巌	1,100㎡	3.12. 2～ 4. 6.12	弥生時代中期　竪穴住居 土坑、ピット、溝	公園整備
35	日下部北遺跡	北区道場町日下部	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	40㎡	4. 8.11～ 4. 8.20	中世遺物	宅地造成
36	日下部北遺跡	北区道場町日下部	(財)神戸市スポーツ教育公社	山口英正	150㎡	4. 9.14～ 4.10. 1	古墳時代～中世の耕土層 時期不明溝	自歩道設置
37	上小名田遺跡	北区八多町上小名田字フケ　他	神戸市教育委員会	西岡誠司	240㎡	4. 5. 1	試掘調査　中～近世の遺物包含層	土地改良
38	上小名田遺跡第８次調査	北区八多町上小名田	(財)神戸市スポーツ教育公社	山口英正	390㎡	4.10.16～ 4.11.11	平安～鎌倉　柱穴・土坑	自歩道設置
39	上小名田遺跡第９次調査	北区八多町上小名田字ココノ木　他	神戸市教育委員会	斎木　巌 浅谷誠吾	1,000㎡	4.11.16～ 5. 1. 5	試掘調査 中世ピット・土坑・溝	土地改良
40	上小名田遺跡第10次調査	北区八多町上小名田	神戸市教育委員会	菅本宏明 石島三和	500㎡	5. 1. 6～ 5. 2.10	平安時代末～鎌倉時代 掘立柱建物・河川跡・土坑・ピット	土地改良
41	八多遺跡	北区八多町	神戸市教育委員会	富山直人 前田佳久	890㎡	4.12.14～ 4.12.24 5. 3.18～ 5. 3.30	試掘調査	公園建設
42	中遺跡	北区八多町中字平井	神戸市教育委員会	松林宏典 阿部敬生	770㎡	4. 4.14～ 4. 5.26	中世ピット・溝・土坑、弥生後期	土地改良
43	深谷遺跡	北区八多町深谷	神戸市教育委員会	須藤　宏	800㎡	4.12. 8～ 4.12.28	中世遺物包含層 流路２条	土地改良
44	西畑遺跡	北区八多町西畑	神戸市教育委員会	須藤　宏	270㎡	5. 1. 6～ 5. 1.28	試掘調査	土地改良

平成４年度埋蔵文化財発掘調査一覧表　(3)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
45	屏風遺跡	北区八多町屏風	神戸市教育委員会	西岡巧次 藤井太郎	350㎡ 450㎡	4. 6.16～ 4. 6.26 4.12. 7～ 5. 1.23	中世　柱穴・土坑・溝 近世　土坑・溝	道路建設
46	八多遺跡	北区八多町西畑、深谷	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	160㎡	4. 4.13～ 4. 4.17	試掘調査	土地改良
47	淡河中山遺跡	北区淡河町中山	神戸市教育委員会	西岡誠司	128㎡ 242㎡	4. 5.25～ 4. 5.28	試掘調査 中世の溝・土坑・落ち込み	土地改良
48	淡河地区	北区淡河町中山木津、東畑、本町、萩原	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	中山 300㎡ 木津 770㎡ 東畑 520㎡ 本町・萩原 170㎡	4.11.30～ 5. 2.25 5. 3. 9	試掘調査 中世の溝・ピット等	土地改良
49	萩原遺跡	北区淡河町萩原	神戸市教育委員会	富山直人	460㎡	4. 5. 8～ 4. 5.17 4.11.27～ 4.12.14	試掘調査 中近世の城跡	土地改良
50	北畑遺跡	北区淡河町北畑	神戸市教育委員会	富山直人	640㎡	4. 5.18～ 4. 5.29	試掘調査 中世遺物包含層	土地改良
51	淡河本町遺跡	北区淡河町本町	神戸市教育委員会	富山直人	150㎡	4. 8.17～ 4. 8.27	試掘調査　文化財なし	土地改良
52	行原遺跡	北区淡河町行原字中沢	(財)神戸市スポーツ教育公社	斎木　巌	1,110㎡	4. 9.28～ 4.11. 9	溝、ピット	中学校建設
53	山田・中遺跡	北区山田町中字大沢	神戸市教育委員会	内藤俊哉	60㎡	4.12. 1～ 4.12. 7	中世焼土坑・ピット、近世耕作痕・溝１条	個人住宅建設
54	五番町遺跡	長田区六番町	(財)神戸市スポーツ教育公社	池田　毅	170㎡ 510㎡	4. 9. 2～ 4.10. 9	縄文河道、中世溝・土坑・ピット、近世畝状遺構	市営住宅建設
55	三番町遺跡	長田区三番町３丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	内藤俊哉	130㎡	4. 9.21～ 4.10.22	古墳時代溝１条、時期不明自然流路	市営住宅建設
56	戎町遺跡	須磨区大黒町３丁目	神戸市教育委員会	菅本宏明 石島三和	110㎡ 550㎡	4. 4.20～ 4. 6. 4	弥生前期～中期　河川跡・土坑・ピット、中世獣足痕	立体駐車場建設
57	垂水区日向遺跡第７次	垂水区日向１丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	丸山　潔 井尻　格	1,100㎡ 5,800㎡	4. 2.12～ 4. 7.31	縄文早期　ヒトの足跡 縄文後期　洪水層 縄文前期　アカホヤ火山灰層中漣痕 弥生終末期　竪穴住居 平安前～後期　掘立柱建物群	駅前再開発
58	垂水区日向遺跡第８次	垂水区日向１丁目	(財)神戸市スポーツ教育公社	丸山　潔 池田　毅	900㎡ 5,175㎡	4. 9.16～ 5. 3.29		
59	垂水区日向遺跡 天ノ下地区	垂水区天ノ下町	(財)神戸市スポーツ教育公社	丹治康明	500㎡ 820㎡	4. 7. 1～ 4. 9.11	古墳時代中期　竪穴住居２棟・溝１条、平安時代掘立柱建物１棟	街路築造
60	垂水区日向遺跡 天ノ下地区	垂水区天ノ下町	(財)神戸市スポーツ教育公社	山口英正	100㎡	5. 1.20～ 5. 2. 4	古墳時代中期流路	街路築造
61	高塚山古墳群第２次調査	垂水区多聞町字小東山	神戸市教育委員会	丹治康明 橋詰清孝	4,000㎡	3.12. 3～ 4. 5. 8	円墳４基 古墳時代後期横穴式石室 線刻、火葬址	資材置場造成
62	狩口台きつね塚古墳	垂水区狩口台７丁目	神戸市教育委員会	山本雅和	175㎡	4. 2.29～ 4. 5.21	横穴式石室、組合式家形石棺、金銅装馬具、直径52ｍの外濠	復元整備
63	押部遺跡	西区押部谷町押部字東垣内	神戸市教育委員会	西岡巧次	250㎡	4. 6.30～ 4. 7.28	鎌倉時代柱穴	個人住宅建設
64	西神Ｎ.Ｔ.65地点遺跡	西区樫野台１丁目	神戸市教育委員会	安田　滋 山口英正	10,750㎡	4. 4. 1～ 4. 9. 1	弥生時代中期高地性集落 竪穴住居６棟・土器・石器 中世焼土坑	宅地造成
65	堅田遺跡第３次調査	西区平野町堅田	神戸市教育委員会	須藤　宏	820㎡	4. 1.16～ 4. 4.28	弥生・古墳時代竪穴住居・柱穴・土坑・溝　中世　溝	自歩道設置

平成４年度埋蔵文化財発掘調査一覧表 (4)

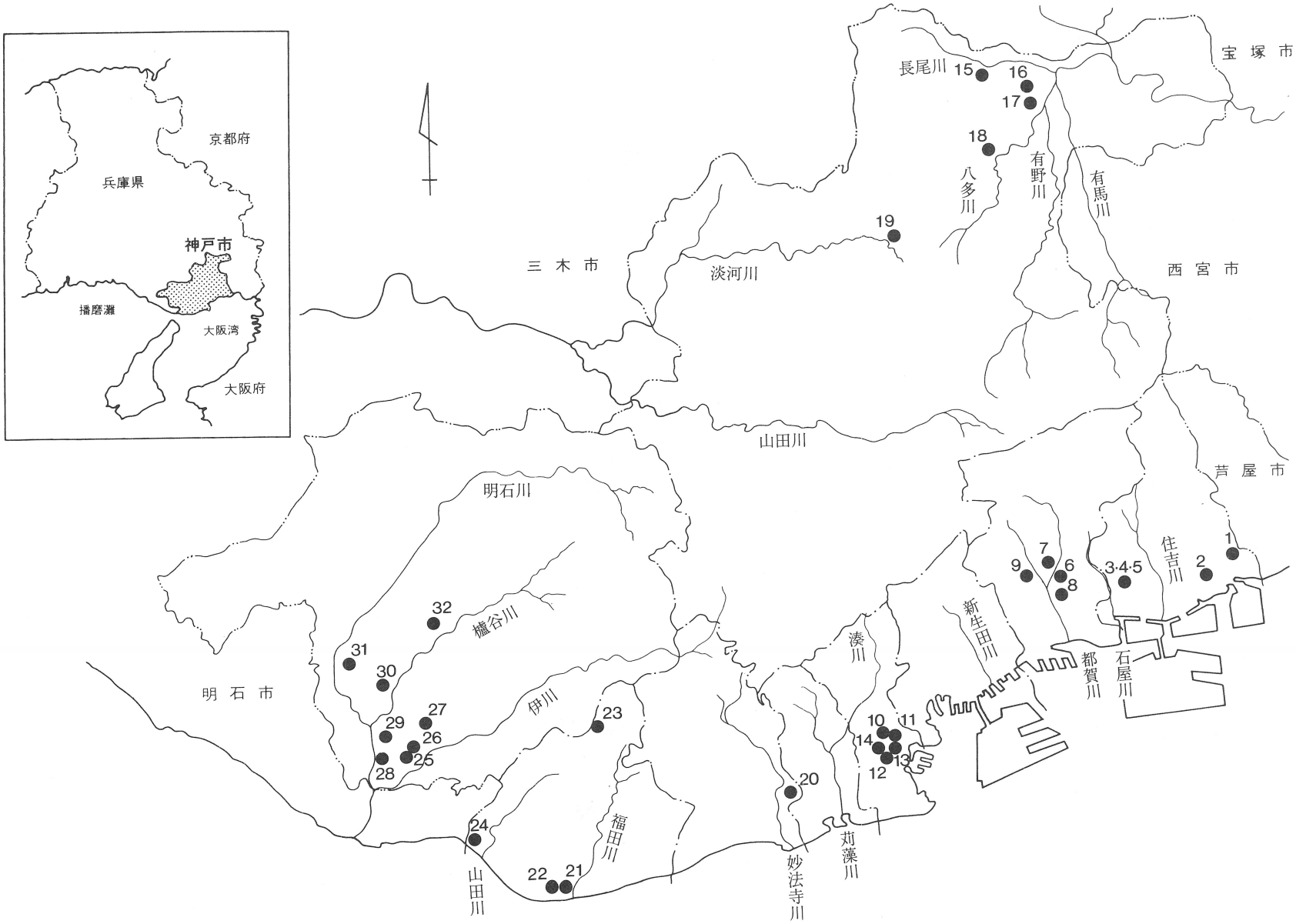
No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
66	堅田遺跡第４次調査	西区平野町堅田	神戸市教育委員会	西岡巧次	900㎡ 1,500㎡	4.11. 6～ 5. 3.19	弥生後期、古墳時代後期柱穴、平安前期柱穴・土坑、鎌倉柱穴群	自歩道設置
67	西戸田遺跡	西区平野町西戸田	神戸市教育委員会	藤井太郎	230㎡	4. 5.19～ 4. 6.11	鎌倉時代溝・土坑等	汚水管敷設
68	玉津田中遺跡第６次調査	西区平野町福中・中津・大野	神戸市教育委員会	山本雅和 山口英正 川上厚志	3,491㎡ 7,491㎡	4. 4.21～ 4.12. 8	弥生前期溝３条、中世水田・溝 弥生後期～布留までの集落址	土地改良
69	如意寺塔頭址	西区櫨谷町谷口	神戸市教育委員会	池田　毅	87㎡	4. 4.27～ 4. 5.15	中世後期溝・ピット・土坑・落ち込み	農道設置
70	菅野遺跡	西区櫨谷町菅野	神戸市教育委員会	富山直人	550㎡	4.11. 2～ 4.11.18	試掘調査 弥生土器・石器、中世土器	土地改良
71	松本遺跡	西区櫨谷町松本	神戸市教育委員会	井尻　格	130㎡	4. 4.15～ 4. 4.30	試掘調査	土地改良
72	松本遺跡	西区櫨谷町松本	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	200㎡	4.11. 4～ 4.11.18	近世遺構・遺物	土地改良
73	川重裏山遺跡	西区櫨谷町松本字下谷	(財)神戸市スポーツ教育公社	松林宏典	400㎡	4. 6.24～ 4. 7.10 4. 7.27～ 4. 8. 7	近世墓３基、近世落ち込み１	道路改良
74	二ツ屋東遺跡第３次調査	西区玉津町二ツ屋	(財)神戸市スポーツ教育公社	井尻　格	110㎡	4.12. 7～ 5. 1.12	弥生時代　流路、平安時代　流路、弥生時代　土坑２・落ち込み１	道路改良
75	二ツ屋遺跡	西区玉津町二ツ屋	(財)神戸市スポーツ教育公社	前田佳久 井尻　格	7,320㎡ 10,500㎡	4. 4. 1～ 4.12.22	古墳～中世の土坑・溝・ピット多数 礎石建物１棟、掘立柱建物６棟	区画整理
76	白水瓢塚古墳	西区伊川谷町潤和字シンド山	神戸市教育委員会	山本雅和	230㎡	4.12.14～ 5. 1. 5	試掘調査（範囲確認） 埴輪円筒棺１基	宅地造成
77	白水遺跡	西区伊川谷町潤和字池ノ尻	神戸市教育委員会	藤井太郎	80㎡ 160㎡	4.11.17～ 4.12. 3 5. 2. 6～ 5. 2.24	弥生後期　竪穴住居 平安後期　溝	倉庫建設
78	今池尻遺跡	西区伊川谷町潤和字合木	神戸市教育委員会	藤井太郎	40㎡ 80㎡	4.11.24～ 4.12. 3 5. 2. 1～ 5. 2. 5	弥生後期　土坑 平安後期　溝	倉庫建設
79	潤和遺跡第３次調査	西区伊川谷町潤和字平田	神戸市教育委員会	阿部敬生	8㎡	4. 4.11		
80	新方遺跡	西区伊川谷町潤和字平松	神戸市教育委員会	藤井太郎	80㎡	5. 2. 4～ 5. 2. 7	中世遺物	倉庫建設
81	新方遺跡北方地点第２次調査	西区玉津町新方字北方	神戸市教育委員会	松林宏典	180㎡ 720㎡	4. 9. 7～ 4.12.11	弥生中期　溝・土坑 古墳時代　溝、中世　自然流路	街路築造
82	出合遺跡第29次調査	西区玉津町出合	神戸市教育委員会	浅谷誠吾	168㎡	4. 6.17～ 4. 6.30	中世遺物	個人住宅建設
83	今津遺跡第４次調査	西区玉津町高津橋字阪下	神戸市教育委員会	橋詰清孝	320㎡ 640㎡	4. 4. 7～ 4. 6.10	弥生時代中期土坑・落ち込み、中世掘立柱建物４棟・井戸１基・土坑	共同住宅建設
84	今津遺跡	西区玉津町高津橋字高町　他	(財)神戸市スポーツ教育公社	松林宏典	48㎡	4. 7.15～ 4. 7.21	試掘調査	区画整理
85	本庄町遺跡	東灘区本庄町２丁目	高山歴史学研究所	高山正久	300㎡	4.12.21～ 5. 6.10	縄文中・後期　土器	共同住宅建設
86	八幡遺跡	灘区八幡町１－８	八幡遺跡調査団	村尾政人	409㎡	5. 2. 4～ 5. 3.30	古墳時代　竪穴住居 中・近世　溝、土坑、柱穴	共同住宅建設
87	上津遺跡	北区長尾町上津	妙見山麓遺跡調査団	神崎恵子	2,300㎡	4.11. 5～ 5. 3.13	鎌倉時代　掘立柱建物、溝	土地改良

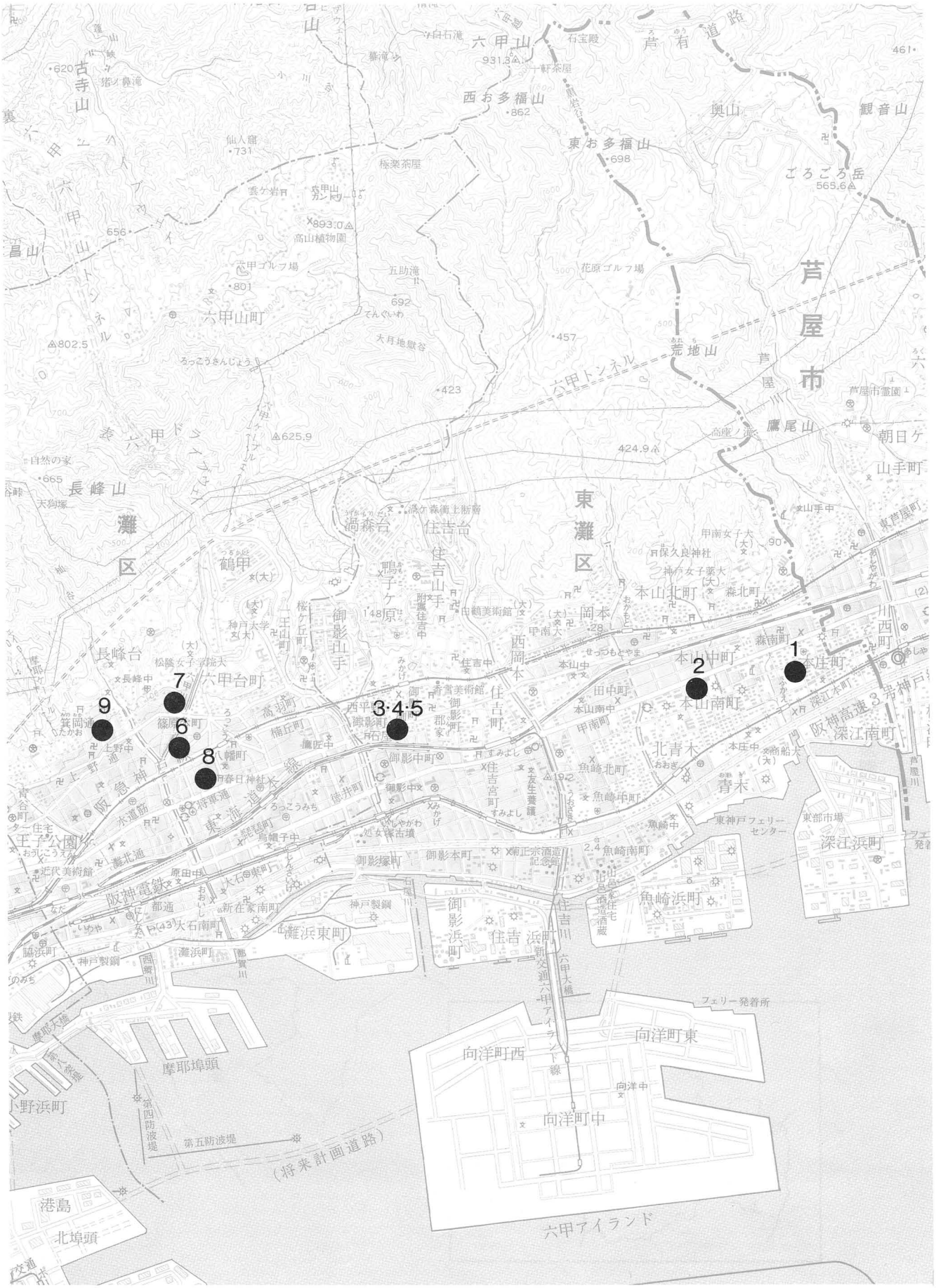
平成４年度埋蔵文化財発掘調査一覧表　(5)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	掘削面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
88	天王山古墳群	北区長尾町	神戸女子大学遺跡調査会	藤井利章	7,500㎡	4. 6. 1～ 5. 4.16	前期古墳　4基　割竹形木棺 後期古墳　2基　横穴式石室	資材置場造成
89	下小名田遺跡	北区八多町下小名田	妙見山麓遺跡調査団	神崎　勝	3,500㎡	4. 6.22～ 4.10.10	古墳時代末　掘立柱建物 平安時代末　掘立柱建物	道路改良
90	下小名田遺跡	北区八多町下小名田字四反廻	下小名田遺跡調査団	村尾政人	1,875㎡ 3,750㎡	4.10.19～ 4.12.26	古墳時代終末～奈良時代　大溝 平安時代末　掘立柱建物	道路改良
91	屏風遺跡	北区八多町屏風	妙見山麓遺跡調査団	神崎　勝	2,400㎡	4.10.19～ 5. 2.18	縄文時代　土器・石器 室町時代　溝	レジャー施設
92	萩原遺跡	北区淡河町萩原	萩原遺跡調査団	阿部嗣治	2,293㎡	4. 5. 1～ 4.10. 7	平安～鎌倉時代　溝、土坑、柱穴	土地改良
93	萩原遺跡	北区淡河町萩原	萩原遺跡調査団	阿部嗣治	2,316㎡	4.12.24～ 5. 3.31	平安～鎌倉時代　溝、土坑、柱穴	土地改良
94	小部北ノ谷遺跡	北区山田町小部	高山歴史学研究所	高山正久	140㎡	4.10.12～ 4.11.10		街路築造
95	垂水日向遺跡 天ノ下地区	垂水区天ノ下町	妙見山麓遺跡調査団	神崎　勝	442㎡	4. 4.17～	古墳時代前期　竪穴住居９棟 中世前半期　溝、土坑、柱穴	駅前再開発
96	垂水日向遺跡 天ノ下地区	垂水区天ノ下町	妙見山麓遺跡調査団	神崎　勝	380㎡	5. 2.22～ 5. 4.26	古墳時代前期　竪穴住居４棟	駅前再開発
97	垂水日向遺跡 天ノ下地区	垂水区天ノ下町	妙見山麓遺跡調査団	神崎　勝	290㎡	4. 8.20～ 4.10.24	古墳時代中期　大溝 古墳時代後期　竪穴住居	駅前再開発
98	舞子浜遺跡	垂水区東舞子町	高山歴史学研究所	高山正久	600㎡	4. 4. 2～ 4. 4.28	縄文土器、埴輪片	街路築造
99	木幡遺跡	西区押部谷町木幡	妙見山麓遺跡調査団	神崎恵子	1,600㎡	4. 3.17～ 4. 7.18	鎌倉時代　掘立柱建物、溝	土地改良
100	玉津田中遺跡	西区平野町中津	玉津田中遺跡調査団	阿部嗣治	1,398㎡	4. 4. 6～ 4. 9.30	弥生後期　竪穴住居、溝、土坑	土地改良
101	玉津田中遺跡	西区平野町福中	玉津田中遺跡調査団	阿部嗣治	1,140㎡	4. 9.30～ 4.12.24	弥生後期　竪穴住居、溝、土坑	土地改良
102	長坂遺跡	西区伊川谷町長坂字文蔵	兵庫県教育委員会	井守徳男 別府洋二 鐵　英記	7,583㎡	4. 5. 1～ 4.11. 5	縄文時代　土坑４基、柱穴、流路 古墳時代前期　住居址６棟、溝、掘立柱建物、土坑 古墳時代後期　溝、土坑 中世以降　水田、土坑	道路建設
103	神戸大学医学部付属病院構内遺跡	中央区楠町７丁目	兵庫県教育委員会	久保弘幸 深江英憲	1,251㎡	4. 7. 7～ 4.10.30	鎌倉時代　礎石、瓦	病棟建設
104	宮ノ沢城跡	北区淡河町北畑字宮ノ沢　他	兵庫県教育委員会	高瀬一喜 多賀茂治	2,949㎡	4.12.10～ 5. 3.25	中世山城　曲輪	道路建設

平成４年度　神戸市埋蔵文化財調査地位置図

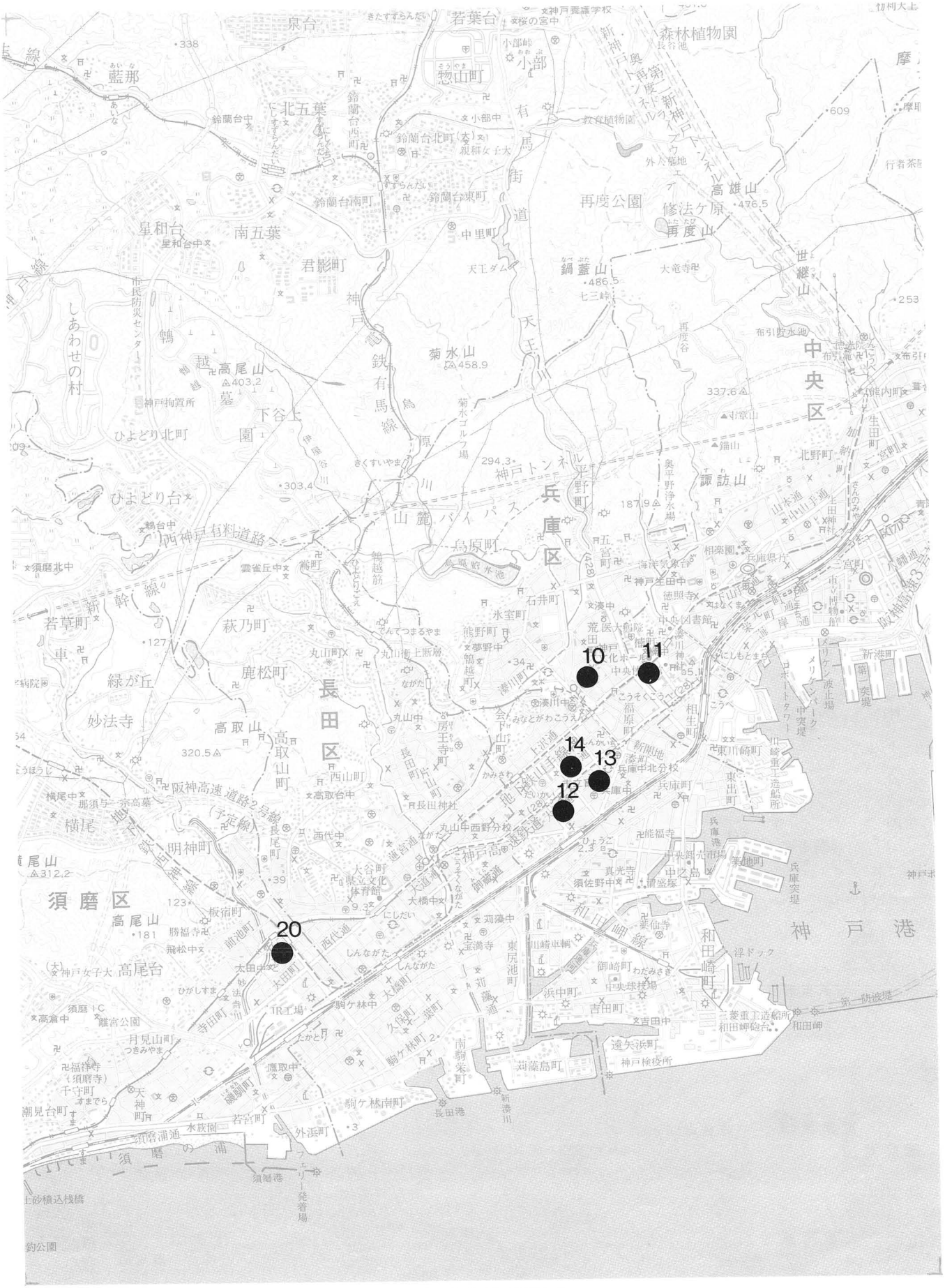
（各遺跡の番号は掲載遺跡と一致）



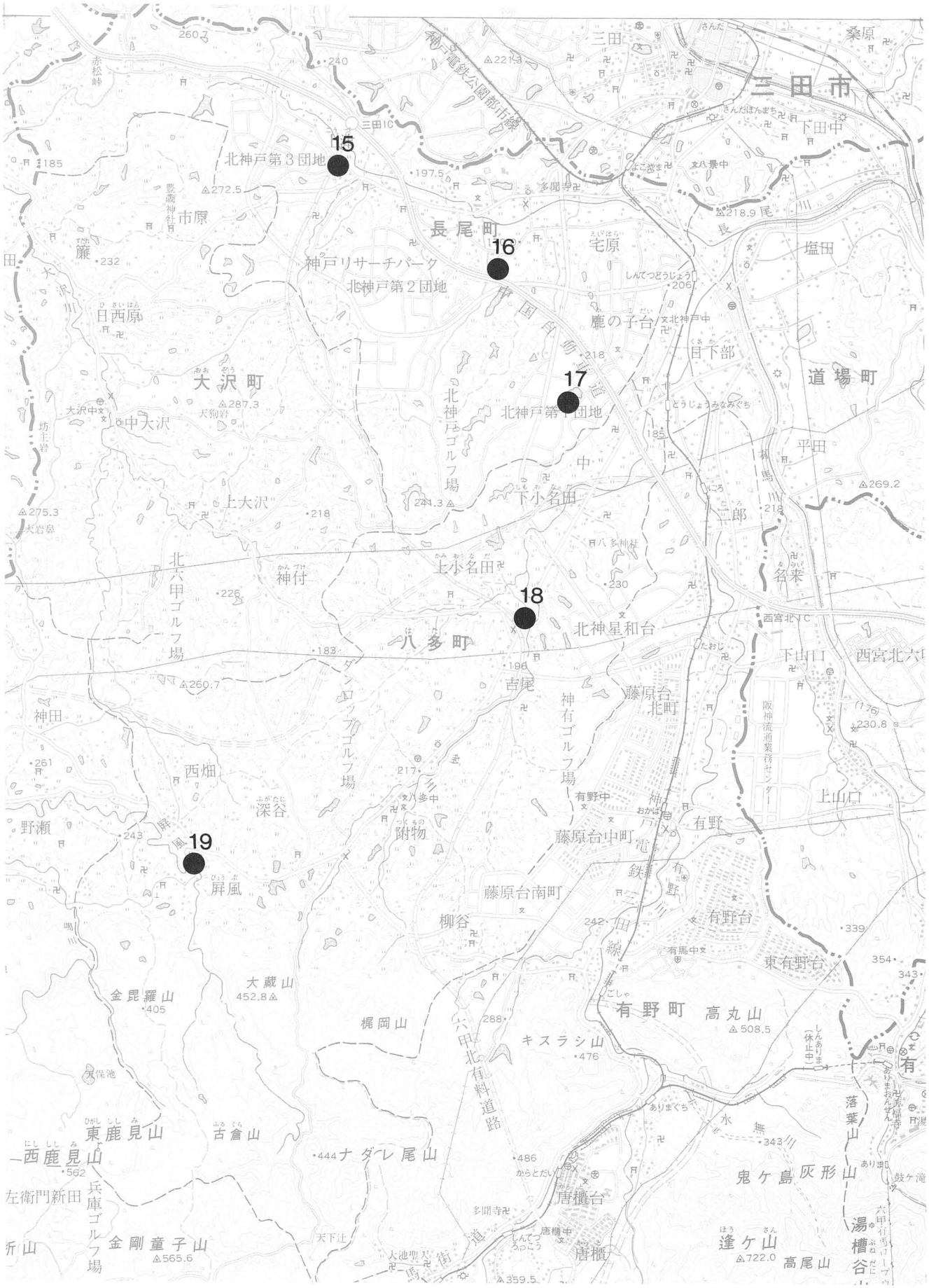


1
2
3·4·5
6
7
8
9
六甲山
西お多福山
東お多福山
芦有道路
奥山
観音山
ごろごろ岳
芦屋市
荒地山
鷹尾山
朝日ケ
山手町
六甲山町
六甲トンネル
長峰山
灘区
東灘区
渦森台
住吉台
鶴甲
本山北町
本山中町
本山南町
本庄町
長峰台
六甲台町
北青木
青木
深江南町
深江浜町
魚崎浜町
魚崎南町
魚崎中町
魚崎北町
御影中町
御影本町
御影塚町
御影浜町
住吉浜町
灘浜東町
阪神電鉄
阪急神戸
東海道本線
阪神高速3号神戸
摩耶埠頭
向洋町東
向洋町西
向洋町中
六甲アイランド
港島
北埠頭

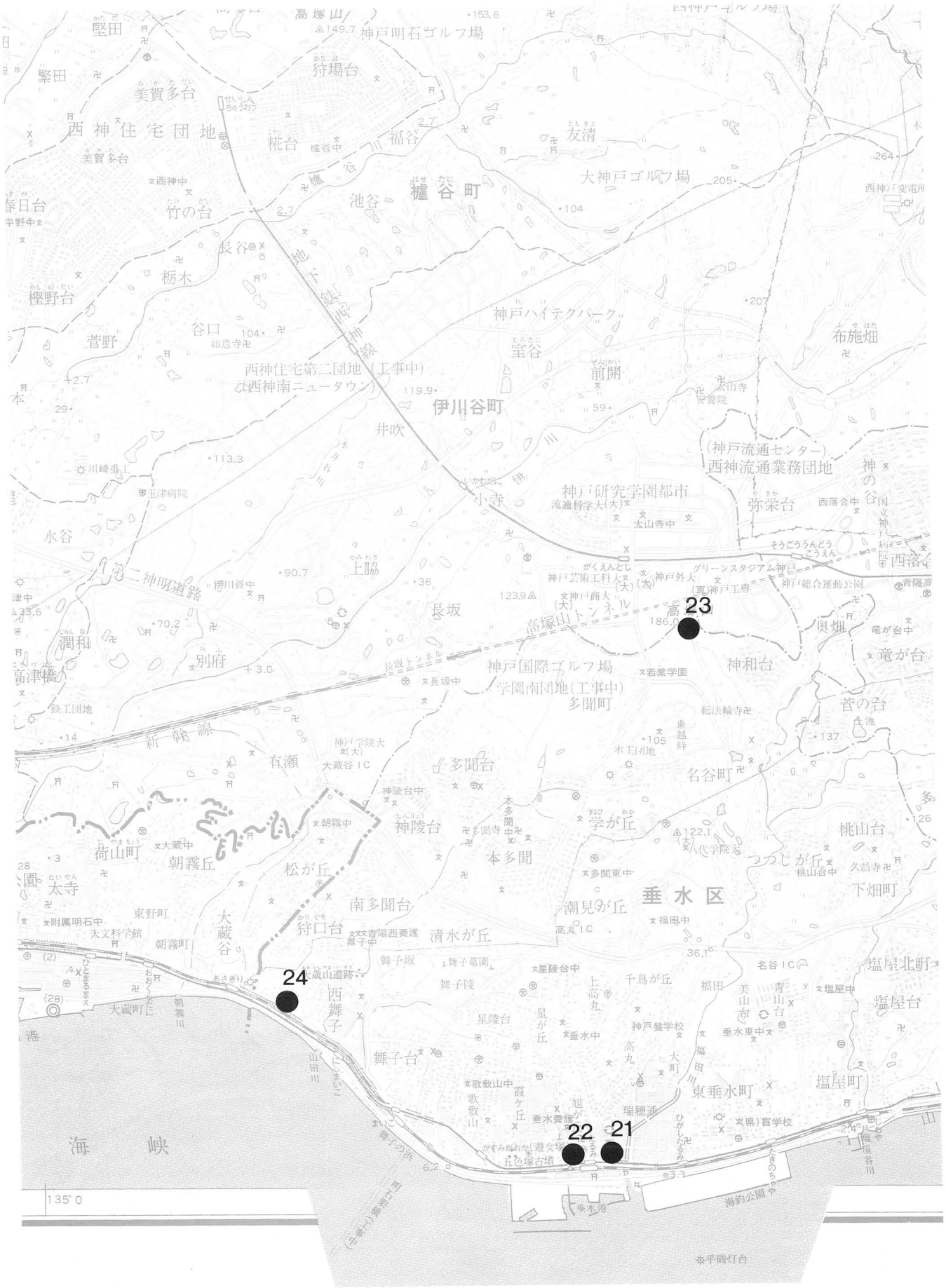
調査地点位置図 1


10
11
12
13
14
20
兵庫区
長田区
須磨区
中央区
神戸港
神戸トンネル
山麓バイパス
西神戸有料道路
阪神高速道路2号線
新幹線
鉄道
和田岬線
天王川
有馬街道
鈴蘭台
北五葉
南五葉
若葉台
泉台
惣山町
小部
森林植物園
再度公園
修法ケ原
再度山
高雄山
鍋蓋山
菊水山
高尾山
諏訪山
湊川
湊川神社
楠公
長田神社
丸山
高取山
鵯越
須磨浦通
須磨の浦
和田岬
浜中町
吉田町
遠矢浜町
苅藻島町
新湊川
長田港
須磨港
外浜町
若宮町
水族園
駒ケ林南町
駒ケ林町
月見山町
潮見台町
千守町
天神町
福祥寺
(須磨寺)
高倉中
雌宮公園
高尾台
神戸女子大
太田中
板宿町
勝福寺
飛松中
明神町
横尾
妙法寺
緑が丘
鹿松町
萩乃町
若草町
しあわせの村
ひよどり台
ひよどり北町
須磨北中
雲雀丘中
鵯台中
星和台
藍那
鈴蘭台中
鈴蘭台西町
鈴蘭台北町
鈴蘭台南町
鈴蘭台東町
小部中
中里町
君影町
鵯越
高尾山
墓
下谷上
園
神戸物置所
市民防災センター
菊水ゴルフ場
烏原
烏原貯水池
鵯越筋
雲雀丘
海洋気象台
相楽園
兵庫県庁
神戸生田中
徳照寺
中央図書館
荒田
大師隧道
湊中
石井町
水室町
熊野町
夢野中
丸山町
丸山衝上断層
湊川中
会下山町
房王寺町
長田町
片山町
西山町
高取台中
西代中
大谷町
県立文化体育館
大橋中
大橋町
久保町
駒ケ林中
IR工場
寺田町
太田町
西代通
しんながた
宝満寺
苅藻通
東尻池町
川崎車輌
御崎町
わだみさき
中央球技場
真光寺
須佐野中
清盛塚
中之島
兵庫港
第1突堤
第2突堤
兵庫突堤
第一防波堤
浮ドック
三菱重工造船所
和田岬砲台
和田岬
能福寺
兵庫北分校
兵庫中
兵庫町
東出町
東川崎町
川崎重工造船所
相生町
福原町
新開地
湊町
ポートタワー
メリケンパーク
波止場
新港町
中突堤
神戸検疫所
諏訪山
平野町
五宮町
三宮町
北野町
生田町
能内町
布引貯水池
布引滝
布引
加納町
宮町
八幡通
阪神高速3号
山本通
山手通
上沢通
中山手通
生田神社
湊川公園
メリケン波止場
神戸港
須磨北中
須磨港
砂積込桟橋
釣公園

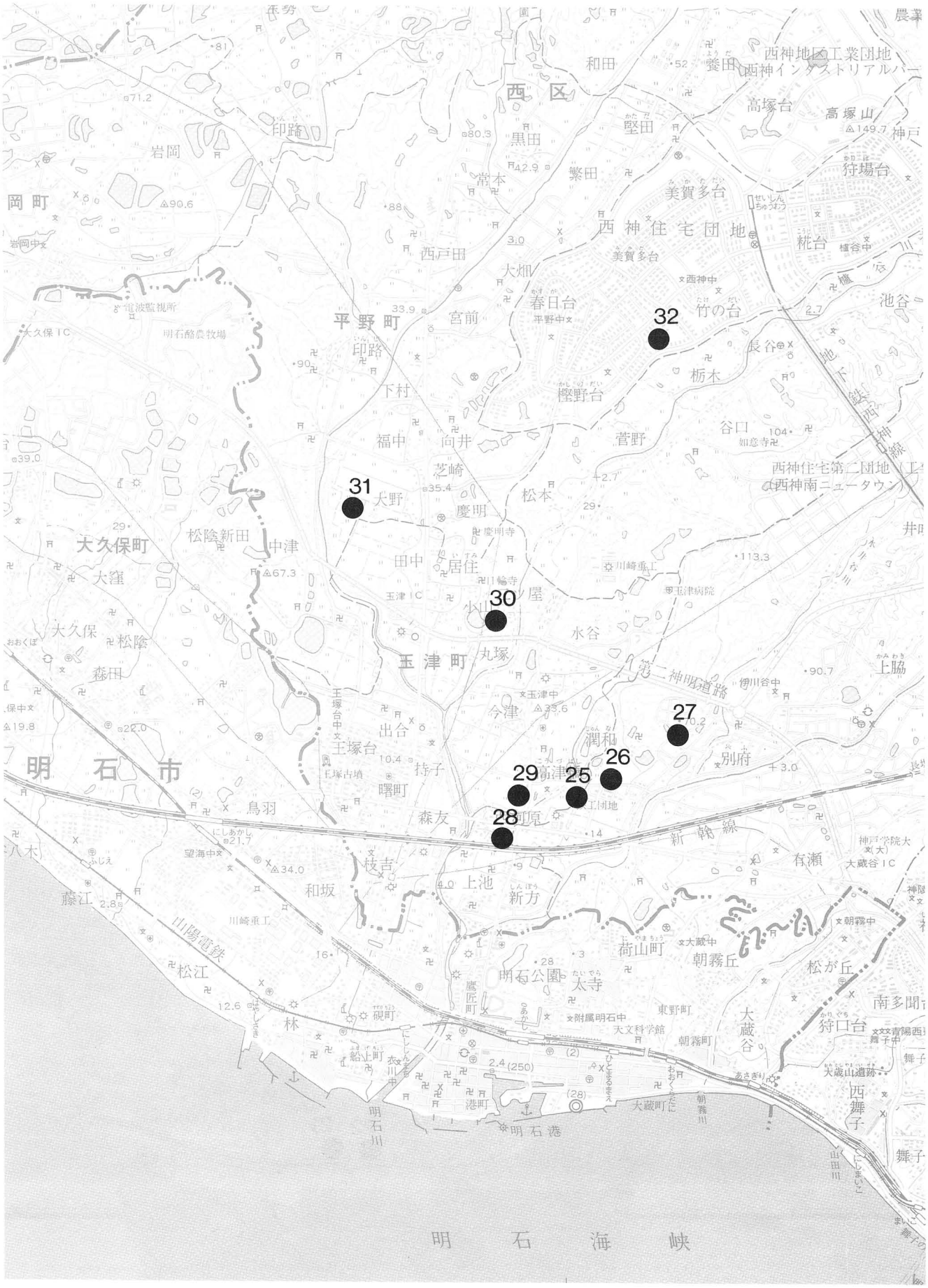
調査地点位置図 2


15
16
17
18
19
三田市
長尾町
大沢町
道場町
八多町
有野町
北神戸第3団地
北神戸第2団地
北神戸第1団地
神戸リサーチパーク
北神戸ゴルフ場
北六甲ゴルフ場
神有ゴルフ場
ダンロップゴルフ場
北神星和台
藤原台北町
藤原台中町
藤原台南町
有野台
東有野台
有野
上山口
下山口
西宮北六
西宮北IC
三田IC
神戸電鉄公園都市線
中国自動車道
六甲北有料道路
大蔵山
金毘羅山
梶岡山
キスラシ山
高丸山
東鹿見山
西鹿見山
古倉山
ナダレ尾山
金剛童子山
唐櫃台
唐櫃
鬼ケ島
灰形山
逢ケ山
高尾山
落葉山
湯槽谷
鹿の子台
目下部
宅原
塩田
平田
二郎
名来
下小名田
上小名田
神付
吉尾
附物
柳谷
深谷
西畑
屏風
神田
野瀬
上大沢
中大沢
日西原
市原
簾
桑原
下田中
三田
多聞寺
八多神社
有野中
有馬中
大沢中
天狗岩
坊主岩
大岩鼻
天保池
天下辻
大池聖天
多聞寺
唐櫃中
唐櫃台
ありまぐち
水無川
阪神流通業務センター
大沢川
豊歳神社
赤松峠
三田IC
八景中
北神戸中
どうじょうみなみぐち
八多中
西宮北IC

調査地点位置図 3


23
24
22
21
西神住宅団地
西神住宅第二団地（工事中）
（西神南ニュータウン）
伊川谷町
櫨谷町
神戸ハイテクパーク
神戸研究学園都市
神戸国際ゴルフ場
学園南団地（工事中）
多聞町
多聞台
神陵台
本多聞
学が丘
潮見が丘
垂水区
清水が丘
狩口台
南多聞台
松が丘
朝霧丘
荷山町
太寺
大蔵谷
西舞子
舞子台
東垂水町
塩屋町
塩屋台
塩屋北町
下畑町
桃山台
名谷町
神和台
奥畑
竜が台
菅の台
弥栄台
布施畑
大神戸ゴルフ場
神戸明石ゴルフ場
狩場台
美賀多台
竹の台
栃木
谷口
菅野
水谷
上脇
長坂
別府
潤和
高津橋
有瀬
新幹線
第二神明道路
高塚山トンネル
長坂トンネル
海峡
海釣公園
平磯灯台
135°0

調査地点位置図 4



32
31
30
27
26
29
25
28
西区
平野町
大久保町
玉津町
明石市
明石海峡
西神住宅団地
西神地区工業団地
西神インダストリアルパー
高塚台
高塚山
狩場台
美賀多台
糀台
竹の台
春日台
樫野台
栃木
長谷
谷口
菅野
松本
大野
慶明
田中
居住
小山
丸塚
水谷
今津
潤和
別府
高津
高津橋
上池
新方
荷山町
朝霧丘
松が丘
大蔵谷
狩口台
西舞子
舞子
明石公園
太寺
明石港
明石川
山陽電鉄
新幹線
第二神明道路
西神住宅第二団地
(西神南ニュータウン)
大久保IC
明石酪農牧場
電波監視所
玉津IC
玉津病院
大蔵谷IC
大蔵山遺跡

調査地点位置図 5

Ⅱ．平成４年度の発掘調査

１．本庄町（ほんじょうちょう）遺跡

１．はじめに　今回の調査は深江幼稚園の園舎建て替えに伴うもので、調査は建物基礎部分についてのみ行った。

周辺の遺跡では、本庄町遺跡で昭和59年に財団法人古代学協会が弥生時代前期水田址を検出し、昭和61年には兵庫県教育委員会が縄文時代後期初頭の貯蔵穴群を検出している。

また、兵庫県教育委員会が調査した深江北町遺跡では、昭和59・61年に古墳時代前期の円形周溝墓、奈良時代～平安時代初期の水田址、掘立柱建物、平安時代後期の水田址が検出され、平成元年には中世水田址、弥生時代～古墳時代の掘立柱建物、土坑等が検出されている。

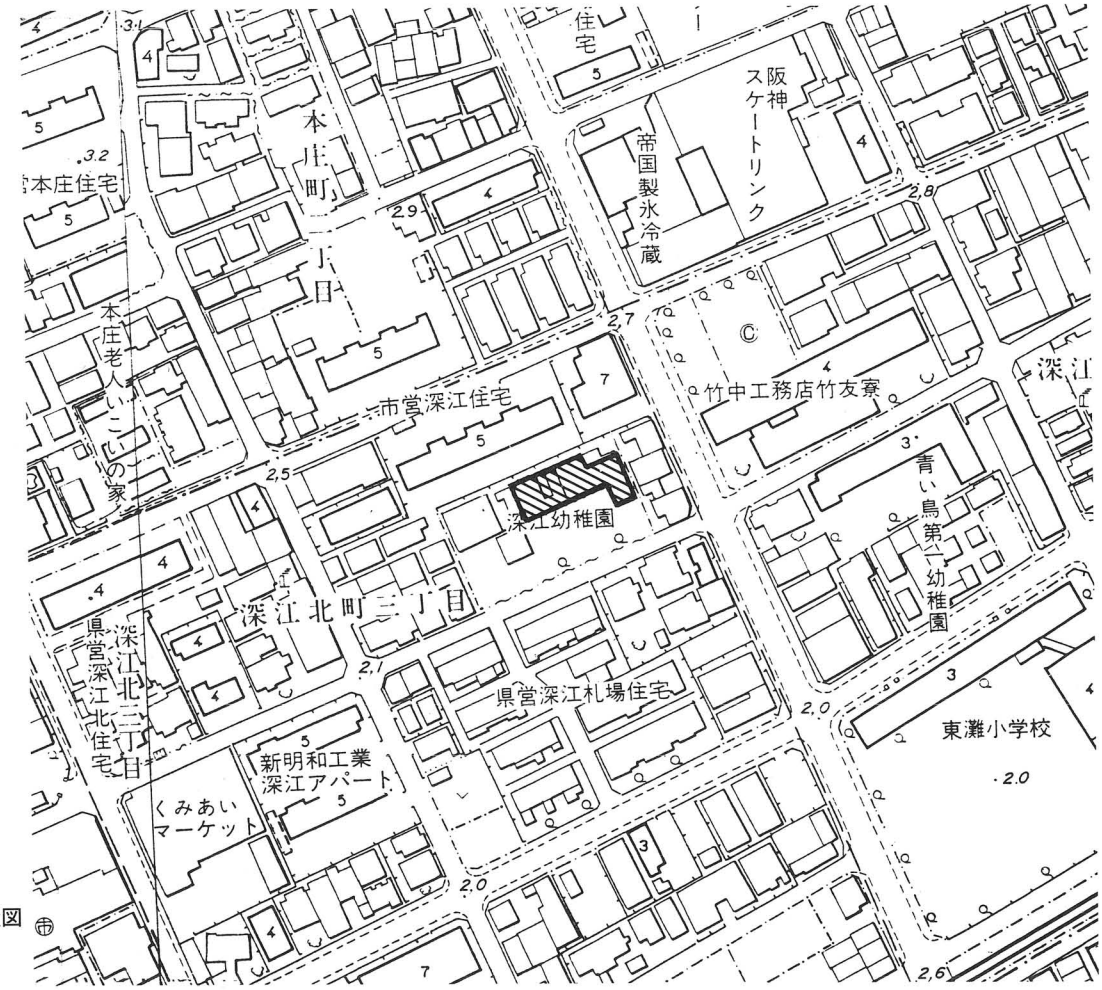


fig. 1
調査地点位置図
1：2500

２．調査の概要　建物基礎部分の包含層までを重機により掘削し、包含層以下は人力によって調査した。

第１遺構面　基本層序は盛土、耕土、床土、洪水砂、灰褐色中砂～粗砂層と黄白色中砂～粗砂層の互層の包含層となる。包含層には中世の遺物を含んでおり、下層の暗灰褐色砂質シルト～細砂層の上面で獣足跡を検出した。水田畦畔の検出はできなかったが、水田面と考えられる。さらに下層の確認のため、第８トレンチで断ち割り調査を行ったところ、足跡の刻まれた

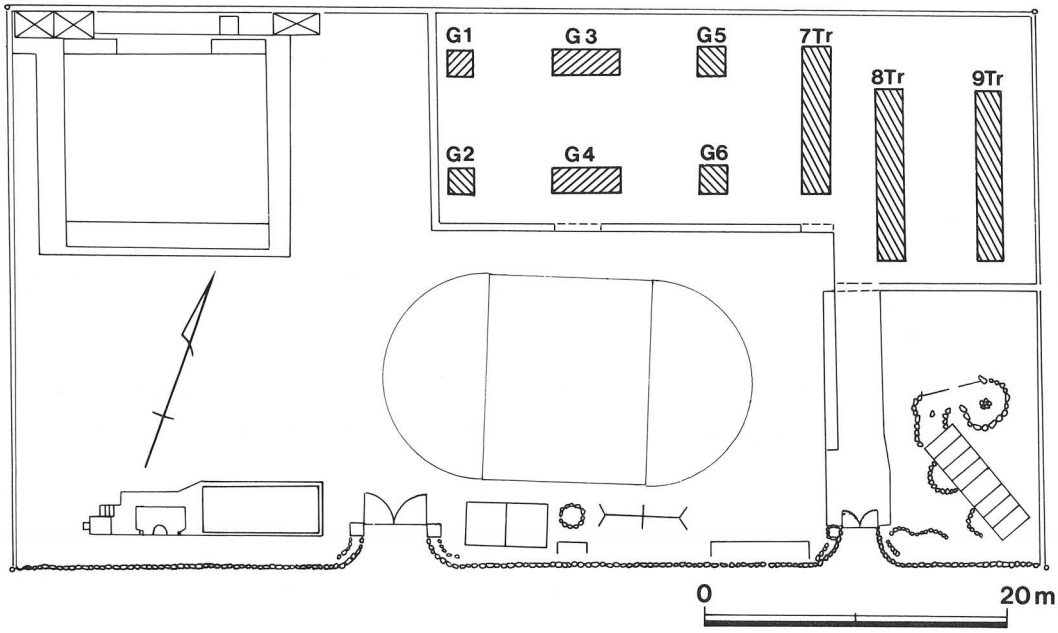


fig. 2　グリッド・トレンチ配置図

土層には奈良時代～平安時代の遺物が含まれ、水田上層の包含層から出土した遺物とも考え合わせると、この水田の時期は８世紀以降12世紀の間に収まるものと考えられる。

第２遺構面　さらに下層には植物遺体を含む黒色シルトの厚い堆積層があり、その黒色シルトの下層の灰白色中砂～極粗砂層の上面で田下駄や杭などの木製品が出土した。このため、下層の調査を全てのグリッド、トレンチにも拡げ、引き続き行うことにした。その結果、黒色シルト層は調査地の北側から南側にかけて厚く堆積し、さらに西側にかけて厚みを増していることが判明した。

木製品はグリッド５・６以外の全ての調査区から出土した。遺物が出土した層は黒色シルト層下の灰白色中砂～極粗砂層の上面であった。木製品の中では、１点が暗灰褐色砂質シルト層から出土している板材があるが、時期差があるものと考えられる。また第９トレンチでは木製品が出土した砂層上面で縄文時代晩期の深鉢の一部が出土した。この砂層上面で遺構の検出を試みたが、遺構は検出されなかった。

第７トレンチの西壁土層断面では土壌を柱状にサンプリングして、(1)花粉分析、(2)珪藻分析、(3)プラントオパール分析、(4)重鉱物分析の科学分析を行い、木製品については、樹種の同定を行った。

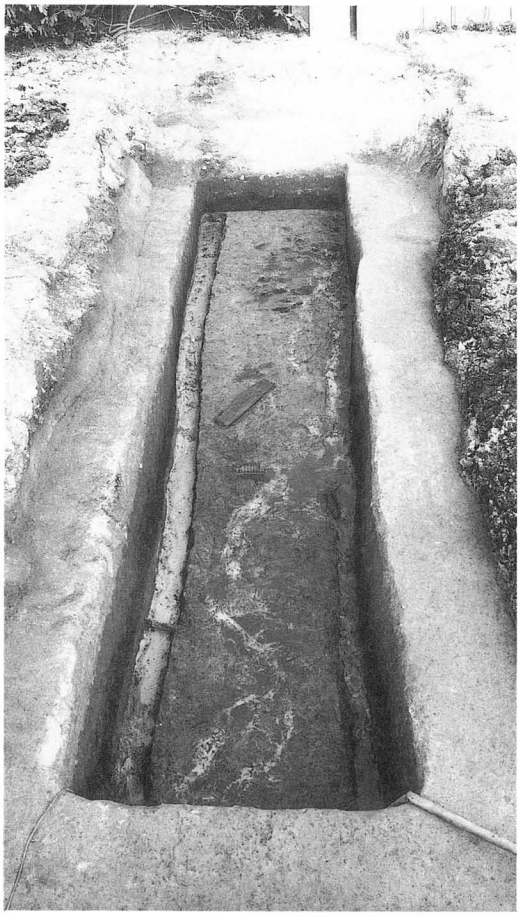


fig. 3　木器出土状況

科学分析　(1)花粉分析は遺跡周辺の植生を明らかにするために行った。その結果、第６・７層において針葉樹のスギが多く、第４・５層ではスギは減少し、マツ属が増加する。このため、古墳時代以降の森林植生は常緑広葉樹とスギ林からなる時期とマツとコナラ亜属林からなる時期に分けられる。

また、第６・７層で出現しているカヤツリグサ科が第４・５層では減少し、ソバ科が出現する。これは、植生の違いもさることながら、水田の管理状態の違いに起因する可能性もある。また、平安時代以降では稲作のみでなく、周辺でソバ栽培も行われていたようである。

(2)珪藻分析は遺跡の堆積環境の変遷を明らかにするために行った。第４～７層では沼沢湿地付着性種群の主要構成種である珪藻化石がみられ、水深の非常に浅い、流れのほとんどない沼沢湿地環境への変化が推定される。

(3)プラントオパール分析は、水田畦畔は確認されなかったが水田層の可能性を科学的に分析するために行った。第５層からイネのプラントオパールの検出量が一番多く、第８層以外の全ての土層からイネのプラントオパールが検出された。このため、遺跡周辺では水田稲作が行われていた可能性は非常に高いと判断される。

(4)重鉱物分析はこれまで肉眼での土層観察であったが、それを、科学的に裏付けするために分析を行った。その結果、今回分析を行った各層の堆積物を構成する鉱物類や岩石片類は、六甲山地に分布するカコウ岩などの深成岩類を起源とする鉱物群や岩石片群が、河川などの作用により遺跡にもたらされたものである。

(5)樹種同定は取り上げた木製品31点について行った。同定結果は、下表の通りである。

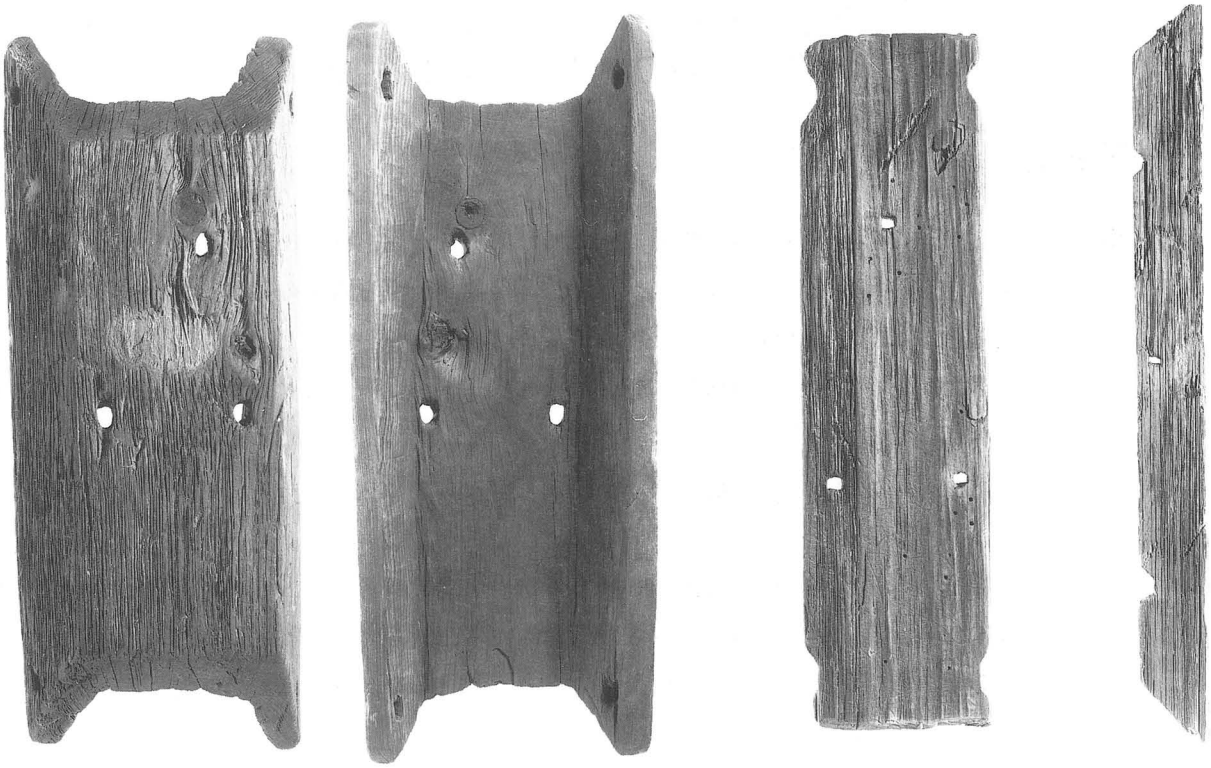


fig. 4　田下駄

出土地区	遺物名	出土層位	樹種	出土地区	遺物名	出土層位	樹種
G 1	木杭	黒色シルト	モミ属	7トレンチ	板材	黒色シルト	スギ
〃	板材	〃	スギ	8トレンチ	〃	〃	コウヤマキ
〃	〃	〃	〃	〃	角材	〃	スギ
〃	〃	〃	〃	〃	板材	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	杭	〃	クヌギ節
〃	〃	〃	〃	〃	小枝	〃	マツ属
〃	〃	〃	クヌギ節	〃	枝	〃	クヌギ節
G 2	丸太	〃	ヒノキ属	〃	板材	〃	スギ
G 3	不明	〃	スギ	〃	〃	黒色シルト	〃
〃	エブリ？	〃	〃	〃	田下駄	〃	〃
〃	板材	〃	アカガシ亜属	〃	〃	〃	ヒノキ属
〃	〃	〃	スギ	9トレンチ	板材	〃	モミ属
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
G 4	〃	〃	コウヤマキ	〃	削りのある材	黒色シルト上位層	マツ属
〃	〃	〃	〃	〃	板材	暗灰褐色砂質シルト	モミ属
7トレンチ	〃	〃	モミ属				

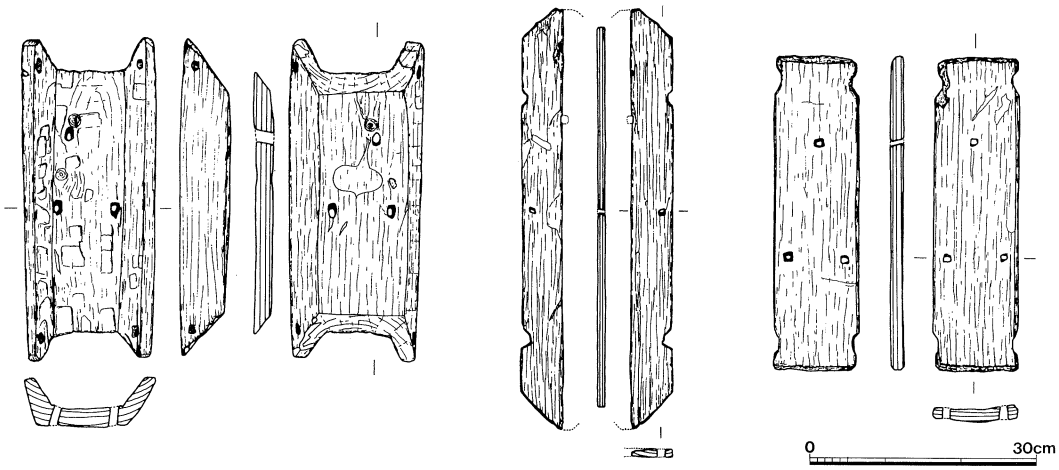


fig. 5
田下駄実測図

3．まとめ

建物基礎部分のみの調査であったため、第1遺構面では水田を面的に捉えることが出来ず、畦畔の検出はできなかった。しかし、科学分析から水田の可能性が確認でき、古墳時代以降に水田が拓かれていたと思われる。

また、厚い黒色シルト層の下層から木製品が見つかったことは新たな知見であり、特筆すべきことであろう。木製品の時期については、積極的な時期判定の資料に欠けるが、黒色シルト層内からの土師器の小片が古墳時代のものと考えられることから、同時期代のものと考えられる。

黒色シルト層の下層の灰白色中砂～極粗砂層の面は、調査区の北から南に緩やかに傾斜しており、調査区の北側には砂堆の微高地の存在が考えられる。この面からは遺構が確認出来なかったが、第9トレンチ出土の縄文時代晩期の土器から、当該期の面となる可能性がある。

古墳時代になると、調査区周辺は湿地化し、木製品が流入し、黒色シルト層で覆われたと思われる。その湿地が安定した後、水田が拓かれ、現代に及んだものと考えられる。

2．本山（もとやま）遺跡　第14次調査

1．はじめに　本山遺跡は、東の芦屋川、西の住吉川とその間の小河川によって形成された複合扇状地に立地している。当地域は早くから市街地化されていたため、近年まで遺跡の存在が確認されていなかったが、昭和58年に田中町と本山中町で発掘調査が行われ、弥生時代中期と中世の遺構・遺物が発見された。その後、これまで13次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が見つかっている。特に今回の調査地の隣地において平成元年度（1989年）に行った第12次調査では、銅鐸が出土し注目された。

今回の調査地は、第12次調査地の東にほぼ連続している。前回の調査結果から、当該地の北側部分は多量に弥生時代の遺物を含む包含層が厚く堆積していると予想され、さらに下層からは縄文海進時の波食崖が検出されると考えられた。

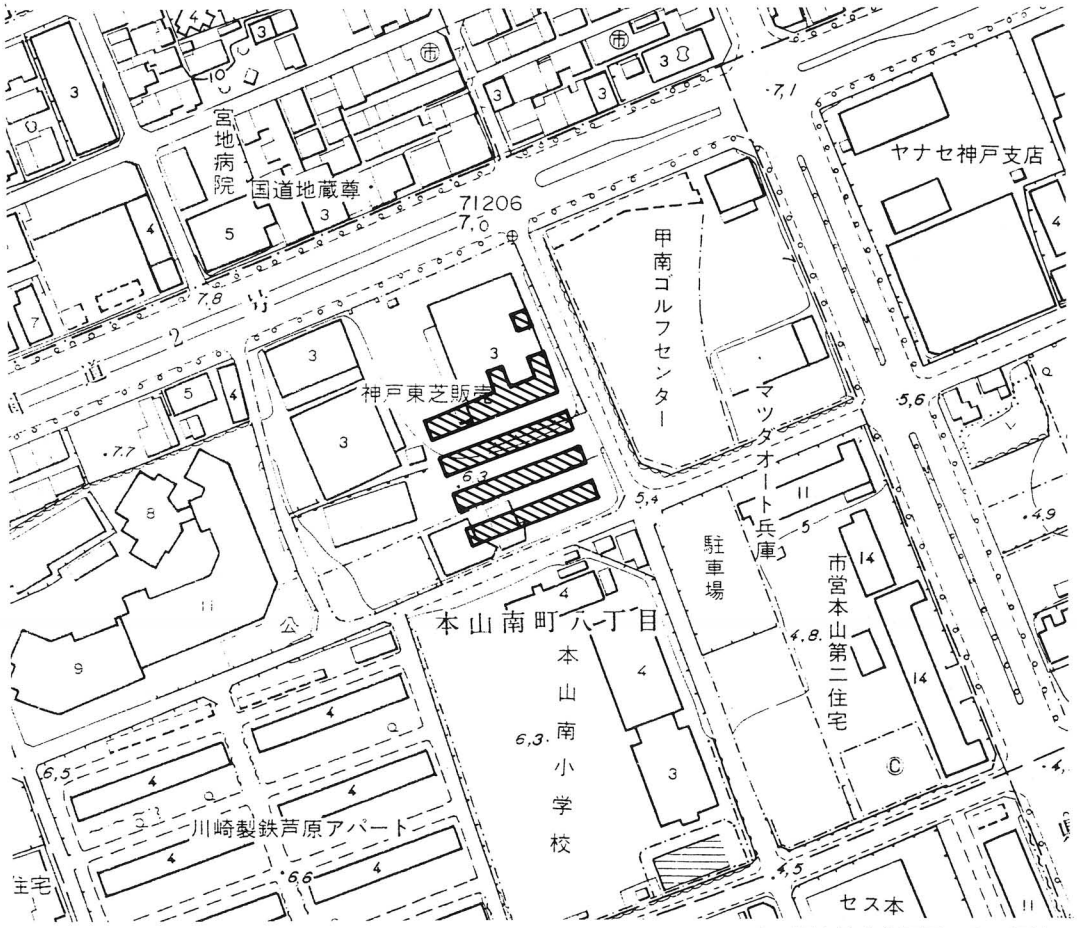


fig. 6　調査地点位置図　1：2500

2．調査の概要　調査は、遺跡に影響する建物基礎部分の5個所について行った。調査区名を北から順にⅠ～Ⅴ区とした。Ⅰ区が3×3ｍである以外、他の調査区は長さが44.0ｍで、幅は最終調査深度で3ｍを確保できるように、上面の幅で6.5～8ｍに設定した。

Ⅰ　区　現代の攪乱層下で弥生時代の遺物包含層を検出した。遺物包含層の厚さは北側で20cm、南側で約60cmあり、弥生時代の遺構面は南に緩くさがっている。遺構面は砂礫層からなり、当調査地区では遺構は検出されなかった。遺構面下50～80cmは砂礫および細砂が堆積して

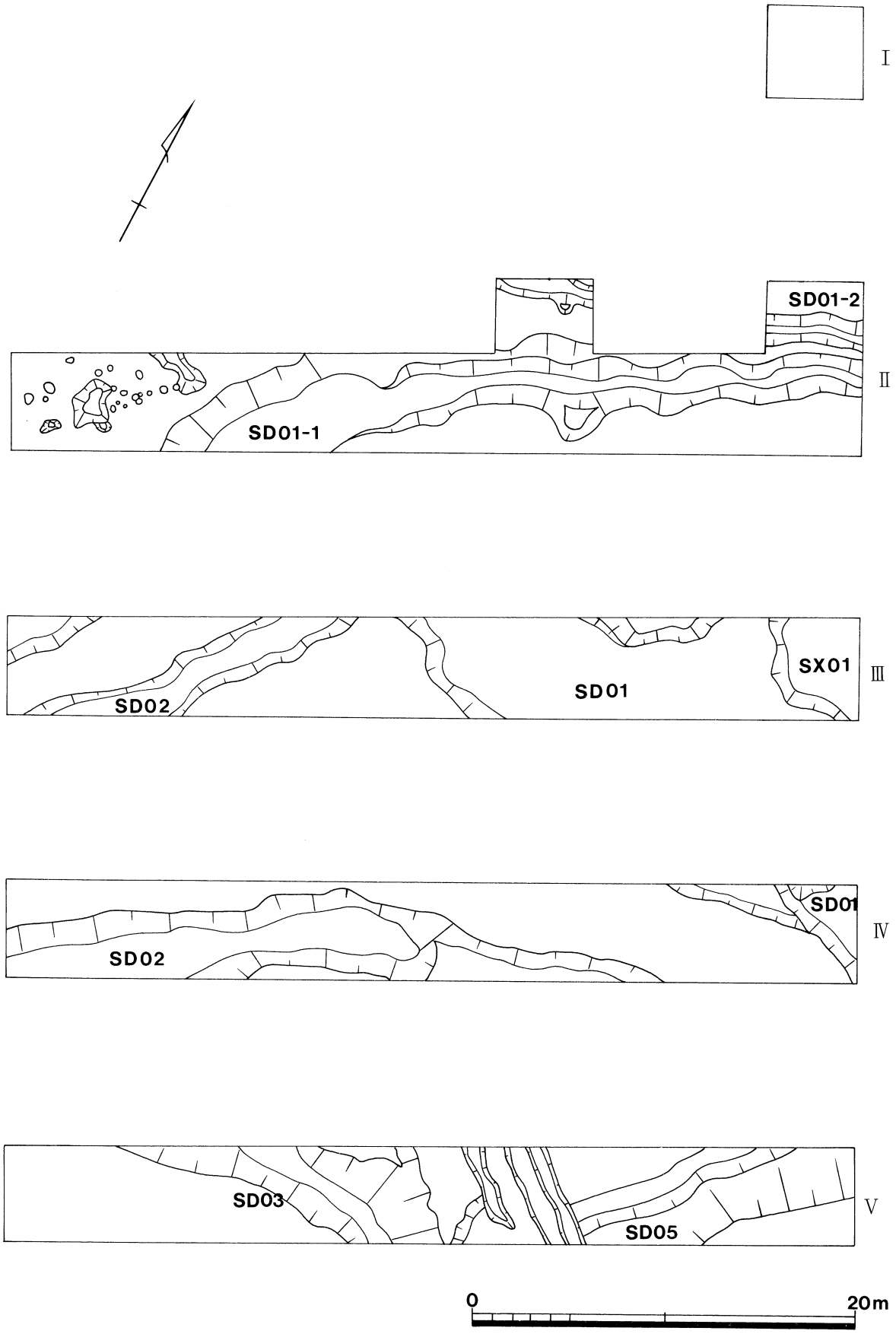

I
SD01-2
II
SD01-1
SX01
III
SD01
SD02
SD01
IV
SD02
SD03
V
SD05
0
20m

fig. 7　遺構平面図

おり、その下が縄文時代の面と考えられる暗青灰色粘質土層となる。

Ⅱ　区　　弥生時代の遺構面の上に表土および遺物包含層が4層堆積している。上3層には弥生時代、古墳時代、中世の遺物が混在しているが、最下の層は弥生時代の遺物だけを含む層である。

弥生時代の遺構面では、調査区の西側約¼の範囲で土坑、ピット、溝、自然流路（SD 03）を検出したが、東側の大半は自然流路（SD 01）となっている。検出された遺構は自然流路2条、溝（SD 02）1条、土坑2基、ピット16個所である。

SD 01　最も多量の遺物が出土した遺構である。調査区を東西に横切る自然流路で、深さ約1m、流路幅はその大半が調査区外にあるが、10m以上と推定される。堆積状況から大きく3層に分かれ、下層は粗砂礫・細砂、中層は流木を多く含む黒色砂質土・粗砂・黒色シルトで、上層は黒色砂質土となっている。この3層から出土した遺物には時期差がみられず、いずれからも弥生時代中期後半の土器を中心に、僅かに前期後半の土器が出土している。

SD 02　幅80～30cmの溝で南端で立ち上がり、途切れている。形状と溝内の堆積状況から、人為的に掘られたと考えられるが、詳細は不明である。溝内の堆積土から弥生時代前期後半の土器が出土した。

SD 03　調査区の南端で一部検出された溝で、弥生時代の遺物包含層を切りこんでおり、他の遺構より、時期が新しいと考えられる。規模等は不明である。

SK 01　長辺1.8m、短辺1.2m、深さ約20cmの不整方形の土坑である。弥生時代前期後半の土器が出土している。

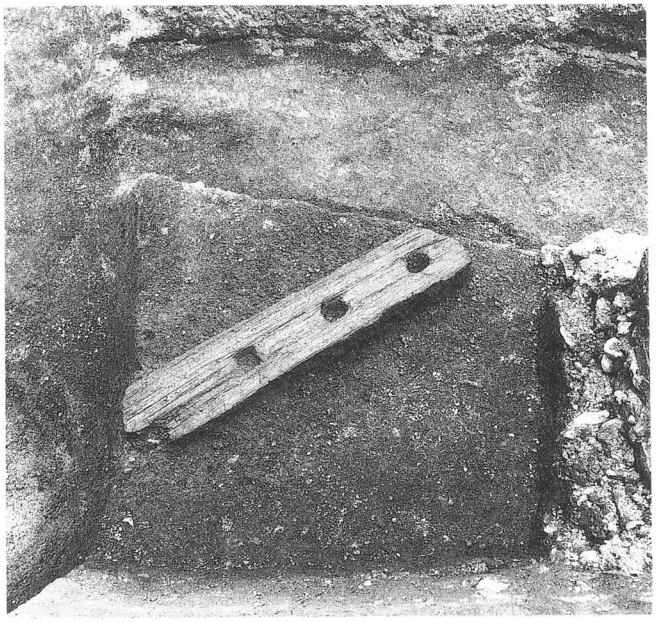


fig. 8　Ⅲ区木器出土状況

fig. 9　Ⅱ区SD 01獣下顎骨出土状況

弥生時代以下層　弥生時代の遺構面のさらに下層を掘削したところ、粘土層と礫層が三度にわたって交互に堆積しているのを確認した。上層の黒色粘土層からは縄文時代晩期の土器片が、その下の灰色粘土層から縄文時代前期後半の土器片がそれぞれ数点ずつ出土した。この粘土層の間に堆積している礫層は、北から流れてきた土石流が堆積したものと考えらる。縄文時代にはこの付近で集落が営まれていたものの、土石流で一度に流され、土壌化と洪水のくり

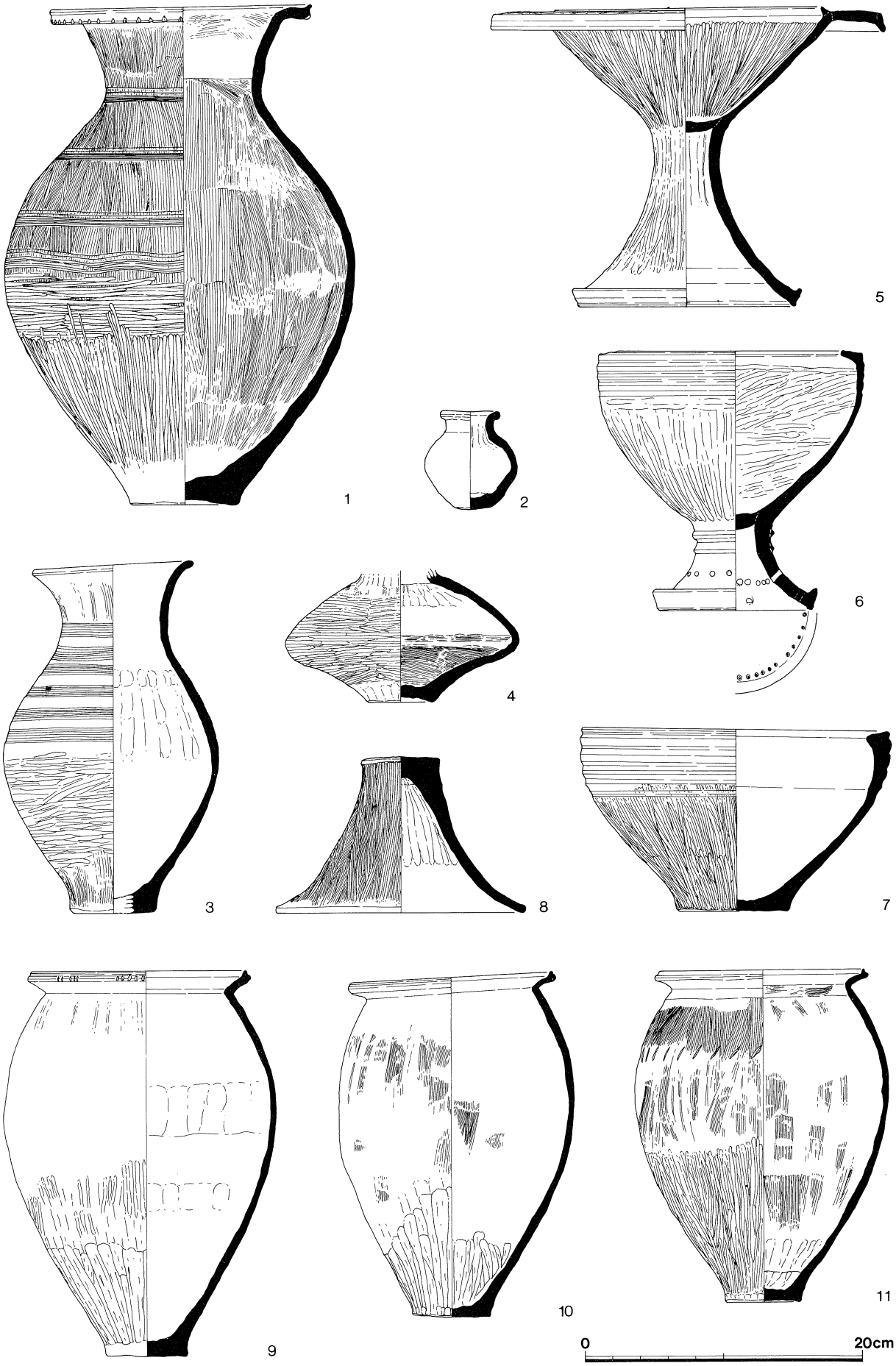


fig. 10　Ⅱ区 SD 01 出土土器

かえしが3回にわたって起こったと思われる。

さらにその下層には青灰色シルト層が堆積しており、このシルト層の直下で、厚い灰白色砂層とⅠ区で検出した暗青灰色粘質砂層と同一層の可能性のある層を調査区の北端で検出した。この層は、1989年の隣地の調査に際しても確認されている。

Ⅲ　区　　弥生時代遺構面までの土層の堆積状況は、Ⅱ区と同様である。弥生時代中期の自然流路が2条に分かれて検出された。この流路とⅡ区の流路との繋がりについては明らかでないが、同一の可能性もある。

SD 01　SD 01内には溜まり状の落ち込みがあり、SX 01と遺構名を付した。SX 01からは葉の付いた状態の木・流木が見られ、それとともに弥生時代中期後半の土器が出土した。

SD 02　SD 02は、幅約3ｍ、深さ40cmの自然流路で、SD 01と方向を異にする。埋土からは弥生時代中期と、前期後半の土器が出土した。SD 01との時期差は見られず、SD 01との方向の違いは、洪水時の流れの違いと考えられる。

fig. 11　Ⅲ区SX 01

Ⅳ　区　　現表土下で近代の水田が検出され、その水田の下層で中世から弥生時代の遺物を含む5層の包含層が認められた。包含層からは、弥生土器、古墳時代の須恵器、奈良～平安時代の須恵器、土師器、銅銭などが出土した。

弥生時代の遺構面は、これら包含層の下層の粗砂・細砂層を基盤としており、溝を3条検出した。

SD 01・03　SD 01と03は調査区の東端で検出され、その幅は確認できなかったが、深さはSD 01が約40cm、SD 03は20cm以上である。SD 01はSD 03を削っており、SD 01の方が新しい時期のものと考えられる。SD 01の埋土からは弥生時代中期の土器片が出土しており、この時期に埋没したと考えられる。

SD 02　調査地をほぼ東西方向に横断する幅4ｍ、深さ約80cmの溝である。堆積状況から、流路であったと考えられ、大きく二度の堆積によって埋没している。最終的には浅い窪みになって残っていたようで、最上層の堆積土からは、弥生土器とともに古墳時代の須恵器、平安時代の銅銭（隆平永宝）などが混じって出土した。この溝が機能していたのは、弥生時代

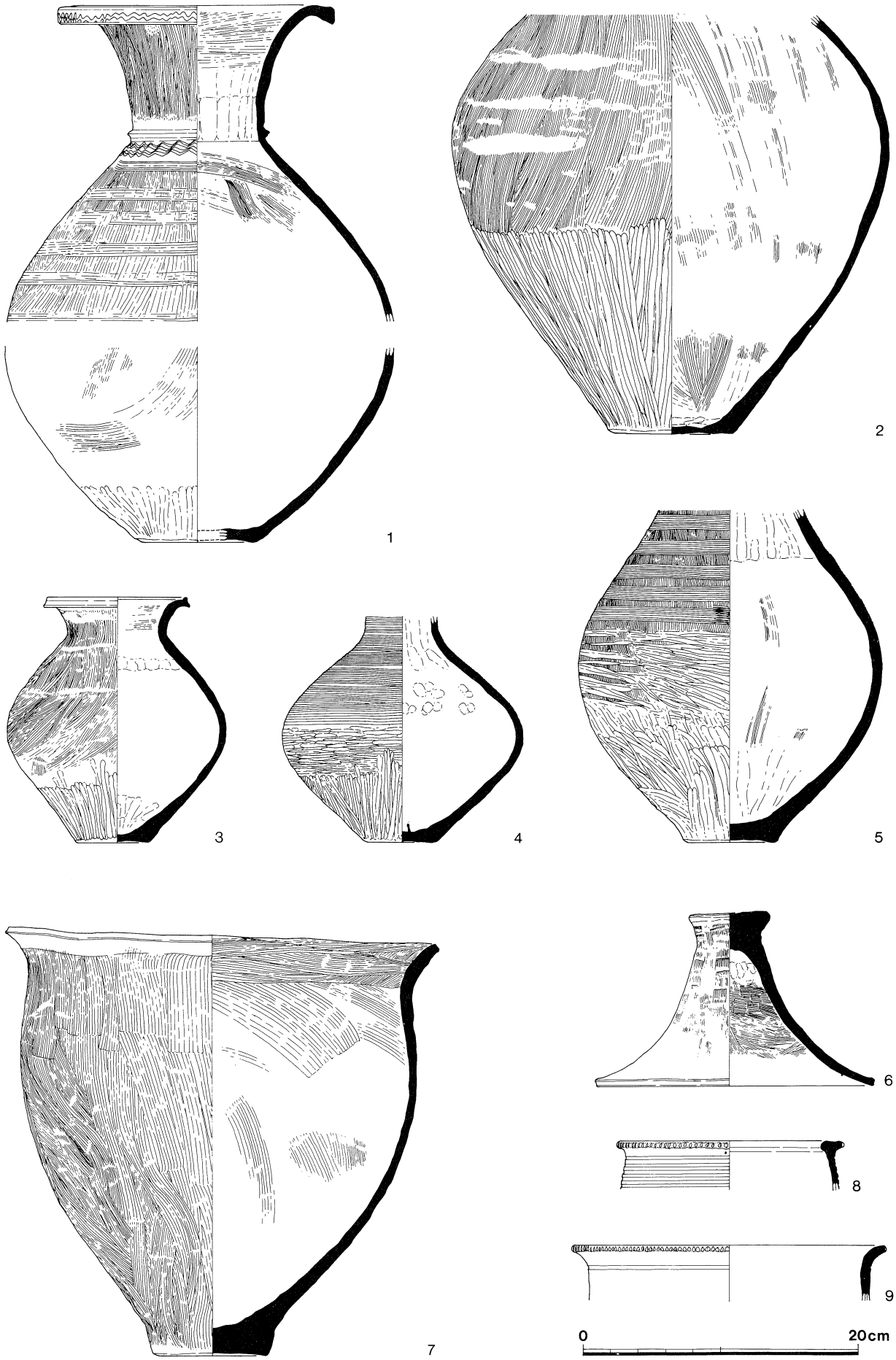


fig. 12　Ⅲ区 SD 01・02 出土土器

中期と考えられ、流路状の堆積土から弥生時代中期の土器とともに流木、焼け痕のある木、鍬状の木製品などが出土した。

弥生時代以下層　弥生時代より下層を確認するため、調査区の北半を断ち割ったが、基本層序はⅡ区の弥生時代以下の層と同様である。しかし、Ⅱ区で検出した縄文時代の海成砂は調査深度内では確認できなかった。

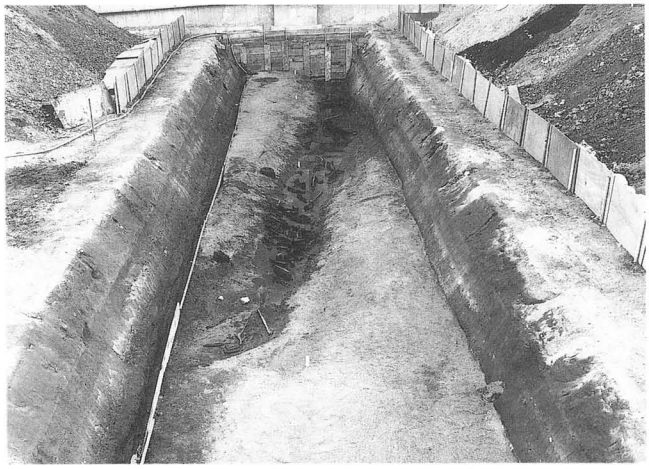


fig. 13　Ⅳ区 SD 02 木器出土状況

fig. 14　Ⅳ区 SD 02 木器出土状況

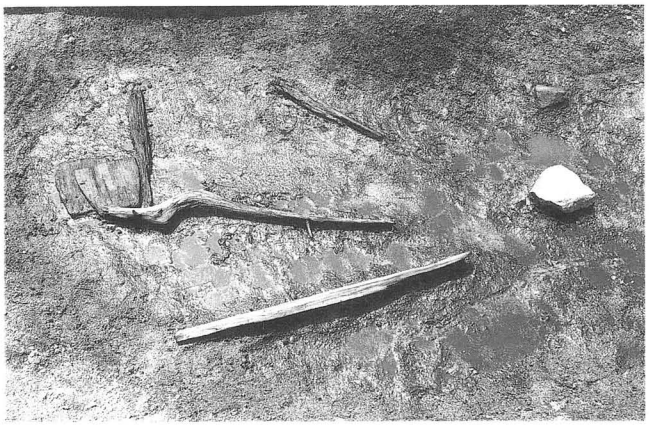


fig. 15　Ⅳ区 SD 02 木器出土状況

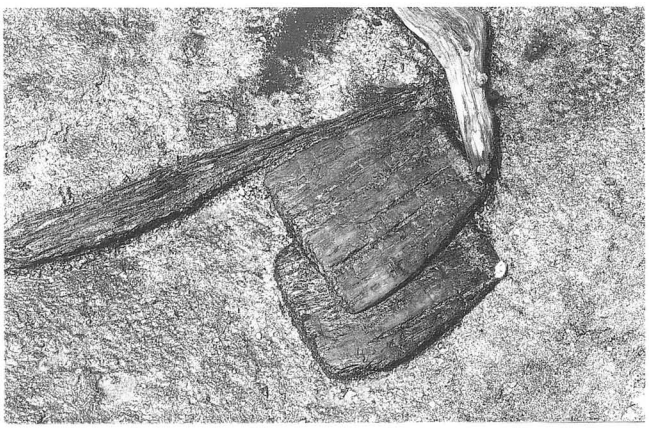


fig. 16　Ⅳ区 SD 02 木器出土状況

Ⅴ　区　弥生時代の遺構面までの堆積の基本層序はⅣ区と同様である。検出された遺構は溝５条で、そのうちの２条（SD 03・05）は幅約 3.5 m、深さ約１mの東西に流れる弥生時代の流路と考えられる。この２条の溝を SD 01・02・04 の３条の溝が南北に横切っている。これら５条の溝は幅70㎝～１m、深さ20㎝程度の浅いものである。SD 03 と SD 05 の流路からは木と弥生時代の土器が出土しており、特に SD 05 の南岸で弥生時代中期の土器がまとまって出土している。01・02・04 の３条は切り合い関係から、他の２条より新しい時期のものと思われるが、いずれも同一面で検出されていることから、これらの溝も弥生時代の溝であろう。

出土遺物　今回の調査では多量の遺物が出土したが、特に弥生土器が28ℓコンテナに約 180 箱、石器約 800 点、玉類20点以上と、弥生時代の遺物が大半を占めている。石器は石庖丁、石鏃、石斧、石剣、石鎗など、種類も豊富である。特に石庖丁、石錐は未製品が含まれており、この集落でこれらの石器製作が行われていたと考えられる。玉類には碧玉製管玉、ひすい

製勾玉、古墳時代のもので滑石製臼玉、金環などが出土した。土器は弥生時代中期のものが大半であるが、前期後半のものも混在しており、ごくわずかながら、縄文時代前期、晩期の土器片も下層から出土している。

本山遺跡では、堆積土中の珪藻、花粉の分析、出土木製品・流木の樹種、石器の礫種同定、管玉と玉材の産地分析および地形環境分析などの自然科学分析をおこなった。これらの分析結果についての概要は、以下の通りである。

礫種同定　石器礫種同定は、磨製石器についておこなった。結果、当遺跡では、石庖丁石材として粘板岩、緑泥片岩といった畿内に顕著な岩種の他、神戸市北区に産する砂質凝灰岩、俗称塩田石を比較的多様していることが判明した。

玉材産地分析　管玉と玉材の産地分析については、管玉22点と、玉材と考えられる石片７点の蛍光Ｘ線分析およびＥＳＲ分析を行い、豊岡市女代南、玉谷地方の遺物と一致する群と、産地は不明ながら、近似する元素組成を示し、同一産地のものと考えられる群とに分けられることがあきらかとなった。

花粉分析　花粉分析は、弥生時代遺構面および以下層で数カ所おこない、弥生時代遺構面では、エノキ、ムクノキ、アキニレ、ケヤキなどが生い茂る沖積低地か河畔という周辺植生が推定された。

樹種同定　木製品・流木の樹種同定に関しては、木製品についてはヒノキ属、アカガシ属、コウヤマキ、モミ属、流木ではエノキ属、ケヤキ、ムクノキ、アカマツ、ヤマグワなどの樹種が判明した。

地形環境分析　地形環境分析では当遺跡の微地形を復元した。分析結果によると、弥生時代以下層で検出した灰白色砂層は淘汰の状態、粒子の円磨度から判断して海成砂であり、その下層の青灰色シルト層は縄文時代の波食崖と考えられる。しかし、この灰白色砂層について珪藻分析をおこなった結果、地形環境分析を裏付けることはできなかった。

珪藻分析　珪藻分析では、上述の灰白色砂層からは、珪藻殻はほとんど検出されず、海成の殻片も認められなかった。また、同層をイオウ分析した結果も含有量は認められず、やはり淡水成と考えられる。

前述の二つの分析結果は、相反するものであり、今後の課題として残されている。

３．まとめ

Ⅱ・Ⅲ区の状況から、調査地の北あるいは北西側は比較的安定した地盤で弥生時代の遺構も形成されているが、南側は洪水砂の堆積の上に、さらに弥生時代の自然流路（洪水によるものか）がつくられる不安定な地盤であったと考えられる。

過去の調査成果から、これまで本山遺跡は弥生時代前期後半～中期および中世の集落址と考えられていたが、今回調査で確認した弥生時代の遺構もほぼ同時期である。

本山遺跡では、弥生時代前期後半～中世という長期間にわたって集落が営まれたと思われるが、今回自然流路から出土した多量の土器、石器および石器石材片からみて、当地域にはかなり大規模な弥生集落が存在していたと考えられ、地形や遺物、遺構の検出状況からも、今回の調査地のすぐ北側に集落がある可能性が高い。また、前回の調査で銅鐸が出土したことや、石庖丁などの石器製作が行われていたことなどからみて、本山遺跡は弥生時代の当地域における拠点的な集落であったと推測される。

3．郡家遺跡　篠之坪地区　第５次調査

1．はじめに　郡家遺跡は、住吉川と石屋川によって形成された扇状地上に立地しており、昭和54年度以降、城之前地区・地蔵元地区・下山田地区・大蔵地区・御影中町地区等において、発掘調査が実施されている。

篠之坪地区においては、平成元年に、マンション新築工事に伴う試掘調査で、弥生時代～古墳時代の遺物包含層が確認された。調査の結果、弥生時代～古墳時代の河道が検出された（第１次調査）。

平成３年、マンション建設工事に伴う発掘調査を実施し、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居１棟、溝２条、柱穴、古墳時代前期前半の土器群の他、弥生時代後期以前の自然河道等を検出した（第２次調査）。

その後小規模な調査を重ね（第３・４次調査）、今回で第５次調査になる。

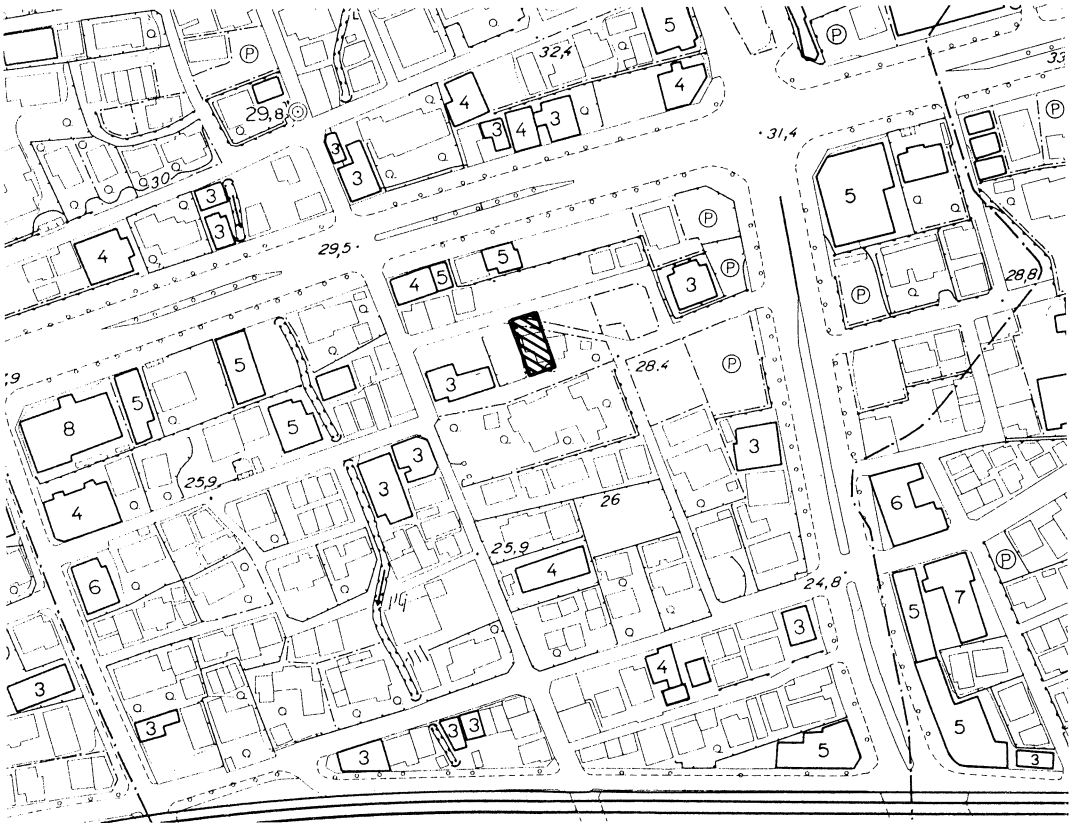


fig. 17
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　現地表下約 0.7 ～ 1.2 m（標高 27.10 ～ 27.60 m）の暗褐色砂質土上面で検出された遺構面である。検出遺構として、自然流路１・２がある。

第１遺構面

自然流路１　調査区の北東側で検出した、南北方向に流れる自然流路である。北側は調査区外にのびており、南側は後世の攪乱によって切られている。幅60～80㎝、深さ15～35㎝、全長は現存する部分で 1.7 mである。埋土内より、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土している。

自然流路２　調査区の北西側から西側で検出された、南北方向に流れる自然流路である。北側及び西側は調査区外にのびている。幅 0.6 ～ 1.3 m、深さ30～45㎝、全長は現存する部分で 9.5 mである。埋土内より、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土している。

第２遺構面　現地表下約 0.9 ～ 1.4 m（標高 26.90 ～ 27.40 m）の褐色砂質土上面で検出した遺構面である。検出遺構として、古墳時代中期の竪穴住居１棟、古墳時代前期～後期の土坑３基、溝１条、ピット12か所、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器群２か所等がある。

SB 01　調査区のほぼ中央で検出した方形竪穴住居である。東壁及び南壁の一部を攪乱坑により削られており、北壁の一部を試掘坑により切られている。

平面形はほぼ正方形をしており、南北 6.2 ×東西 6.0 m、深さ25～40cmである。北壁のほぼ中央付近でカマドを検出した。カマドの全長は 2.4 m、現存幅は 1.2 mである。

カマドは、東側の袖部が一部しか残存していないが、平面形は馬蹄形またはU字形をしていたと考えられる。

柱穴は、床面の５か所で確認した。北東側については、攪乱で失われているが、主柱穴は４本であると考えられる。主柱穴は直径40～60cm、深さ20～35cmである。

周壁溝は幅25～40cm、床面からの深さ６～10cmで、カマドの部分を除き、ほぼ全周していたと考えられる。

南壁のほぼ中央で南北60cm×東西65cm以上、深さ５～10cmの土坑（SB 01－SK 01）を検出した。埋土内より須恵器甕等が出土している。

出土遺物としては、カマドの西側袖部の上面より、土師器高坏が出土した他、北東隅の床面直上より、須恵器高坏が出土している。

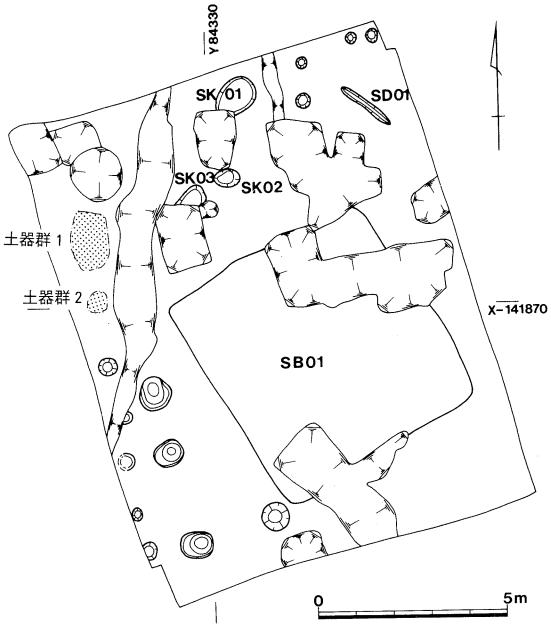


fig. 18　第２遺構面平面図

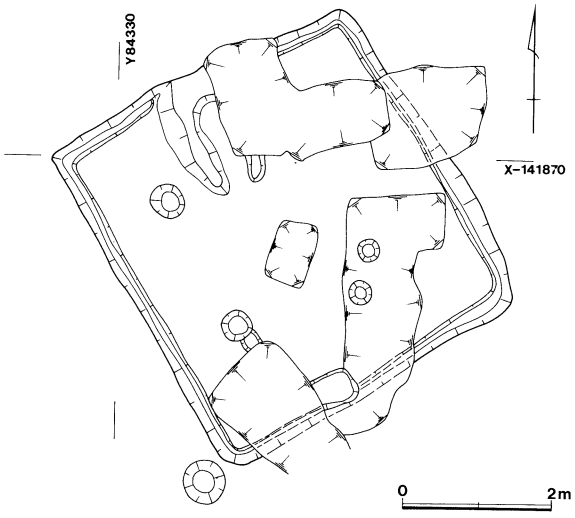


fig. 19　SB 01 平面図

SK 01　調査区の北側中央で検出した楕円形の土坑である。全長 1.2 m以上× 0.9 m、深さ５～10cmである。南西側は攪乱坑により削られている。埋土内より土師器が出土している。

SK 02　調査区の北側、SK 01 の南方約 1.5 mで検出した楕円形の土坑である。全長60×50cm、深さ10～20cmである。埋土内より土師器が出土している。

SK 03　調査区の北側、SK 02 の西方約 0.5 mで検出した楕円形の土坑である。全長70cm以上×

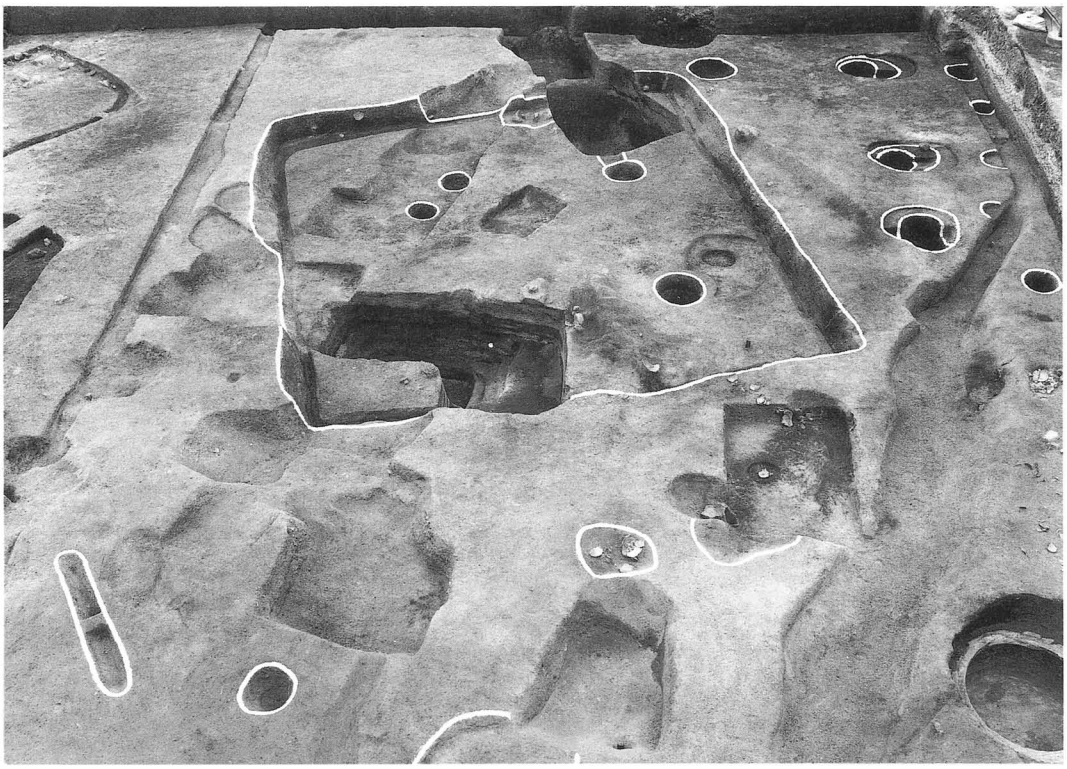


fig. 20
第２遺構面全景

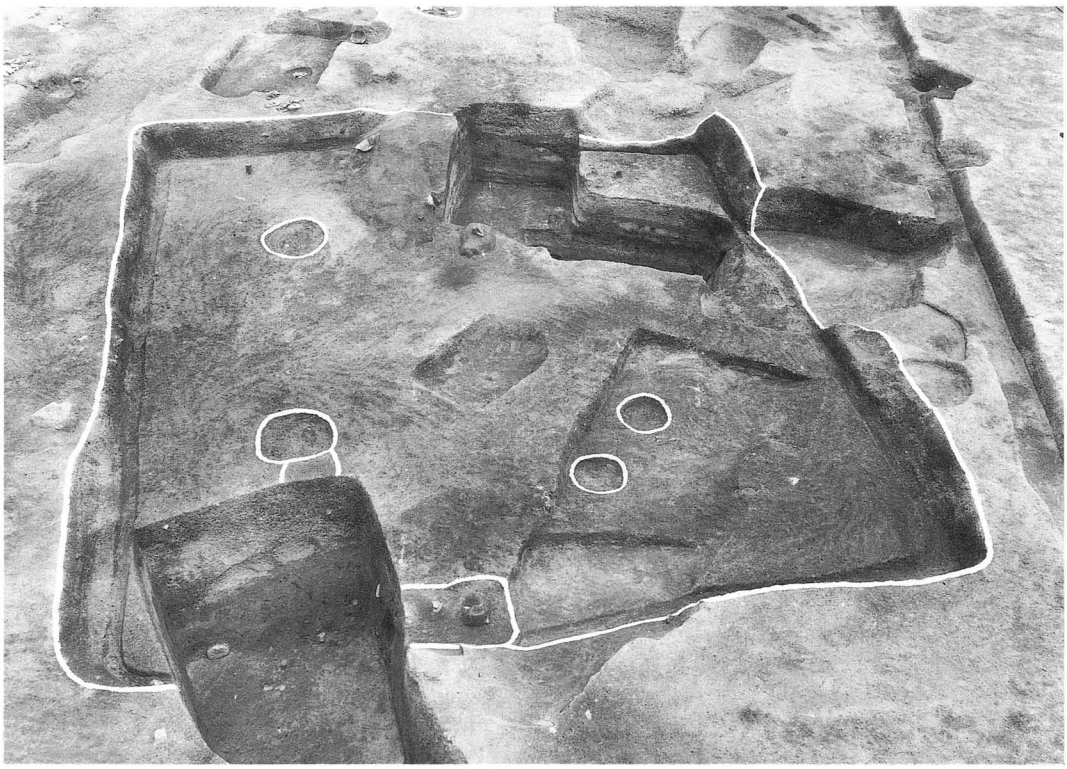


fig. 21
SB 01 全景

50cm以上、深さ10～20cmである。南側は撹乱坑により削られている。埋土内より土師器が出土している。

SD 01　調査区の北東側で検出した溝状遺構である。現存長 1.6 m、幅15～20cm、深さ10～15cmである。埋土内より土師器が出土している。

第３遺構面　現地表下 1.6 ～ 1.9 m（標高 26.40 ～ 26.70 m）の淡褐色砂質土上面で検出した遺構面である。検出遺構として、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴住居１棟、土坑１基、

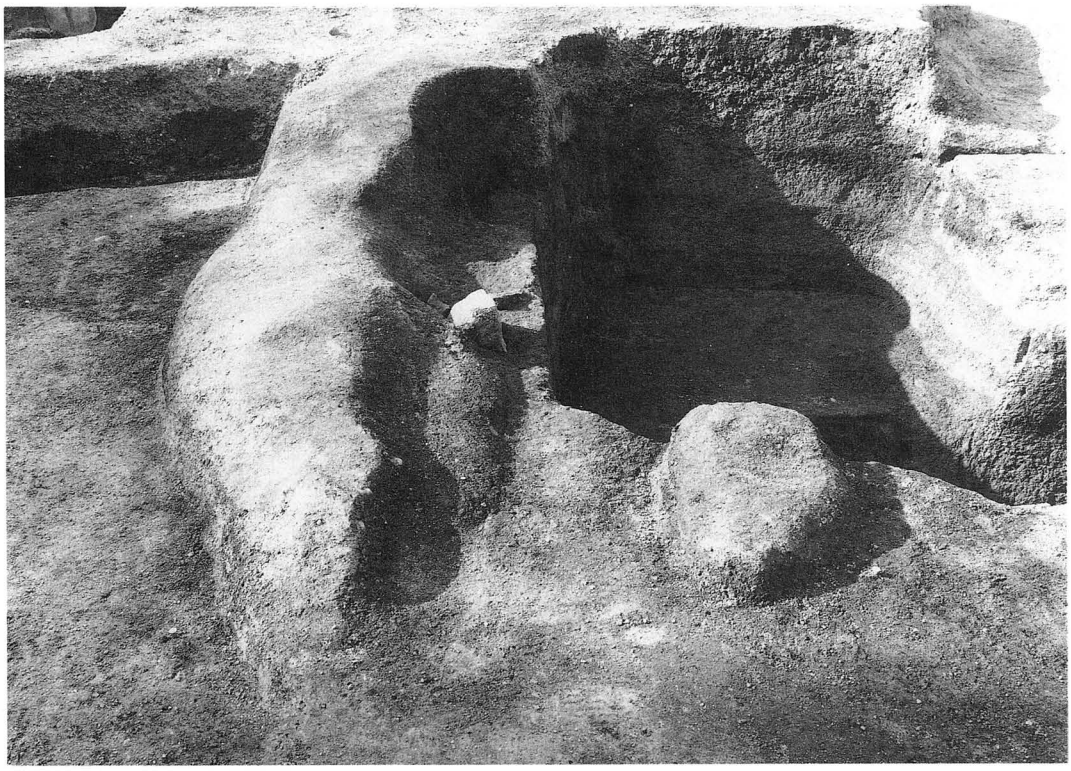


fig. 22
SB 01 カマト

自然流路等がある。

SB 04　調査区の南西隅で検出した隅丸方形の竪穴住居である。北東部のみ検出しており、調査区外にのびている。東西 1.3 m 以上×南北 1.2 m 以上、深さ10～20cmである。幅15～20cm、深さ 5 ～10cmの周壁溝がめぐっている。柱穴は検出されなかった。

SK 04　調査区の南端中央で検出した楕円形の土坑である。西側は撹乱坑により削られており、南側は調査区外にのびている。東西 1.2 m 以上×南北 1.6 m 以上、深さ15～25cmである。

自然流路　調査区の北東から南西に向かって流れる、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が多量に出土した自然流路である。

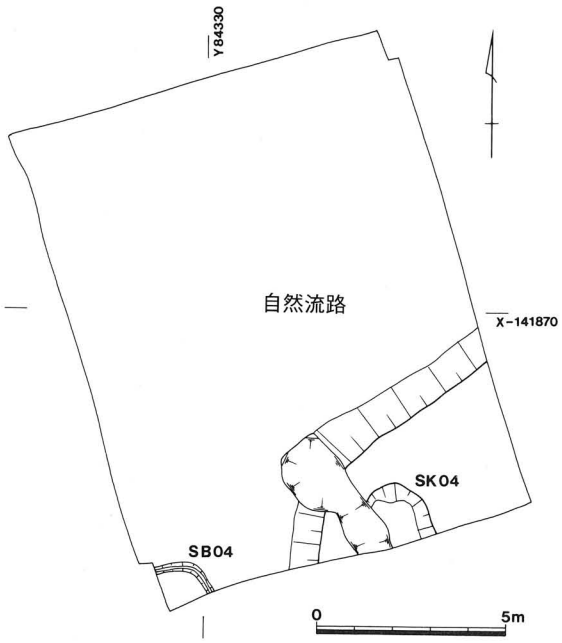


fig. 23　第 3 遺構面平面図

3．まとめ

今回の調査の結果、弥生時代～古墳時代にかけての集落跡の存在が明らかになった。また、第 2 遺構面で検出した SB 01 は、出土遺物から古墳時代中期（ 5 世紀前半頃）と考えられる。

SB 01 の北壁で検出したカマドは、全長が 2.0 m 以上の極めて特異なもので、郡家遺跡城之前地区などで検出されているＬ字形の煙道を有するカマドとともに、当地域において注目すべき例といえるであろう。

4．郡家遺跡　篠之坪地区　第6次調査

1．はじめに

郡家遺跡は、その名が示すように旧国の「郡衙」推定地として知られ、昭和54年度の郡家遺跡大蔵地区の調査において奈良時代の大型の柱掘形の掘立柱建物址が検出され、菟原郡衙推定地として認識されるようになった遺跡である。昭和59年都市計画道路山手幹線街路築造工事に伴う発掘調査において5世紀後半から6世紀中葉の竪穴住居址で構成される集落址が発見された。また、都市河川天神川の右岸（御影字城之前・篠ノ坪地区）では古墳時代の集落址を中心とする遺跡であることが判明している。

今回の調査は、事業用兼居住用ビル建設に伴う調査である。平成4年2月、建設工事に先立って試掘調査を実施した結果、現地表下1.0 mで遺物包含層が確認され、中世・古墳時代の遺構面と古墳時代の遺構面を切る弥生時代後期の自然流路が存在すると推定された。

調査範囲は、建物建設予定地と建物に付属する階段部分の工事による遺跡破壊部分に限定した。

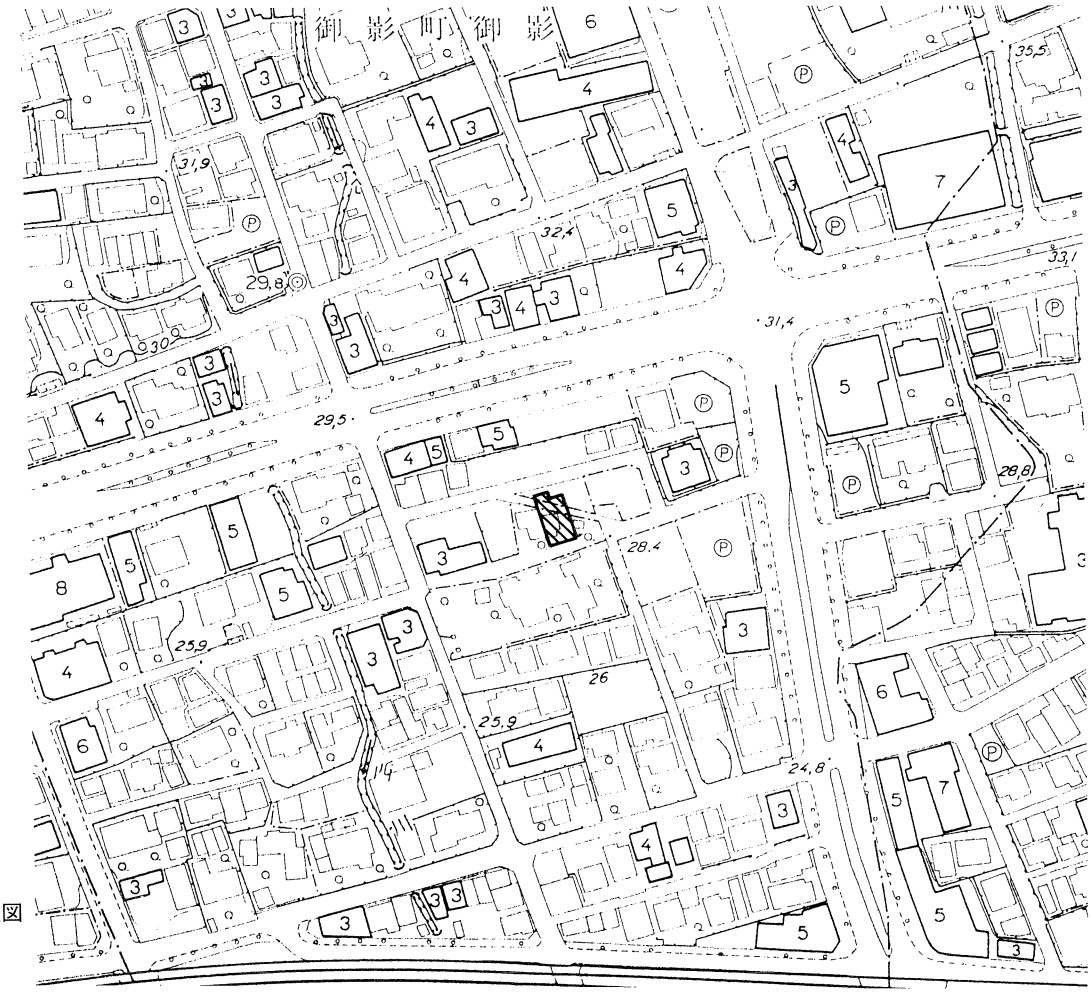


fig. 24
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要

調査は重機械によって造成土と旧耕土を除去して、それ以下は人力により掘削した。その結果、古墳時代の遺物包含層上面で、中世整地層と考えられる黄褐色粘質土を一部で検出した。精査の結果、中世整地面では柱穴等を検出したが、建物としてまとまるものはない。

さらに、古墳時代の遺物包含層を除去した結果、調査地の北東部で弥生時代後期の自然河道の埋没面上で、方形の竪穴住居2棟（SB 02・03）を検出した。その後、SB 02・03の精査作業を進めるなかで、SB 03に重複して東西8.0 m、南北6.0 mの長方形の竪穴住居（SB 05）、SB 02の南東隅の床面で竪穴住居（SB 06）を検出した。一方、調査地の北半分については北東から南西方向に流れる河川の南岸を確認した。河川の堆積は中央部で砂と粘土の互層による急激な流れ堆積であったが、南岸縁辺では、有機質土がレンズ状に堆積していて、多量の弥生土器片が出土した。河川内の調査は工事影響範囲までで止め、河川北岸の確認および河川底の検出は行わなかった。

SB 02　調査地中央部から南東隅で確認した一辺7.2 mの方形の竪穴住居址である。北西隅部と南辺の一部が攪乱されて欠失している。竪穴の壁体は崩壊が激しく緩く傾斜する立ち上がりのみを検出したにすぎないが、北辺では床面から20cm前後が残存していた。また、北辺および西辺では幅20cm、深さ10cm前後の周壁溝が検出された。壁体の立ち上がりが4 cmしか残っていない南辺中央部では周壁溝は検出されず、竪穴床面とともに削平を被ったものと考えられる。北辺東よりでは、カマドの痕跡と考えられる落ち込みを検出した。カマドの煙道部は竪穴壁体の取り付き部で長さ75cm、幅80cm、深さ12cmの平面U字形に掘り窪められており、さらに先端部からはやや北東方向に屈折して幅20cm、深さ20cmで調査地外に伸びている。カマドの袖部は残存せず、浅く掘り窪めた燃焼部に東西1.3 m、南北1.0 m、深さ20cmの楕円形の灰溜まりピットを設け、焚き口としている。カマドの全長は竪穴壁体の取り付き部までで3.0 mを計測する。主柱穴は4ヵ所検出した。各々南北2.6 m、東西3.0 mの柱間隔である。出土遺物は灰溜まりピットの炭上面で滑石製勾玉が、灰層内から土師器・須恵器片が出土したほか、カマドの西辺の床上で須恵器甕片が出土している。

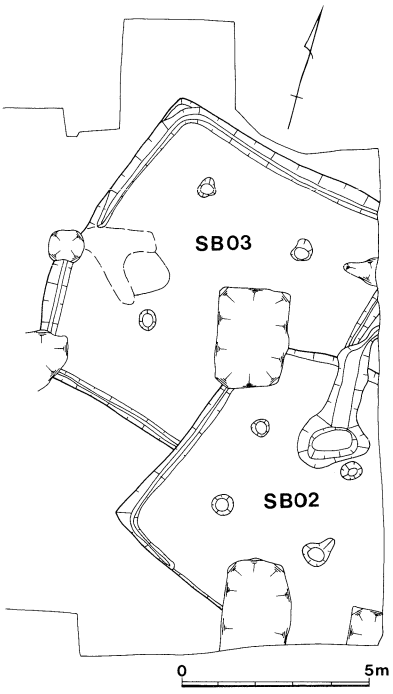


fig. 25　第2遺構面平面図

SB 03　調査地北部で検出した一辺7.8 mの方形竪穴住居址である。竪穴の南東隅部はSB 02によって切られている。竪穴の壁体は崩壊が激しく緩く傾斜する立ち上がりを検出したにすぎないが、北辺・西辺では床面から20cm前後、東辺・南辺では10cm前後が残存していた。また、壁体沿いには幅18cm～25cm、深さ10cm～15cmの周壁溝が全周している。カマドは西辺のやや南よりで検出した。精良な灰白色粘土を含む堅緻な土塊がV字状に検出され、焚き口と推定される土塊東側に灰層を含む落ち込みが検出されている。カマドの袖部残欠と想定された精良な灰白色粘土を含む土塊が断面「ハ」字状に残り、カマドの袖基部を残すものと推定される。このカマドの袖基部の内側には、長径2.4 m、短径1.5 mの不整楕円形の掘り込みがみられる。カマド基底と推定される掘り込み内の堆積土の中間には、炭灰層が10cm前後でレンズ状に堆積しており、その周辺から須恵器坏蓋・壺体部片が出土している。主柱穴は3ヵ所検出した。南東部の主柱穴は既掘坑によって欠失している。主柱穴

fig. 26
SB 02・03 全景

の間隔は東西 3.2 m、南北 3.9 mである。出土遺物は床面中央部で土師器甕片・須恵器坏蓋片、周壁溝内から土師器片、須恵器甕片が出土している。

SB 05　北東隅部と北西隅部を除く大部分が、上層の SB 03 に重複する状況で検出された長方形の竪穴住居である。南北 6.4 m、東西 8.0 mの規模を測るが、南側がややひろがり台形状となっている。竪穴住居南東隅部は SB 02 のカマド煙道部によって切られ、削平されて残存しない。竪穴住居壁体は北東隅部と北西隅部で20㎝～30㎝を残すものの、大半の壁体は 5 ㎝～10㎝前後を残すのみで、肩崩れ及び削平をうけたと考えられる。周壁溝は削平をうけた南東隅や北辺で残さないもののほぼ竪穴住居壁体に沿って全周している。周壁溝は幅30㎝～20㎝、深さ 5 ㎝～10㎝前後ある。カマドは東辺の北東隅部に接して検出した。精良な黄白色粘土を含む堅緻な土塊が楕円形状に検出され、カマドの袖部残欠と想定された。精査の結果、長径 2.2 m、短径 1.35 mの楕円形の焚き口部と燃焼部をつくる掘り込みの外縁に幅20㎝～35㎝、残存高13㎝～ 7 ㎝の堤状の袖をつくり、竪穴住居壁体外方に向かって長さ50㎝の舌状に掘り窪めた煙道を取りつける構造のものであった。カマド上部については不明であるが、全長 2.7 mの規模を有する。カマド内からの出土遺物はカマド袖部崩壊土内から滑石製品が出土したほか、焚き口部と燃焼部埋め土内から須恵器・土師器甕片が出土している。竪穴住居の主柱穴は、中央やや北よりに 2.4 mの間隔で 3 か所検出されているが、南東部の主柱穴については既掘坑によって削平され不明である。出土遺物は、北東隅部の北辺周壁溝内から須恵器高坏脚部が出土した他、床面上で須恵器蓋坏が出

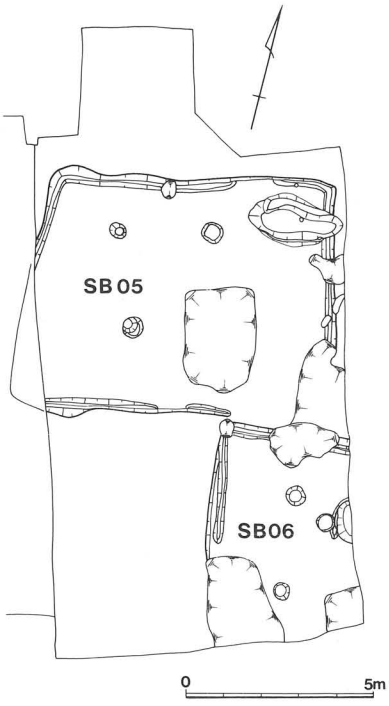


fig. 27　第 3 遺構面平面図

土した。

SB 06　調査区南東部で検出した方形の竪穴住居である。東西 3.5 m以上、南北 5.5 m以上の規模を持つと推定される。竪穴住居西辺は攪乱坑によって欠失している。竪穴住居は全体に、SB 02 によって削平をうけ、床面を欠失させており、平面プランは辛ろうじて北辺・西辺に残る竪穴掘形と周壁溝によって確認できた。竪穴住居壁体は10cm前後残存している。周壁溝は幅20cm～28cm、深さ14cm前後で全周していたと推定される。竪穴住居北より調査区東端で焼土を含む土坑を検出したことから、カマド焚き口部の一部と考えられ、東辺にカマドが設けられたと推定される。主柱穴は 2 ヵ所検出された。出土遺物は、床貼土と考えられる土層から須恵器・土師器片が出土した。

fig. 28
SB 05・06 全景

3．まとめ

今回の調査は、西側隣地における篠坪地区第 5 次調査に引き続き実施したもので、第 5 次調査と同様に、古墳時代 5 世紀中葉～ 6 世紀前半の竪穴住居を確認した。もとより篠坪地区の位置する都市河川天神川右岸は古墳時代の集落遺跡として竪穴住居及び掘立柱建物群が集中する地域であった。昭和59年度の都市計画道路山手幹線街路築造工事に伴う調査では 5 世紀後葉～ 6 世紀初頭の竪穴住居と 6 世紀前半の掘立柱建物が検出されている。また、昭和61年度の調査では煙道が直角に曲がり外壁に沿って屋外に伸びる 5 世紀後半の竪穴住居なども検出され、住居の構造においても特異な性格をもつ集落として注目されている。今回の調査では、遺物の整理作業が完了していないため、明確な時期比定はできないが、床面出土遺物・カマド内出土遺物などから、竪穴住居の営まれた時期は遅くとも 5 世紀の第 3 四半期と考えられ、郡家遺跡の集落形成の時期が 5 世紀中葉にまで遡ることが明らかになった。

郡家遺跡の古墳時代集落は、以後 6 世紀前半の掘立柱建物による集落形成まで継起的に営まれる。今回の調査は集落形成期を明らかにできたものの、調査区域が狭小であるため集落構造の把握にまで到っていない。今後、今回のような調査を集約しつつ集落の全体像を明確にする必要があると考えられる。

5．郡家遺跡　篠之坪地区　第７次調査

1．はじめに　郡家遺跡は昭和54年に大蔵地区で調査が実施され、奈良時代の掘立柱建物が確認された。柱の掘方が大きく莵原郡衙の可能性が考えられている。その後現在に至るまで調査を重ね、弥生時代後期～古墳時代後期まで続く集落が存在することも確認されている。

篠之坪地区は、マンション建設に伴い昭和63年に調査されて以来現在に至り、付近には弥生時代後期～古墳時代中期の集落が存在していることが判明している。

今回は道路側溝の敷設工事に伴い、第２次調査（平成３年度）の西側部分に接して第７次調査を実施した。

fig. 29
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　現地表下約50㎝～80㎝で、古墳時代前期の遺物を含む第４～第９層（黒灰色～淡黒灰色系統の砂質土）を確認した。これ以下の第10層より下層からも遺物を確認しているが、工事の影響深度の関係から遺構面の破壊を免れるため、現状保存とした。

重機掘削時に第２層から奈良時代の甕が破片で確認されているが、第３層上面から遺構は確認されていない。第３層から遺物は出土していない。この第２層と第３層は洪水砂である可能性が高い。

第４～第９層（黒褐色～淡黒褐色系統の砂質土）からは、庄内～布留式期の遺物が多く出土している。第２次調査の結果から、この調査区が位置的に旧河道の範囲内に入ってい

ることは確実である。水平堆積をしておらず、攪拌されている状況も土層断面から観察される。この事実から第４～第９層は旧河道の最終埋没土層である可能性が高い。

第10層（黄灰褐色中砂～粗砂）から下層は、明らかに旧河道の堆積土層であろう。この第10層からは甕形土器（fig. 30)が確認されている。

流路－１　第３層と第４層の下面から切り込み、ほぼ南北方向に流れる流路である。

流路の底部付近に堆積した第８層からは、吉備からの搬入土器（fig. 30）を含む庄内～布留式期の遺物が多く出土している。

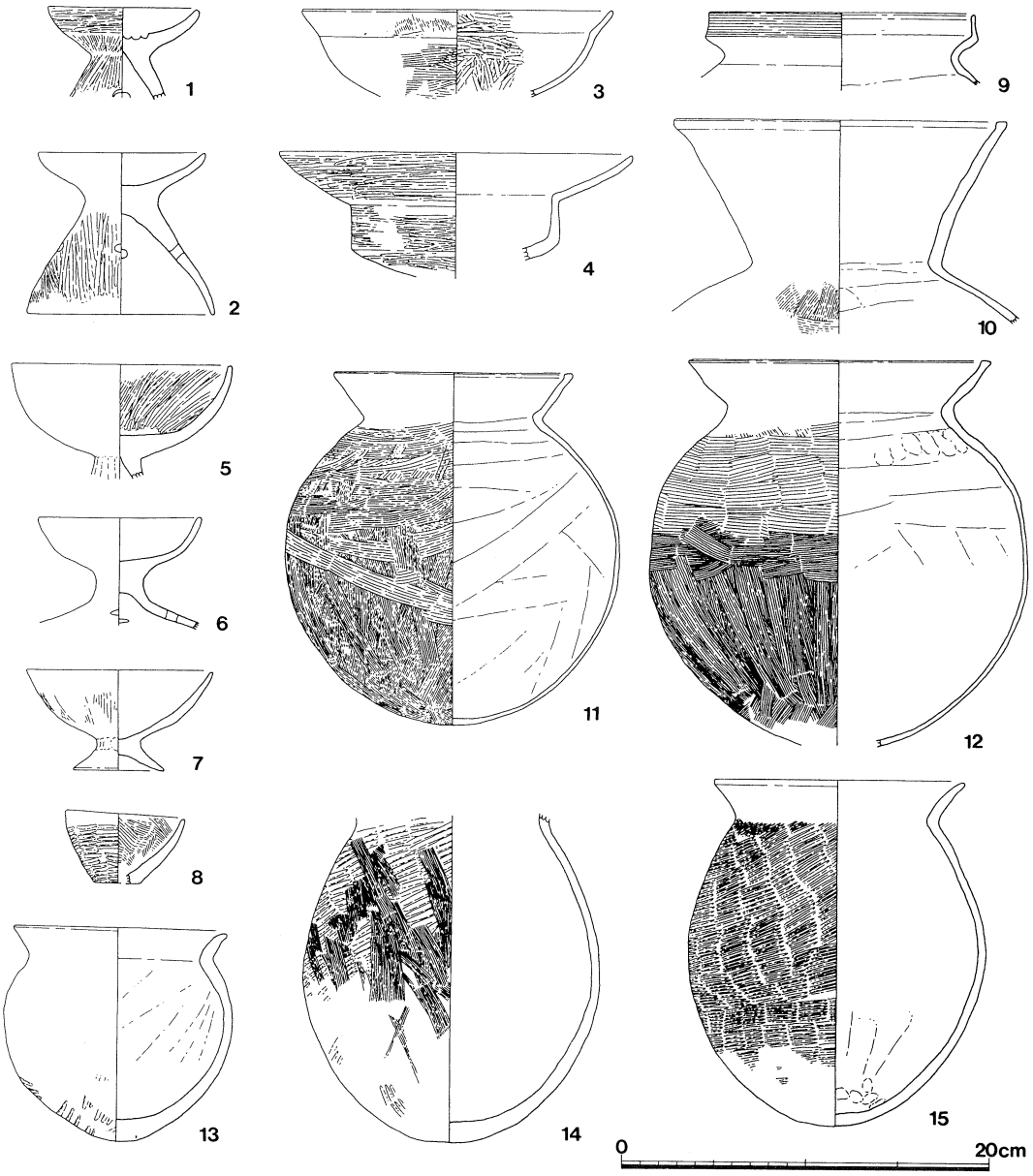


fig. 30
流路－１出土土器
実測図

３．まとめ

今回の調査結果では、第４～第９層から庄内～布留式期の遺物が多く確認されたことがあげられる。この第４～第９層は旧河道の最終埋没土層と考えられる。ただし調査面積が狭いため、確実な判断はくだせない。

調査地の東側に接している第２次調査では、弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構が確認されている。今回調査した第４～第９層の下面は、この遺構面にほぼ対応するものと思われる。

6．篠原（しのはら）遺跡　第７次調査

1．はじめに

篠原遺跡は、昭和４年に小林行雄博士によって発見され、世に知られるようになった縄紋時代～弥生時代の遺跡である。戦後しばらくはその遺跡の内容・性格について明らかにする調査は実施されなかったが、昭和58年の篠原中町２丁目のマンション建設に伴う調査によって弥生時代後期・縄紋時代晩期の遺構・遺物が多量に発見され、広範囲に及ぶ集落遺跡であることが判明した。その後も数次にわたる調査が重ねられ、縄紋時代前期～中期末、晩期、弥生時代中・後期、古墳時代前期の遺構・遺物が知られるようになった。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、敷地北側の建物部分については、建物基礎掘削深度は浅く、遺跡に影響はないと判断できた。敷地南側では、地下駐車場等を設けるため、80㎡の工事影響範囲について埋蔵文化財調査を実施した。

fig. 31
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要

第１遺構面

地表下40cmまでを重機械によって掘削し、さらに試掘調査で中世遺物包含層と推定された土層を人力で掘削した結果、同層には近世遺物・中世遺物が混在していたため、さらに弥生土器を含む比較的安定した土層上面まで掘り下げて精査を行った。この結果、上層から掘り込まれた近世陶磁器を含む淡灰色粘性砂質土を埋め土とするピット３か所を検出した。

ピット列

ピットは南北に並び、間隔は北側で1.6ｍ、南側で2.0ｍである。ピット内からは、近世陶磁器片が出土した。

第２遺構面　また、調査区南辺では中世・近世の遺構面となる弥生時代遺物包含層に掘り込まれた溝状の落ち込みを検出した。

さらに、弥生時代遺物包含層を除去した結果、調査区北辺に接して方形竪穴住居２棟を検出した。

SB 01　調査区北東辺で検出した一辺 5.9 ｍの方形竪穴住居である。竪穴住居の南辺は確認できるものの、東・西辺の一部しか検出できず、竪穴住居は調査区外にある。竪穴住居の壁体は、南辺で肩崩れしつつも約20㎝前後残る。東・西辺では削平されながらも約22～25㎝の壁体が残っていた。周壁溝は幅20㎝前後で全周し、深さは８㎝である。主柱穴は、南辺より中央で２か所の柱穴を検出した。２か所の柱穴では東によって柱痕跡が確認でき、深さは35㎝あった。この２か所の柱穴の中間、調査区北壁に接して炭化物を含む楕円形の落ち込みが検出された。この落ち込みは建物内の位置からして、炉跡と考えられ、２か所の柱穴も炉跡に付属する柱穴と考えられる。出土遺物は、床面および埋土下層で全く検出されなかったが、竪穴住居東壁に接して埋土上層より弥生時代後期の甕形土器の破片が出土している。

SB 02　調査区の中央、北西よりで検出した一辺 5.0 ｍの方形竪穴住居である。竪穴住居の北東部は SB 01 によって削平をうけ欠失している。また、竪穴住居の北西隅は調査区外にある。竪穴住居の壁体は南辺・東辺では肩崩れしつつも約15㎝前後残る。北辺・西辺では残りは良好で、20㎝前後残存していた。周壁溝は幅15㎝前後で全周し、深さは７㎝である。主柱穴は竪穴住居のやや西によって、４か所確認できた。主柱穴のうち北東側のものは、SB 01 内で検出された。主柱穴の掘形は楕円形をしていて、深さは25㎝前後掘り込まれている。主柱穴の掘形のうち南西側のものは、掘形内に河原石を充填して柱を支えていた。主柱穴の間隔は東西 2.0 ｍ、南北 3.1 ｍある。主柱穴の西側柱並びのやや南よりで炭化物

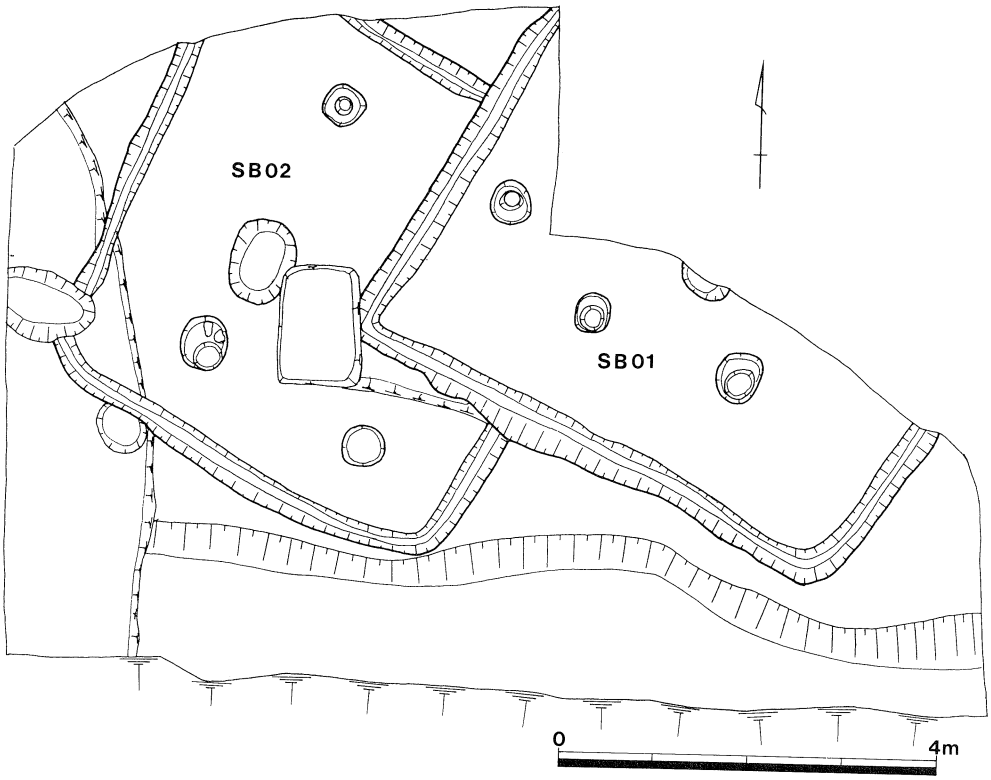


fig. 32
第２遺構面平面図

を埋土に含む楕円形をした落ち込みを検出した。落ち込みは東西70cm、南北90cm、深さ10cmあり、炭化物は埋土上層にみられ、埋土内からは弥生土器細片が出土している。出土遺物は、周壁溝と埋土上層で弥生時代後期の土器細片が出土しているが、床面では土器などの遺物は検出されなかった。

落ち込み　中世遺物包含層（第７層）の直下の弥生時代遺物包含層から掘り込まれた溝状の落ち込みである。深さは42cmある。埋め土内からは、鎌倉時代の須恵器・鍋の支脚などが出土し、これらに混じって弥生時代の壺形土器頸部なども出土している。

第３遺構面　第２遺構面でのSB 01の床面を精査中、黒灰色土を埋め土とする落ち込みを検出、さらに下層に遺構が存在することが判明し、遺構面となっている暗黄褐色砂質土層〔灰色砂ブロック含む〕を除去し、黄褐色砂質土層まで掘り下げた。その結果、調査区東部において隅丸方形の竪穴住居１棟を検出し、西部においては、柱穴28か所を検出した。

掘立柱建物　調査区西部で検出した２間×３間以上の東西棟の建物である。南北 2.9 m、東西 5.3 m以上の規模がある。柱間距離は梁間 1.5 m等間、桁行では東側で 1.6 m、西側で 2.4 mである。梁柱の位置は梁の方向の外側にあり、梁の方向の内側にある柱穴Aが本来の梁柱で、この柱は棟持ち柱に相当するものかもしれない。柱穴は桁柱・隅柱は直径30cm前後、棟持ち柱は大型で直径40cmの柱掘形である。いずれも、柱痕跡は留めず、深さは30～40cm前後である。柱掘形内からの出土遺物は、弥生土器細片のみである。

SB 03　調査区東部で検出した東西 4.8 mの隅丸方形の竪穴住居である。竪穴住居の北側と南東隅は調査区外となっている。竪穴住居の壁体は10～15cm程度残していた。周壁溝が幅20cm前後で全周し深さは６cm前後である。周壁溝の内側肩部には、70～90cmの間隔で直径15cm前後の小ピットが検出された。小ピットは深さ15～20cm前後で、木芯痕跡を残すが杭状の

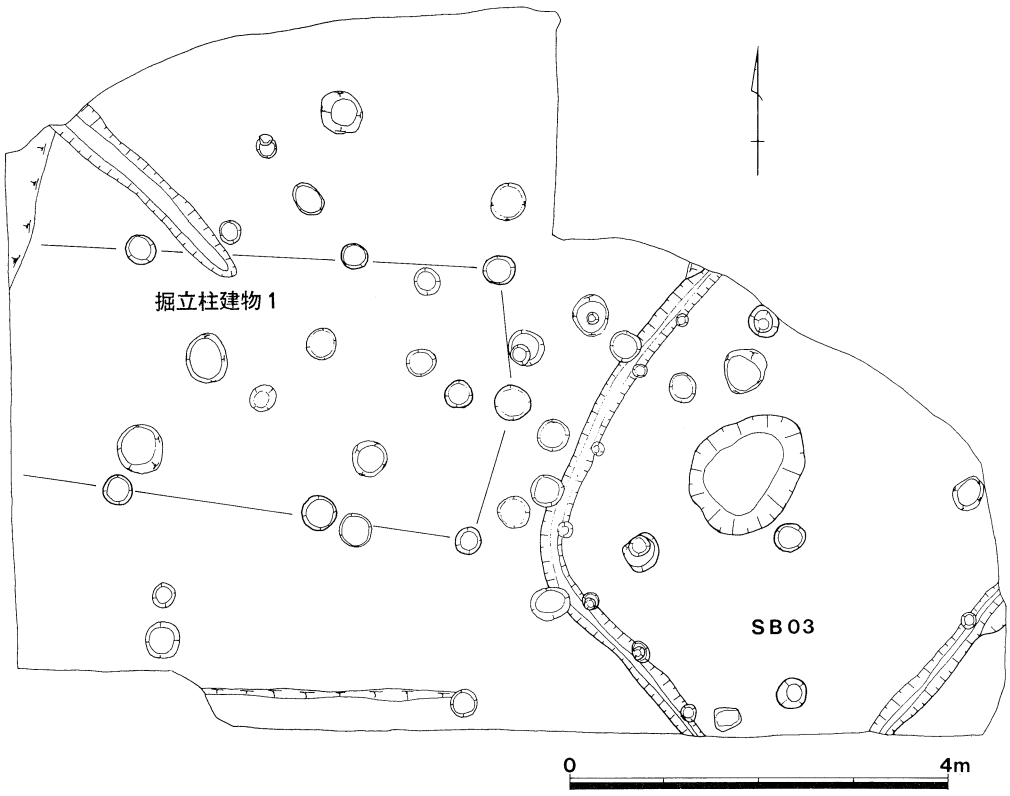


fig. 33
第３遺構面平面図

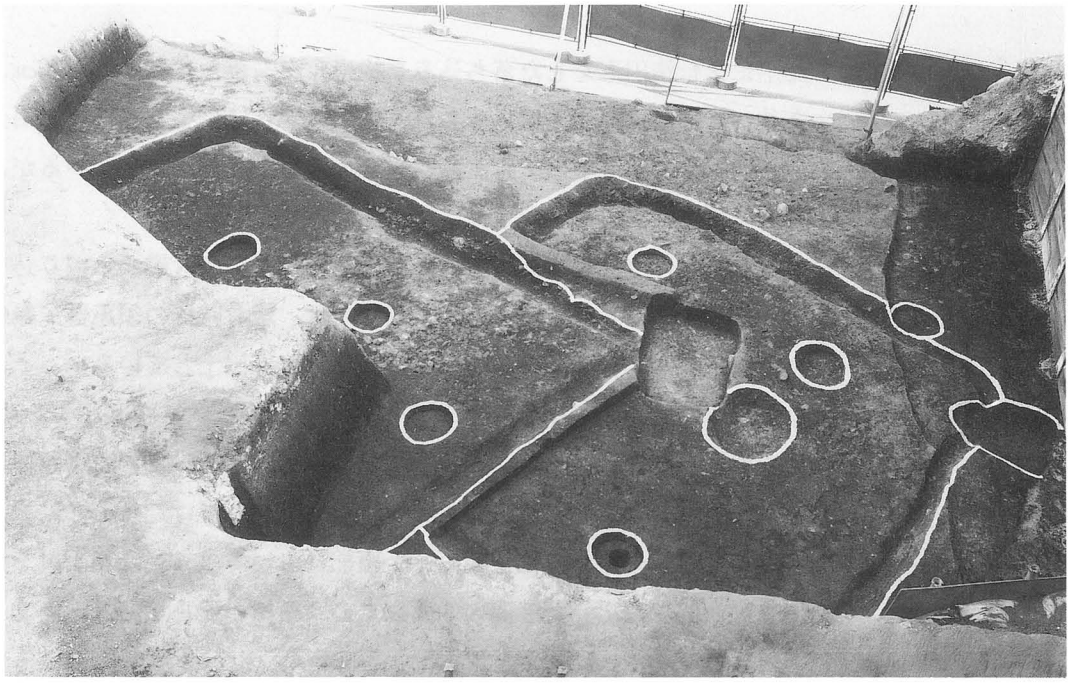


fig. 34
第２遺構面

fig. 35
第３遺構面

ものであったと推定される。主柱穴は竪穴住居の４隅のやや内よりで３か所確認した。主柱穴の間隔は東西で2.3ｍ、南北で2.9ｍあり、南側で狭い間隔になっている。柱掘形は直径30～40㎝の円形で、直径20㎝の柱痕跡を残すものもある。柱掘形の深さは30㎝前後ある。

竪穴住居の中央では、埋土内に多量に炭化物と弥生土器を含む直径30㎝の円形柱穴を確認した。深さは20㎝前後で浅いが、竪穴住居の中央にあって、建物の上屋の構造に関連する柱穴と思われる。この中央の柱穴の西側で長径1.4ｍ、短径1.1ｍ、深さ20㎝の楕円形をした、断面船底形の土坑を検出した。土坑の埋め土の上層には炭化物が多量に埋まっていた。この土坑は、竪穴住居のやや西よりに位置するが、炉に相当する施設である可能性

がある。出土遺物は、床面上では検出されず、床貼り土内から弥生土器細片が出土している以外は、竪穴住居の時期を特定できる資料はない。しかし、中央の柱穴と、南東部の柱穴の埋土内から弥生時代後期の土器が出土していることから、弥生時代後期を大きく遡らない時期に建てられたと考えられる。

柱穴群　第3遺構面においては、掘立柱建物の周囲で16か所の柱穴を検出したが、建物としてまとまるものはない。柱穴の規模は掘立柱建物と同様の規模である。これらの柱穴の一部はSB 03を切り込んで掘られており、掘立柱建物と柱穴群は竪穴住居より後に掘られたと考えられる。

第4遺構面　第3遺構面で、SB 03の炉穴を検出した際に下層から縄紋土器片を検出したため、調査区中央を南北に調査坑を掘って、さらに下層での遺構・遺物の有無の確認調査を実施した。その結果、第3遺構面となっている黄褐色砂質土層内から縄紋時代深鉢口縁や石鏃・不定形刃器・サヌカイト片が多数出土した。このため調査区全域をさらに下層の暗黄褐色細砂面まで掘り下げて精査した結果、ピット21か所、河原石を含む土坑3基と不定形土坑3基を検出した。この第4遺構面は、調査区東部では工事影響範囲に含まれず、遺構プランを検出するだけの調査に止め、埋め戻しを行って保存に努めた。

ピット群　調査区西部で12か所、東部で7か所検出した。その内、調査区西部のピット群について精査を実施し、東部のピット群については保存するため遺構面精査による位置確認の調査を行った。

調査区西部のピット群は調査区の北よりに集中するが、建物としてのまとまりは認められなかった。ピットは直径20～40cmの円形の掘形をしていて、深さ30cm前後あり、底には拳大の河原石が置かれていた。数か所のピット埋土内からは、縄紋時代晩期の土器・サヌカイト片が出土している。調査区東部のピット群は、内部精査は実施していないが、大きさ・埋土などは調査区西部のピット群と同様で、同じ性格のものと考えられる。

土　坑　調査区西部で2か所、東部で1か所検出した。調査区西部で検出した土坑はいずれも直

fig. 36
第4遺構面平面図

径70cm前後の円形土坑で、土坑1は20cm、土坑2は12cm前後の深さがある。土坑1は30cm程度の河原石を中心に、拳大の河原石が埋まっていた。土坑の中央部上層では縄紋土器底部を置いたように、底部を下にした状態で検出されている。土坑2は、溝を掘り込んで検出された。土坑2では河原石の充填はなく、サヌカイト片が1点検出されたにすぎない。土坑3は調査区東部のほぼ中央で検出された、東西2.0 m、南北2.3 mの不定楕円形の土坑である。内部精査は実施していないが、周辺のピットに切られ、表面精査の際に上層から縄紋時代後期の土器が出土していることなどから、先のピット群や円形土坑より古く掘られていたと考えられる。

集　石　調査区西部で1か所、東部で1か所検出した。いずれも浅く掘り込まれた直径60cm前後のくぼみに拳大の石をいれている。出土遺物は無く、遺構の性格については不明である。

溝　調査区西部の北側で検出した南北方向の溝である。南側では浅く、深さ6 cm、幅30cmで南端で途切れている。調査区北端で西方向に曲がり深さ30cm前後、幅70cm以上になる。出土遺物は、溝の埋め土下層から縄紋時代晩期の土器・サヌカイト片が出土している。

第5遺構面　第5遺構面では、ピットに切られる河道2条を検出した。自然流路が埋没した後に、ピットや土坑が掘られたと考えられる。

第4・第5遺構面より下層には、明褐色砂質土層・淡黄色細砂・転石を含む赤黄褐色粗砂が交互に堆積しており、工事掘削予定深度である現地表下2.5 mまで確認したが、遺構・遺物は検出されなかった。

河道1　調査区西部で検出した河道で調査区北西隅から南東に流れる。河道の幅は、北西部で狭く1.0 m、南東部で3.0 mと広くなっている。深さは、北西部で40cm、南東部で70cmであるが、中央部では深くえぐれて深さ95cmになっている。河道内は砂礫層が堆積しているが、中央部から南側の堆積土の中間層には黒灰色粘性砂質土層の有機質土が堆積し、同層から多量の縄紋時代晩期の土器が出土した。

河道2　調査区西部の東側で検出した河道である。河道1とは別の流れの河道の淀みにあたると思われる。南北幅2.7 m、深さ30cm程度の傾斜の緩やかな窪みとなっている。埋土内からは縄紋時代晩期の土器が出土している。

3．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居3棟・掘立柱建物1棟、縄紋時代晩期のピット群・土坑・河道と土器を検出した。

弥生時代後期の遺構は2層に分かれて検出された。上層部分で検出した方形竪穴住居2棟は弥生時代後期終末～古墳時代初頭と考えられ、下層の隅丸方形の竪穴住居と掘立柱建物は、弥生時代後期後半には相前後して建てられたと想定される。この調査結果は先の篠原中町2丁目の調査での竪穴住居の時期をも含めて今後検討する必要がある。縄紋時代の遺構の検出は、削平を被りながらも当地域の縄紋時代集落がかなりの広い範囲にわたるものであったことを明確にした。特に、今回の調査で検出したピット群の中には底に河原石を置くものもみられ、何らかの建物の柱穴であった可能性もあり、炉・竪穴壁体は削平によって消失したとも考えられる。また、第4遺構面の東部で検出した不定形土坑の埋土内から縄紋時代後期の擦り消し縄紋を施紋した土器が出土していることから、篠原の地域に縄紋時代後期にも集落があったことが想定される。

7．篠原遺跡　第8次調査

1．はじめに　篠原遺跡は、昭和4年に小林行雄氏によって紹介され、市内でも数少ない縄文時代中期から晩期にかけての遺跡として周知されていた。近年になりマンション建設等に伴い発掘調査が行われ、現在でもなお遺跡の残されている部分の多いことがあらためて確認されてきた。これまでの調査結果から、標高50～85mの丘陵扇状地の広い範囲に立地する縄文時代から平安時代までの複合遺跡であることが分かっている。

今回の調査は、建築影響範囲についてのみ発掘調査を実施した。

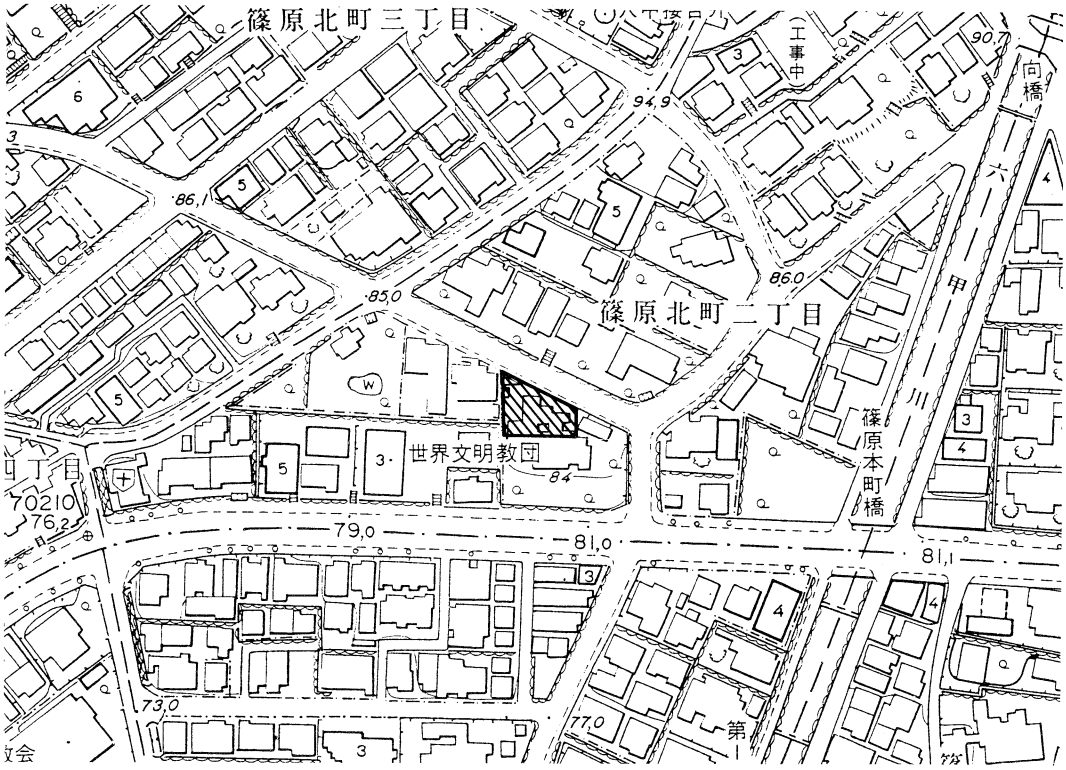


fig. 37
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　今回の調査で検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居1棟、住居址状の落ち込み2か所、土坑、ピットである。

遺　構

SB 01　⅓以上は調査地外にあるが、5.8×5.5mと推定される方形竪穴住居である。内部には、床面の壁添いに幅約1m、高さ約10cmの低いベッド状遺構を設けていた。中央の炉と推定される径約1mの土坑の周囲には幅20cm、高さ約7cmの焼土化した土手が設けてあり、約½周で検出された。4本柱の建物と考えられるが、壁添いの部分から浅いピットが検出されており、建物構造に関係するものであるかもしれない。周壁溝は南東隅部分において検出されたが、当初から全周していなかったと考えられる。

SB 02　SB 01の南に近接して検出された長径6m以上の不整六角形あるいは長方形と考えられる竪穴住居状の遺構である。一部でベッド状の段が検出されたが、未調査部分が多く形状、構造は不明な部分がある。

SX 02　SB 02の南に切りあって見つかった方形状の落ち込みであるが、工事掘削の影響深度に達しないため未調査である。溝掘により試掘を行ったが、深さ40～50cmで垂直に近く落ち

込み、竪穴住居ではないかと考えられる。

SK 01　大部分が攪乱により削られていたが、径約 2.5 mの土坑である。

これらの遺構は出土遺物から弥生時代後期のものと考えられるが、SK 01 は弥生時代中期の可能性がある。また、SX 01 からは弥生土器とともに縄文時代晩期の土器が出土しており、遺構埋没時に流入したと考えられる。

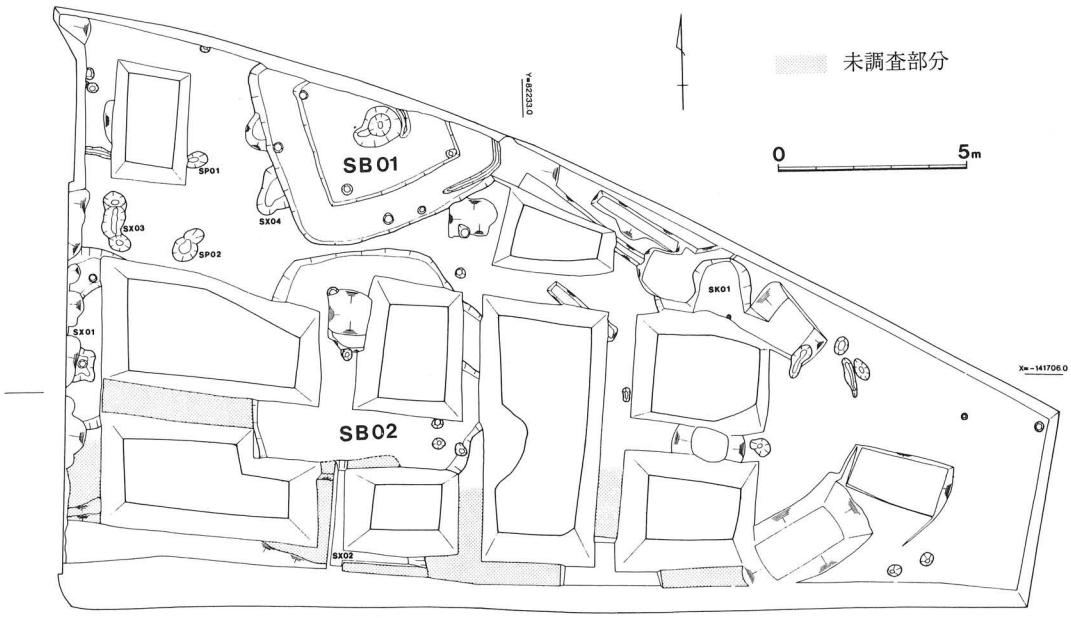


fig. 38
調査地区全体図

出土遺物　遺物包含層からは、僅かに須恵器片があるものの、弥生土器が主として出土した。弥生土器は、後期のものが中心で中期のものは少量である。遺構内からの出土遺物も、SB 01 の床面出土の土器以外は残存状態が良好なものが少ない。

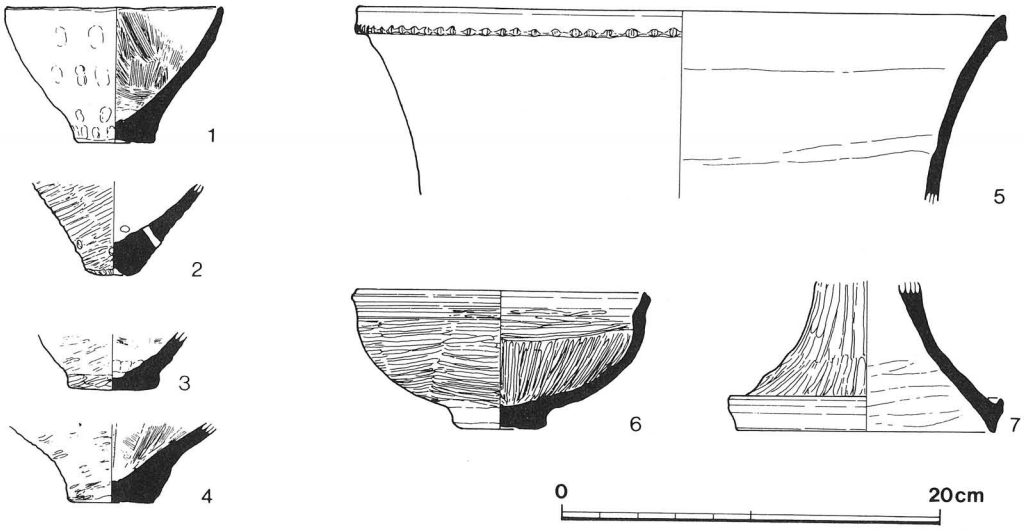


fig. 39
出土土器実測図

1・2：SB 01
3・4：SX 02
5・6：SX 01
7　：SK 01

3．まとめ

今回の調査は最小限の工事影響範囲に限定したため、幅50㎝程のトレンチ部分や未調査部分が多くあり、性格を明確にしえなかった遺構もあるが、弥生時代後期の竪穴住居が検出され、遺物では弥生時代中期の土器・石器、縄文時代晩期の土器も出土した。当調査地の南西約 250 mに位置する昭和62年度の調査地でも、弥生時代後期の竪穴住居が見つかっており、当時期の集落がこの付近一帯に存在していたことがうかがえる。

8．都賀（とが）遺跡　第3次調査

1．はじめに

都賀遺跡は、六甲参詣の南麓、都賀川東岸の標高40m前後の微高地上に立地する。周辺には、篠原遺跡、伯母野山遺跡、桜ケ丘銅鐸・銅戈出土地、処女塚古墳、西求女塚古墳など著名な遺跡が存在する。

当遺跡は、昭和62年に実施した都賀住宅地区改良事業に先立つ試掘調査で、弥生時代の遺物包含層が確認され、その存在が明らかになった。昭和63年、妙見山麓遺跡調査会によって仮設住宅建設予定地（160 m²）について発掘調査が実施された（第1次調査）。

調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓2基をはじめ、弥生時代中期の土坑・溝の他、鎌倉時代の土坑等が検出された。

平成元年も、妙見山麓遺跡調査会によって、改良住宅予定地（410 m²）について発掘調査が実施された（第2次調査）。

調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓2基、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴住居5棟、溝、ピット、奈良時代末～平安時代初頭頃の掘立柱建物1棟、溝、土坑、ピット、鎌倉時代前半の溝、土坑、ピット等が検出された。

調査当時、隣接地の住宅が除却されていなかったため、弥生時代中期～後期の遺構面の調査が完了し、下層の縄文時代早期の遺物包含層を掘り下げている段階で、隣接地の境界付近の調査区壁面が崩落する危険性が出て来た。そのため、縄文時代早期の遺物包含層の掘削途中で調査を打ち切り、埋め戻していた。今回は、その継続部分と設計変更により生じた地区を対象とした。

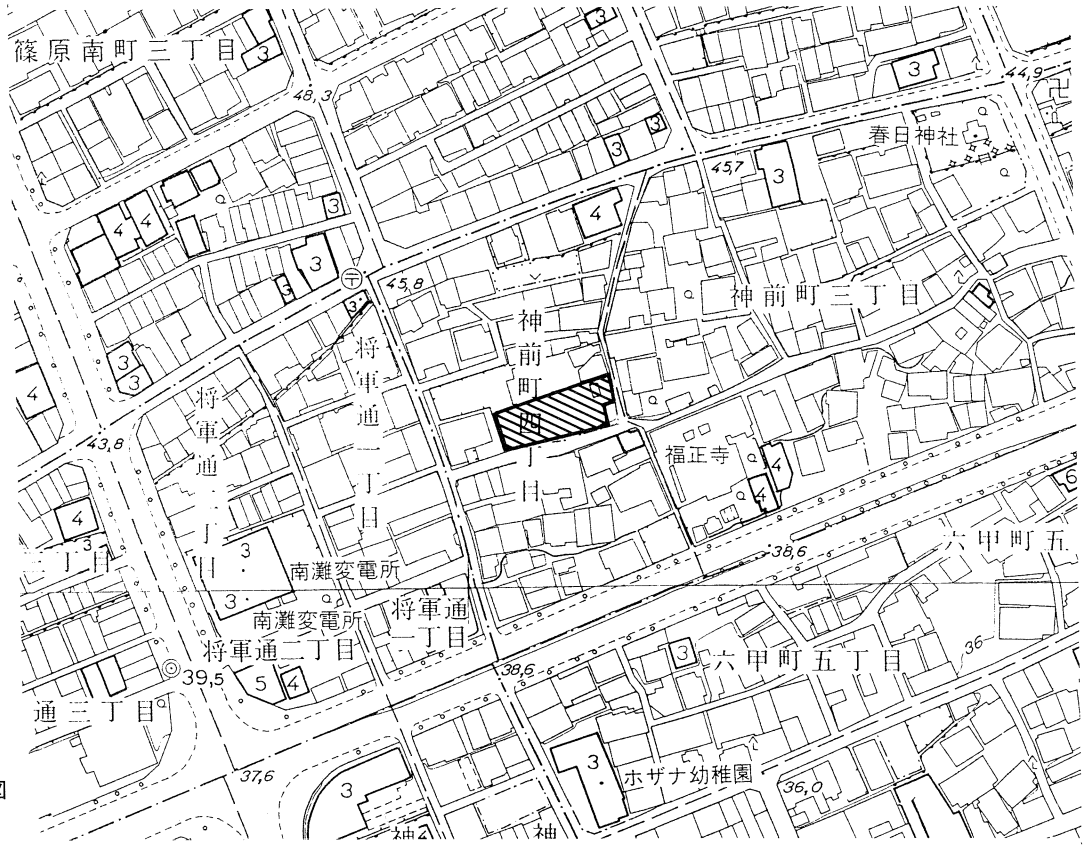


fig. 40
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　A－2区・B－1区・C－1区・C－2区については、妙見山麓遺跡調査会により縄文時代早期の遺物包含層の途中まで掘削が完了している。盛土除去後、遺物包含層を完掘した。包含層内より、縄文時代早期の押型文土器、サヌカイトの石鏃、剥片等が出土した。

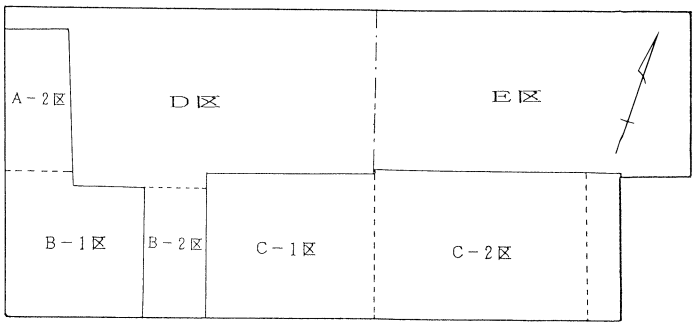


fig. 41　調査地区名

B区　B－2区は、既存の排水路が存在したため、第2次調査時には掘削が出来なかった部分である。調査の結果、奈良～平安時代頃の土坑1基、弥生～古墳時代の土坑1基・溝1条、弥生時代中期の方形周溝墓の一部（SX 01）を検出した。

C区　C－3区については、弥生時代中期の方形周溝墓1基（SX 02）をはじめ、弥生～古墳時代の溝2条（SD 01・02）等を検出した。

SX 02は第2次調査で西側周溝の北半と、北側周溝の西半を検出していたが、今回は、北側周溝の東側の一部を検出した。北側周溝は、全長2.0 m以上、幅0.7 ～ 1.2 m、深さ20～30cmで、周溝内の底面よりやや浮いた状態で弥生時代中期の壺形土器が1点出土した。この土器は、口縁部が打ち欠かれたように欠損しており、胴部下半に穿孔が見られる他は、ほぼ原形を保っている。頸部を北東側に向け、横倒しの状態で出土しており、方形周溝墓の供献土器と考えられる。

第1遺構面　D・E区　鎌倉～室町時代の掘立柱建物1棟（掘立柱建物1）、土坑4基（SK 06 ～ SK 09）、溝5条（SD 03・06 ～ 08・10）・ピット数10か所、江戸時代末の土坑1基（SK 02）、江戸時代以降の石組みの井戸1基（SE 01）、自然流路1か所等を検出した。

各遺構内及び遺物包含層内より、鎌倉～江戸時代末頃の須恵器・土師器・瓦器・陶磁器等が出土している他、SD 03の底より、結晶片岩製の石斧が1点出土している。

第2遺構面　奈良時代末～平安時代初頭の溝1条（SD 04）・土坑1基（SK 10）の他、ピット数10か所等を検出した。各遺構内及び遺物包含層内より、奈良～平安時代頃の須恵器・土師器等が出土している。

第3遺構面・上層　古墳時代前期～中期の土坑6基（SK 11 ～ 16）・ピット数か所等を検出した。各遺構内及び遺物包含層内より、少量の土師器が出土している。

第3遺構面・下層　弥生時代後期末～古墳時代前期の竪穴住居2棟（SB 05・06）、古墳時代前期の竪穴住居1棟（SB 03）、弥生時代後期の竪穴住居1棟（SB 07）の他、弥生時代後期～古墳時代前期の土坑1基（SK 04）等を検出した。

SB 03の南半及びSB 05の西半は第2次調査の際、調査されている。

SB 03　SB 03は、南側半分が、既存建物の基礎及び煉瓦塀の基礎により著しく削平を受けていたため、残存状況は良くない。隅丸方形プランの竪穴住居で、規模は東西約4.6 m以上×南北約3.6 m以上を測り、床面までの深さは、北壁付近で20～30cmである。

平面プランを確認した際に、北壁のほぼ中央から住居中央部付近にかけて焼土塊及び炭

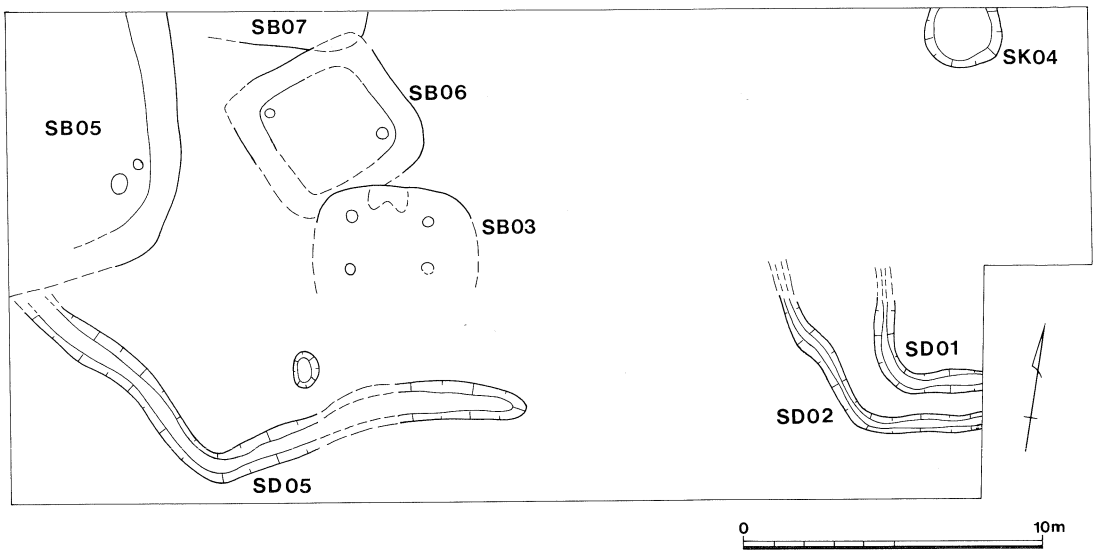


fig. 42
第3遺構面
平面図

層の拡がりを確認した。焼土面を検出しながら掘り下げたところ、北壁中央付近で、馬蹄形状のカマドを検出した。カマドは、全長1.2 m、最大幅1.3 m、内法幅20～40cmである。

周壁溝は北半部のみで確認され、幅10～20cm、床面からの深さ5～15cmである。主柱穴は4本で、柱穴間の距離は東西方向が2.4～2.6 m、南北方向が2.0～2.2 mである。柱穴の深さは20～30cmである。

SB 05　SB 05はやや不整形の隅丸方形プランの竪穴住居で、規模は東西2.0 m以上×南北8.0 m以上で、床面までの深さは、東壁付近で20～30cmである。

SB 05の埋土上層において、焼土・炭層がSB 05の壁面に沿って約1 m間隔で検出された。焼土・炭層は、埋土下層及び床面や壁面においては認められなかった。したがって、SB 05廃絶後、竪穴が大部分埋まった段階で、焼土・炭を投棄したか或いはその面で火を焚いたかのいずれかと考えられる。

周壁溝は幅10～15cm、床面からの深さ10～20cmである。

東壁に沿って中央部の床面より一段高くなった「ベッド状遺構」が検出された。ベッド状遺構は幅0.8～1.3 m、床面からの比高差5～10cmである。

主柱穴は、第2次調査の成果を加味すると、4本柱である可能性が高い。

SB 06　SB 06は、方形の竪穴住居で、北側及び南側の大部分を撹乱により破壊されているが、復元すると規模は東西約5.4 m×南北約5.0 mで、床面までの深さは、北壁付近で10～15cmである。

周壁溝は全周していたようで、幅15～20cm、床面からの深さ10～15cmである。また、壁に沿って幅0.9～1.0 m、床面からの比高差5～10cmのベッド状遺構を検出した。

主柱穴は、2か所で確認したが、4本柱である可能性が高い。

SB 07　SB 07は、南側をSB 06に切られ、北側は調査区外にのびているため、全体の規模・平面形は不明である。

遺　物　SB 03埋土内から土師器が、SB 05・06埋土内から弥生土器・土師器が、SB 07の埋土内から弥生土器が出土している。SK 04の埋土内から弥生土器・土師器が出土しているほか、遺構面の上面及び遺物包含層内から弥生土器・土師器が出土している。

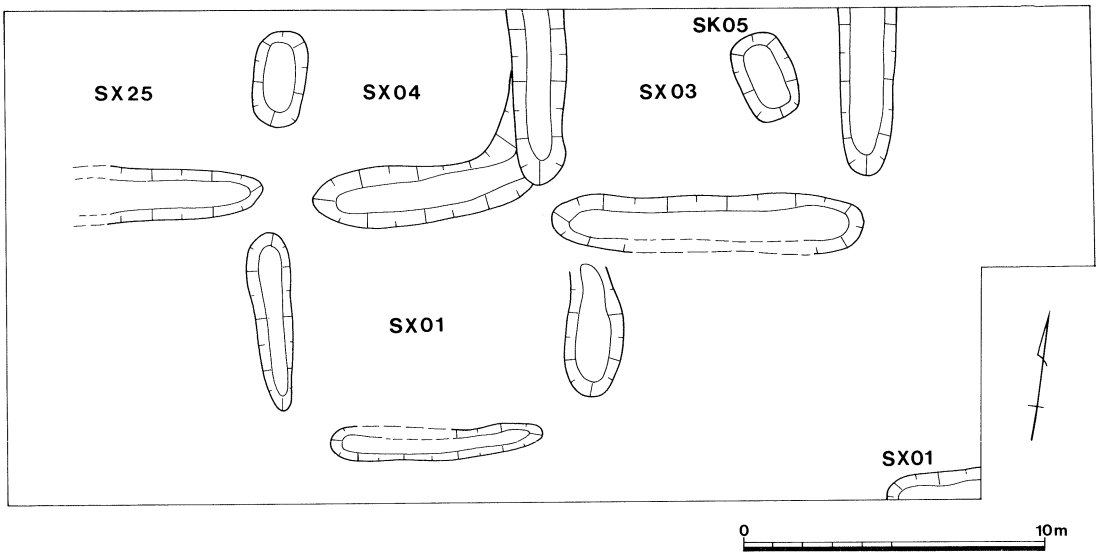


fig. 43
第4遺構面
平面図

第4遺構面　弥生時代中期の方形周溝墓2基（SX 03・04）、弥生時代中期の土坑3基（SK 05・25・SX 05）、弥生時代中期～後期の土坑8基（SK 17 ～ 24）・ピット数か所を検出した。

SX 03　SX 03は、南半部を検出したが、北側は調査区外にのびている。規模は東西 12.0 m×南北 6.6 m以上、幅 1.0 ～ 1.7 m、深さ20～40cmで、周溝はいずれも四隅で途切れている。SX 03の西側周溝の南側付近で、弥生時代中期の壺形土器が1点出土している。

SX 05　SX 05は、SX 03の主体部と考えられる土坑で、全長 2.6 m以上、幅 1.7 ～ 2.2 m、深さ50～60cmで、埋土内より弥生土器が出土している。

SX 04　SX 04は、南半部を検出したが、北側は調査区外にのびている。規模は東西 14.0 m以上×南北 7.0 m以上を測る。東側周溝は南東部で途切れずに南東側周溝へと続いている。周溝は南側で削平されているため途切れているが、本来は、途切れずに南西側周溝へと続いていたと考えられる。周溝は、幅 1.0 ～ 1.6 m、深さ20～50cmである。

SX 04の南東部隅付近の周溝内から、弥生時代中期の壺形土器が1点出土している。

SK 25　SK 25は、SX 04の主体部と考えられる土坑で、西側は後世の遺構によって削平されているが、南北 3.1 ×東西 1.7 m以上、深さ50～65cmで、埋土内より弥生時代中期の壺形土器が出土している。

遺　物　SX 05埋土内より、弥生土器が出土している。また、SK 17 ～ 24埋土内より少量の弥生土器が出土しているほか、遺構面の上面及び遺物包含層内より弥生土器・縄文土器等が出土している。

縄文時代早期　第4遺構面より下層の褐色砂質土及び淡褐色砂礫土内から、縄文時代早期の押型文土器（楕円文・山形文・撚糸文）をはじめ、サヌカイト製の石鏃・剥片等が出土したが、いずれの層位においても、遺構は確認されなかった。

3．まとめ

今回までの調査により、当地域周辺では、古くは、縄文時代早期から生活が営まれたことが判明してきた。また、当地域が弥生時代中期には墓域であったが、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭になると、居住域となっていたことが明らかになった。

その後も古代・中世から近世を通じて、現代に至るまで連綿と人々が生活を営んできたことも判明してきた。

9．五毛（ごもう）遺跡

1．はじめに　灘区五毛通１丁目付近は摩耶山麓にあり、古くから五毛村として栄えていたところで、五毛神社を中心とした町割りがいまも残されている。

当該地は周知の遺跡の範囲外にあるが確認のため、試掘調査を行ったところ、中世の遺物包含層が確認され、協議の上、調査を行うこととなった。

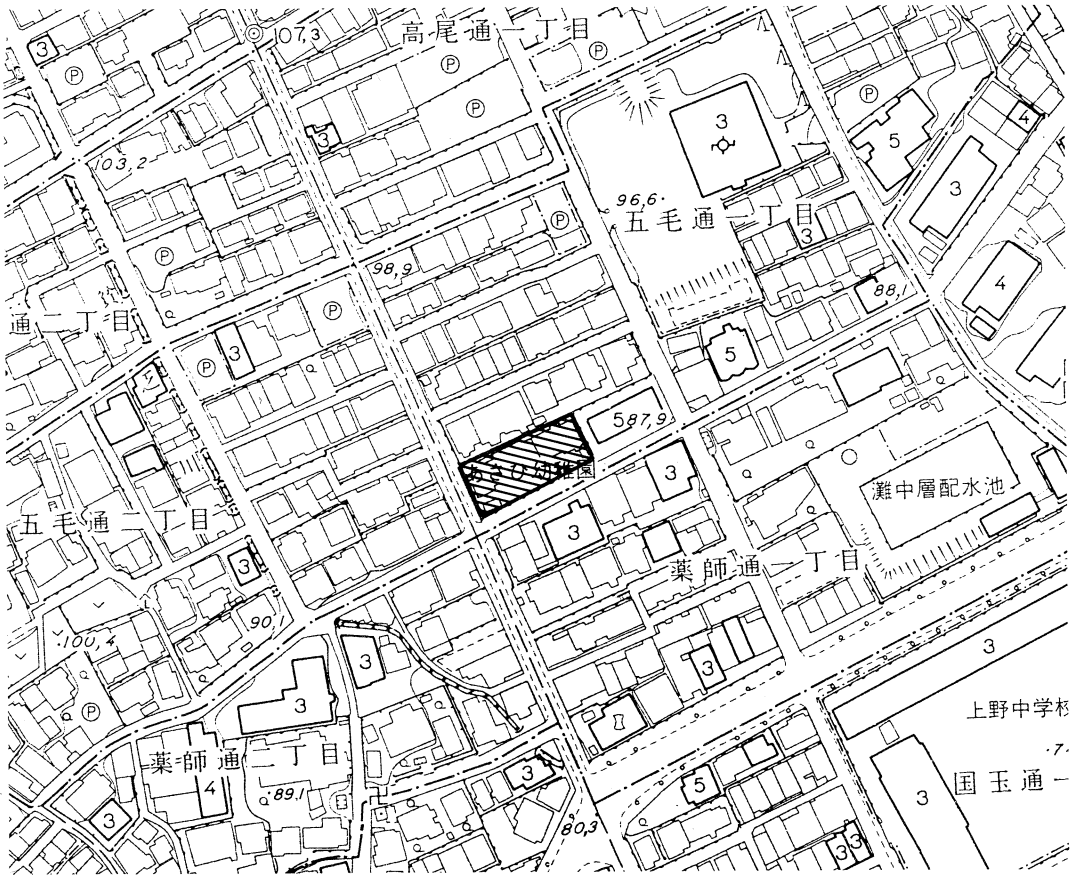


fig. 44
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　調査は２分割して実施し、東半分をＡ区、西半分をＢ区とした。

SK 01　Ａ区北東部に位置し、長径３ｍ、短径1.8ｍをはかる楕円形の土坑である。土坑内部には礫が大量に埋められていた。

SK 02　Ａ区中央部やや北よりに位置し、直径1.9ｍを測る円形の土坑である。

SK 03　Ａ区中央部やや北西よりに位置し、直径1.9ｍを測る円形の土坑である。青磁椀が出土している。

SK 05　Ｂ区中央やや北よりに位置し、直径1.9ｍを測る円形の土坑である。

石垣Ａ　石垣ＡはＢ区西南隅に位置し、東西方

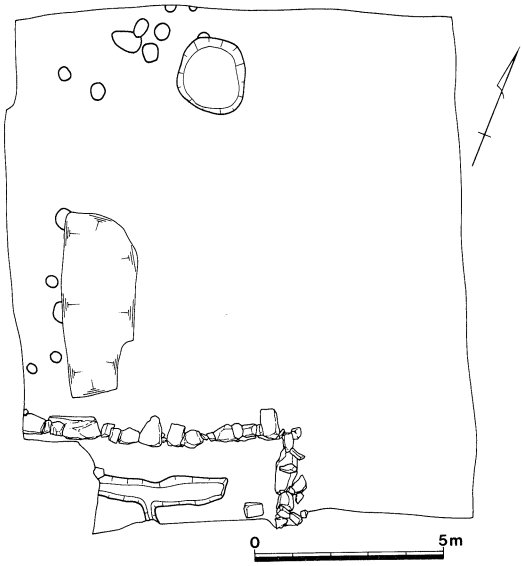


fig. 45　Ｂ区遺構平面図

向から調査区中央で南に折れる。石垣の規模は東西 6.9 m、南北 2.4 m、現残高 1.2 m を測る。

石垣B　石垣BはB区西南隅に位置し、東西方向から南に向けて曲線を描く。石垣の規模は、東西 6.9 m、残存高 1.0 m を測る。石垣には 0.5 t を超える大きな石を使用している。石垣Bは石垣Aが崩れた後、積み直されたもので、一部で石垣Aをそのまま利用しているほか、石垣Aから崩れた石材を片づけずに、崩れ落ちた状態のまま上に積みたしている。

石垣C　石垣CはB区東南隅に位置し、東西方向から調査区中央で南に折れる。石垣の規模は、東西 2.5 m、南東 2.2 m、残存高 0.6 m を測る。石垣には 1 t を超える大きな石を使用している。石垣Cは石垣Aに伴うが、石垣Aの掘形と切り合い関係にあり、石垣Aより後に築造している。

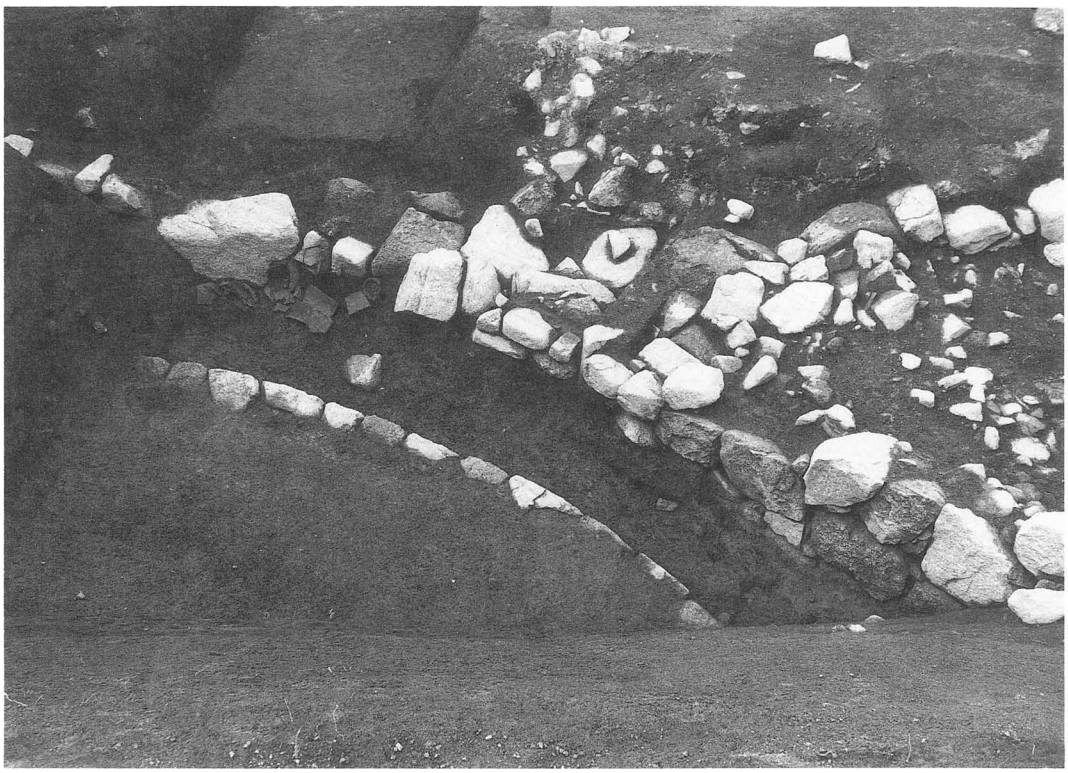


fig. 46　石垣B

SD 01　B区中央に位置し、北東から南西に走る幅 0.5 m、深さ 0.4 m を測る溝である。SX 01 と切り合い関係にあり、SX 01 に先行する。

SD 02　B区北部中央に位置し、北から南に走る幅 0.4 m、深さ 0.2 m を測る溝である。SX 03 と切り合い関係にあり、SX 03 に先行する。

SD 03　B区西南隅に位置し、東西方向から南に向けて曲線を描く。石垣Bと石列を組み合わせて側溝を形成している。溝の規模は幅 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。

SD 04　B区西南隅に位置し、東西方向に走る幅 0.7 m、深さ 0.2 m を測る溝である。SD 04 は石垣Aに伴うか、または先行するものとみられる。なお、溝内から大量に土師器皿が出土している。

SX 01　B区中央付近から、緩やかに南に落ちる落ち込みである。石垣Aが崩落ののち、石垣Cを覆う形でなされた整地部分ともみられる。したがって、石垣Bとはほぼ同時に作業がおこなわれたものとみられ、埋没年代において、石垣BがSX 01 に後出する。

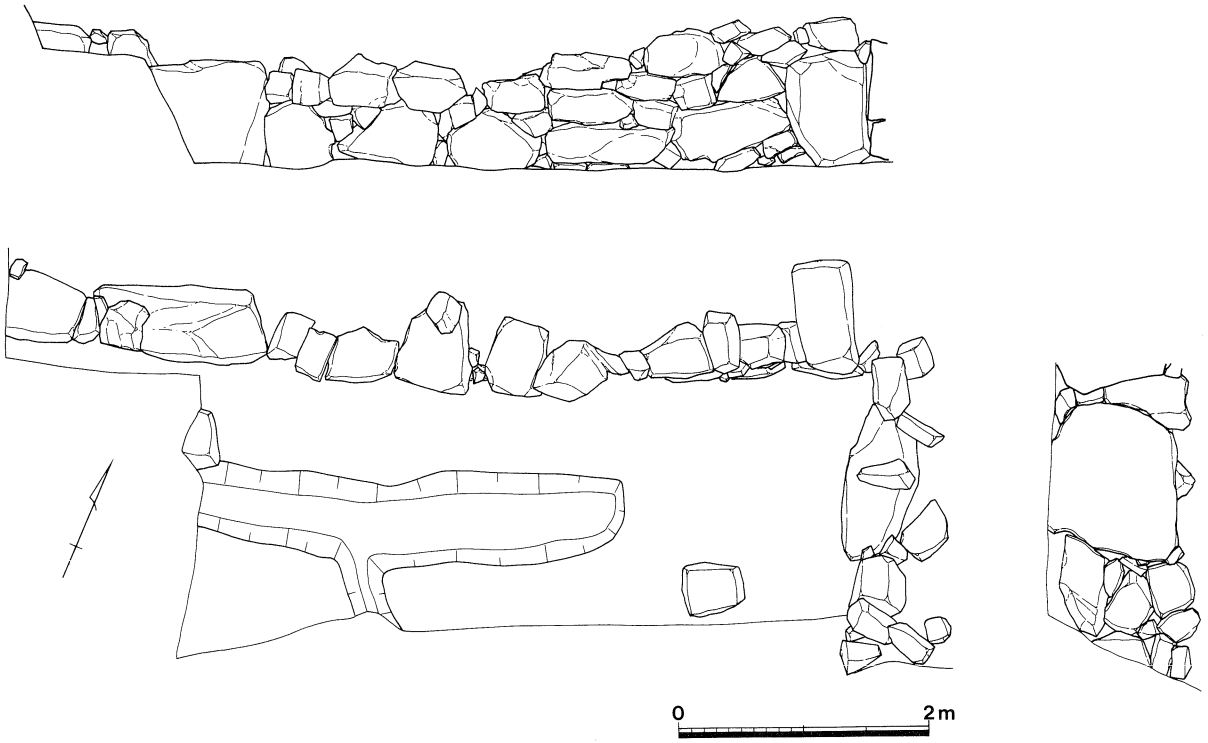


fig. 47　石垣A
平・立面図

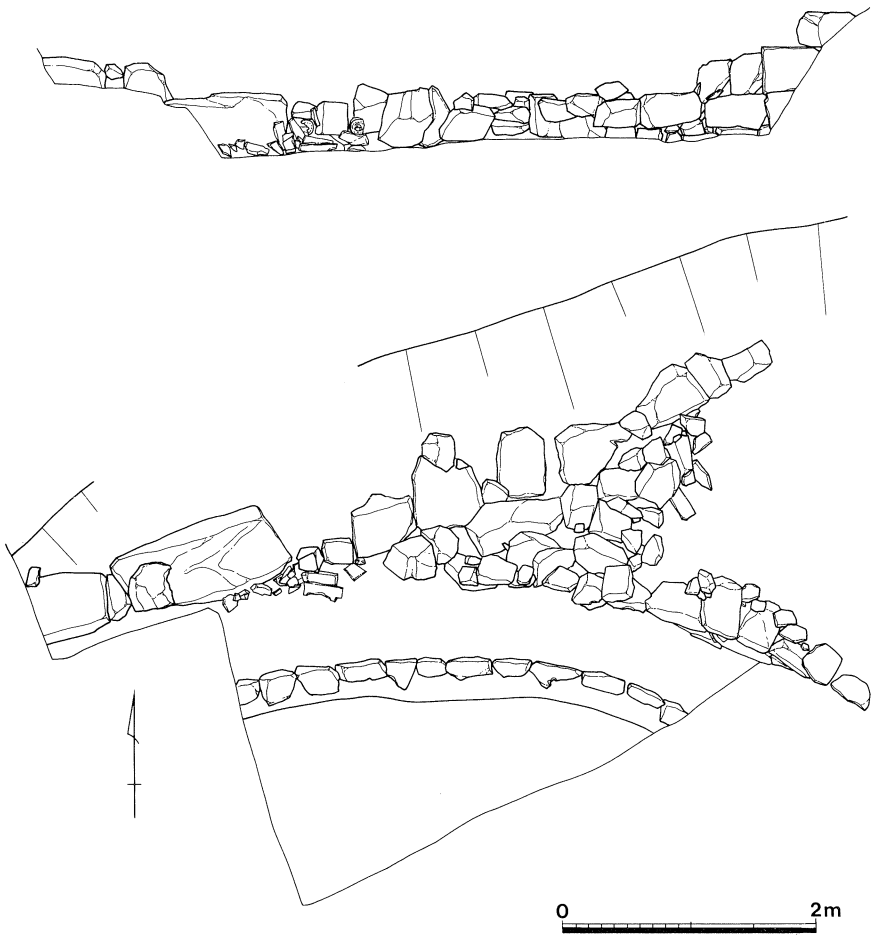


fig. 48　石垣B
平・立面図

遺　物　　出土遺物は、土師器の皿のほか、青磁・白磁椀・青花などの陶磁器・瓦器・瓦質・須恵器等の土器類や軒丸・軒平・鬼瓦・飾り瓦等の屋根瓦や、政和通寶などの貨幣、銅製金貼りの透かし彫り金具の一部などがある。このほか製鉄関連遺物として、鞴の羽口や鉄滓も出土している。ただし、製鉄関連の遺構は確認出来ていない。これらの遺物はSX 01より出土している。なお全体の出土遺物の中で青磁・白磁の占める割合が、他の遺跡に比べて高いことが指摘できる。

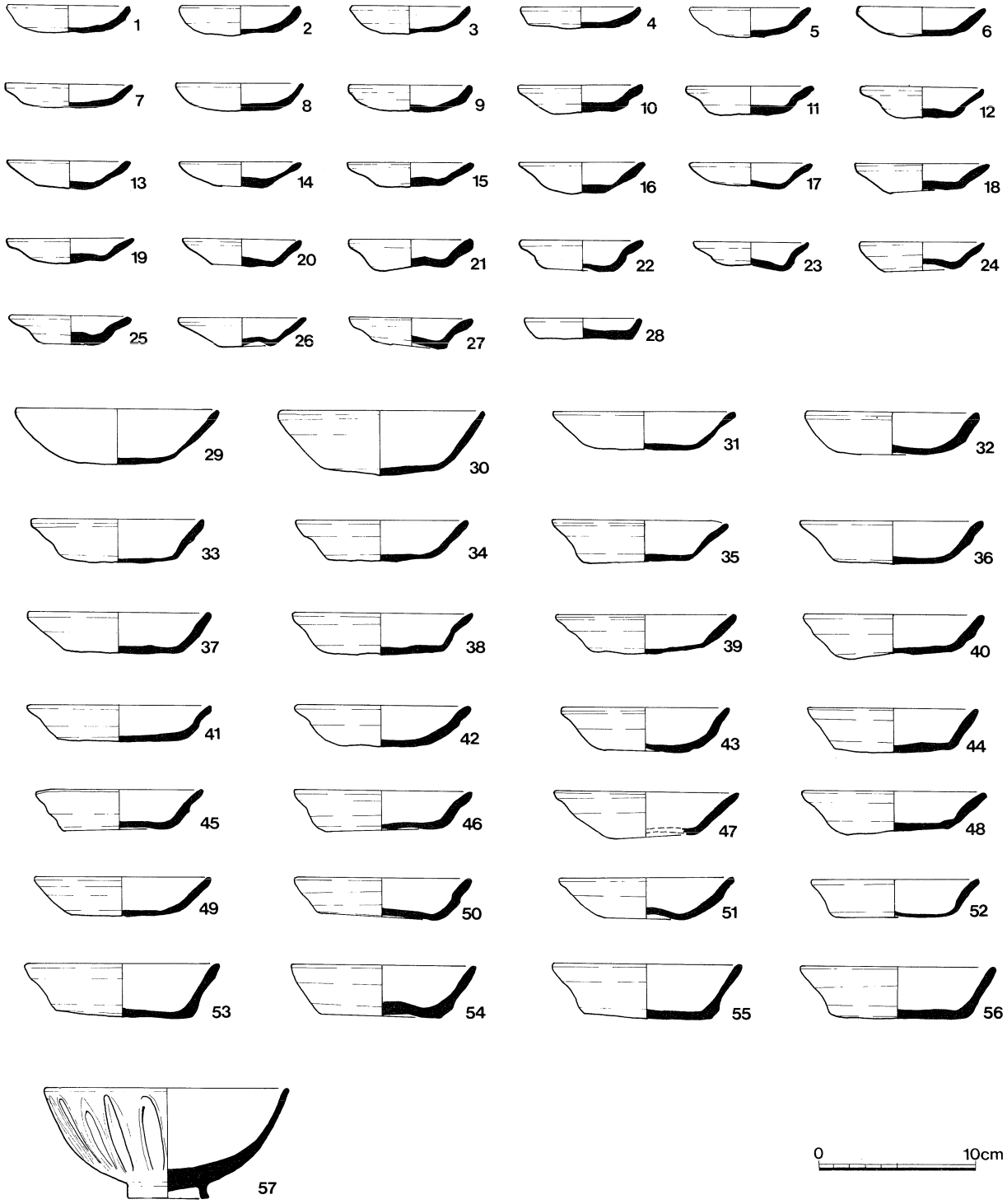


fig. 49　出土土器実測図

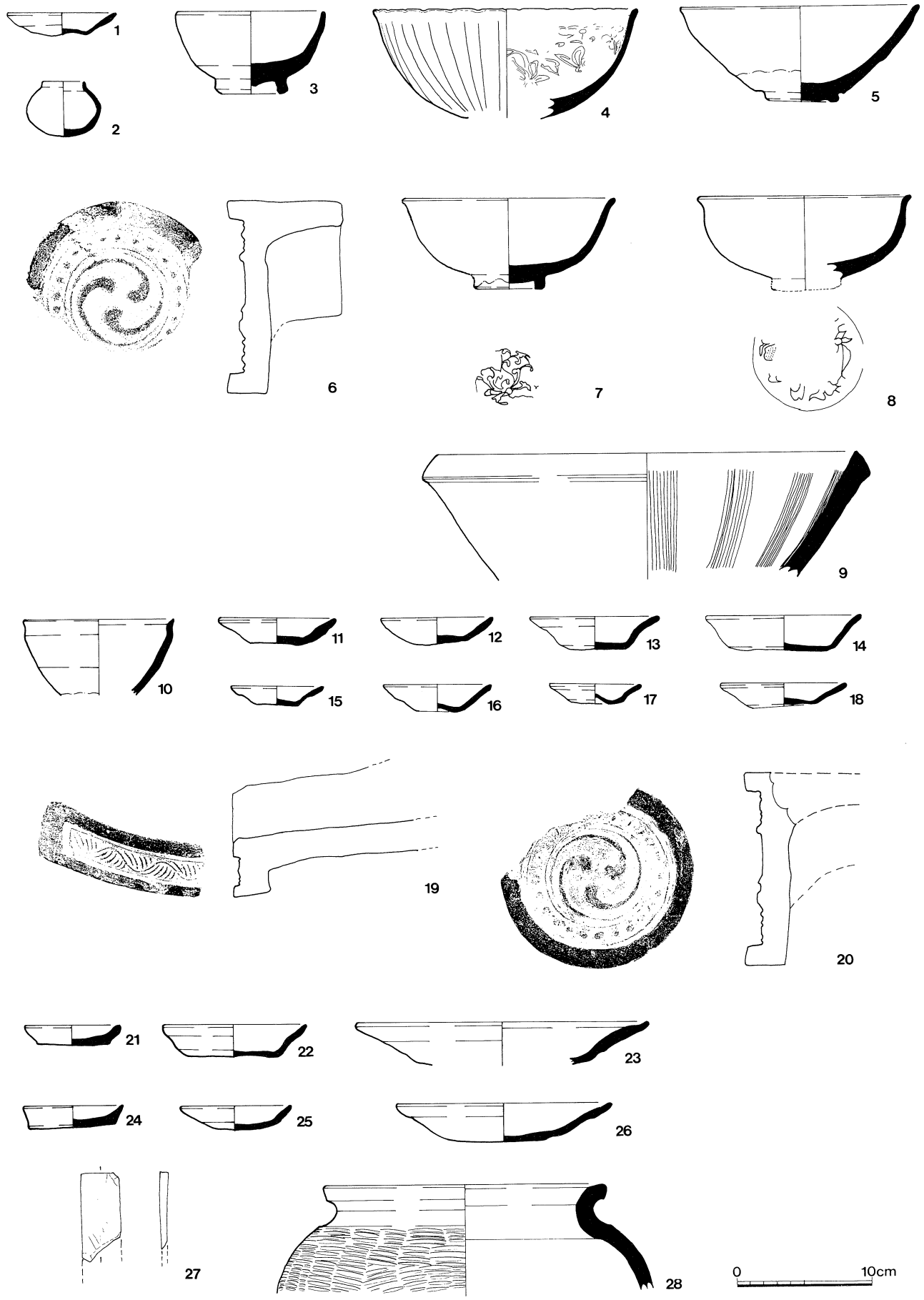


fig. 50　出土土器実測図

fig. 51　SD 02 瓦出土状況

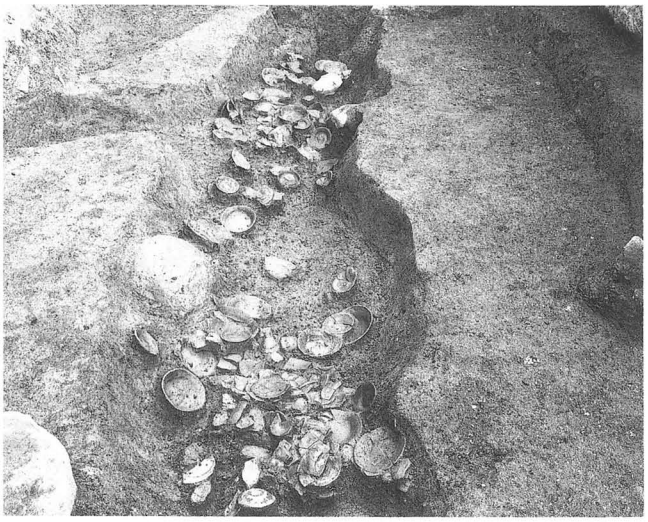


fig. 52　SD 04 土師器皿出土状況

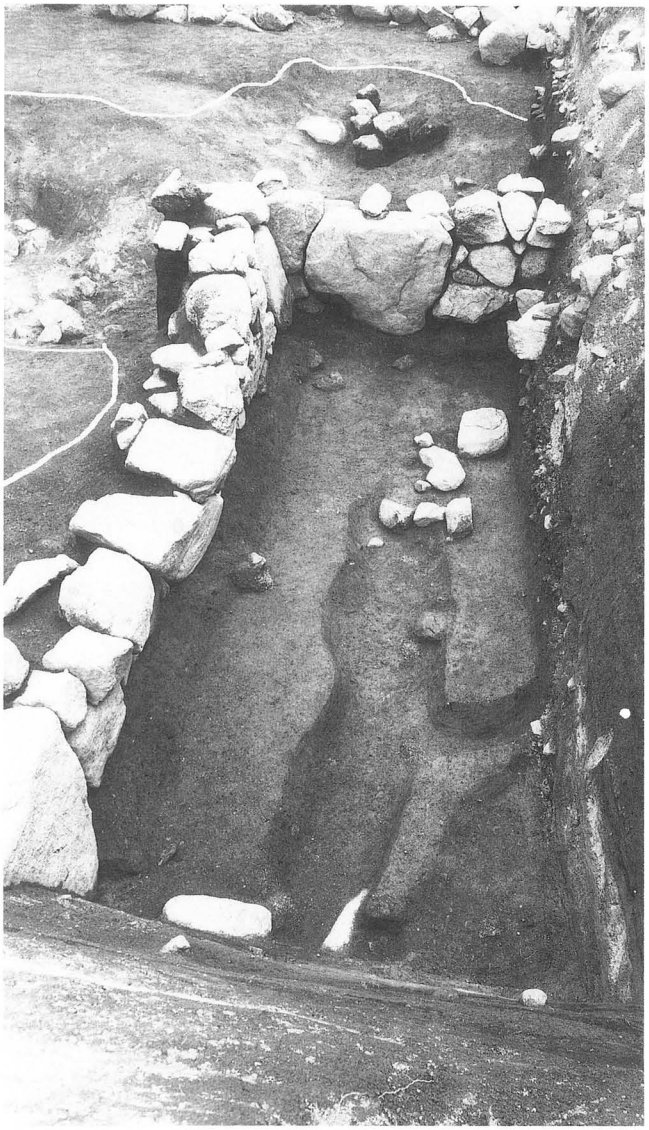


fig. 53　石垣C全景

3．まとめ

今回の調査において、石垣と共に、各種の遺構を検出した。これらを整理すると、まず、下層石垣が築かれ、そのころに円形の土坑群や、SD 04、瓦葺きの建物が建てられていたとみられる。下層石垣崩壊後、上層石垣と石垣 2 が築かれ、上層石垣に伴って、SD 03 や瓦葺きの建物が建てられていたとみられる。このうち建物に伴うと思われる瓦が、SD 03 内から出土している。この瓦は、2 次焼成を受けており、上層石垣に伴う瓦葺きの建物は、火災によって消失した可能性がある。また、出土遺物の中に相当数の焼土が含まれており、そのなかにスサを含むものがみられ、瓦葺きの建物が土塀であった可能性を窮わせる。この上層石垣崩壊後、SX 01 が廃棄土坑として築かれている。SX 01 に伴い、周辺が片づけられ、石垣 2 も埋められ、周辺は整地される。なお、下層石垣の南部分にも礎石らしきものを 2 個確認しており、何らかの建物が存在したとみられる。

下層石垣等の年代については、出土遺物等から、14世紀初頭には築造され、14世紀前半には崩壊していたと考えられる。上層石垣は、SD 03 から出土した遺物や瓦から、下層石垣が崩壊直後に、積みなおされたと考えられる。SX 01 の年代は、出土遺物から、15世紀初頭に築かれたと考えられる。

10. 楠（くすのき）・荒田町（あらたちょう）遺跡　第11次調査

1．はじめに

楠・荒田町遺跡は、昭和53年市営地下鉄の建設工事に伴う調査で初めて確認された遺跡である。これまで10次の調査を重ねてきた。そこへ今回、当該地に地下駐車場建設の計画がおこり、これをうけテスト・ピット及びトレンチを設定し試掘調査を行い、遺構・遺物の有無を調べ、遺跡の広がりを確定するよう努めた。

この試掘調査の結果、遺跡は駐車場建設予定地の西側部分約 2,300 ㎡を中心とすることが推定され、全面調査を実施することになった。

ところが、調査を行うにつれて、遺跡が南側に拡がる可能性が高まり、再度テスト・ピットを南に 2 か所、北に確認の為 1 か所設定し、調査を行った。また、東側についてもテスト・ピットとトレンチ調査を実施した。この結果、遺跡は土石流により破壊された北側を除く範囲に残存していることがわかり、最終的に調査面積は当初予定の 2 倍強の 4,800 ㎡となった。

発掘調査は残土置き場や、併行して行われた駐車場建設工事との関係からⅠ～Ⅴ区に区分して行った。

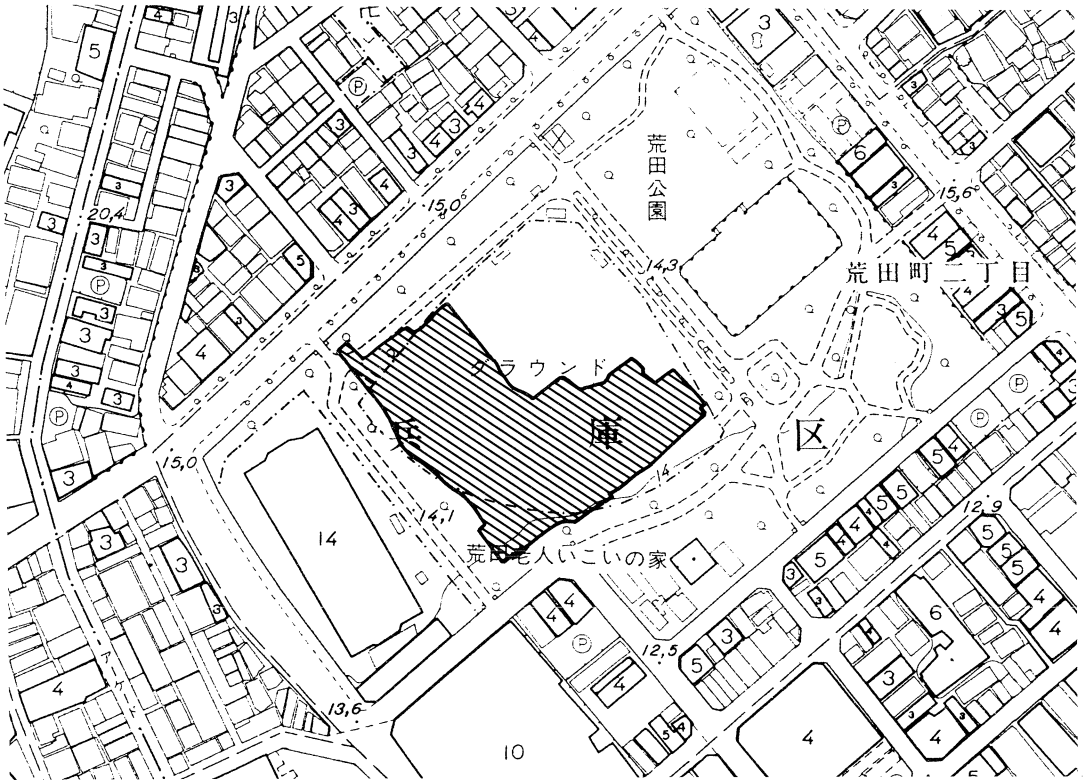


fig. 54
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要

第 1 遺構面　第 1 遺構面では北西～南東にのびる幅約60㎝、深さ約50㎝を測る溝状遺構を、ほぼ全面にわたって検出した。検出面は西側で標高約 12.6 m、東側で約12 m を測る。溝の埋土は黄褐色の洪水砂で、江戸時代後半～末ごろの遺物を含む。江戸時代後半期の耕作面と推定される。

第 2 遺構面　第 2 遺構面は標高約 12.3 ～ 11.2 m で検出された鋤による耕作痕で、幅約10～20㎝、深さ約 5 ㎝の小溝が多数検出された。これらの方向はⅤ区の東端を除きほぼ一定でN55°E

を示す。埋土からの遺物が少なく時期を明確にし難いが、室町時代頃と考えられる。

第3遺構面　第3遺構面はⅠ区南半と、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区で検出された北西～南東にのびる幅約50㎝、深さ約20㎝の溝状遺構で、3.4～4ｍ間隔で規則的に掘削されている。Ⅰ区南半からⅡ区にかけては、北西～南東方向のこれに直行するものも検出された。

時期は鎌倉時代と考えられる。溝中の埋土から多量のイネのプラント・オパールが検出され、この溝も稲作に関係する遺構と判断される。この溝の方向も第2遺構面検出のスキ痕と同じN55°Eで、なおかつ江戸時代の溝の方向とも一致する。

検出面の標高は約11.7～11.2ｍを測る。

第4遺構面　第4遺構面は標高約12.1～11.2ｍで検出された、柵によって区画された掘立柱建物群である。

SB 01　4間×2間（8.5×4.6ｍ、39.1㎡）主軸方位N32°W

SB 02　2間×2間（4.0×3.9ｍ、15.6㎡）主軸方位N38°W

SB 03　4間×4間（7.7×4.2ｍ、32.34㎡）主軸方位N39°W

SB 04　2間×1間以上（5.7×Xｍ）主軸方位N28°W

SB 05　3間×2間（10.6×6.3ｍ、66.78㎡）南北軸方位N38°W

SB 06　3間×3間（5.6×5.2ｍ、29.12㎡）主軸方位N32°W

SB 07　4間×3間（8.5×6.3ｍ、53.55㎡）主軸方位N32°W

SB 08　4間×4間（10.8×8.9ｍ、96.12㎡）主軸方位N29°W

SB 09　4間×3間（8.6×7.0ｍ、60.2㎡）主軸方位N35°W。南西隅の柱穴掘形内から、馬と思われる歯牙が出土しており、祭祀に係わるものと推定される。

SB 10　4間×2間（7.9×5.9ｍ、46.61㎡）南北軸方位N35°W

SA 01　SA 01は、SB 01～05が集中する区域の南辺と東辺を区切る柵列で、東西25.3ｍ、南北24.3ｍを測るが、北端及び西端は調査区外に延びている。東辺に間口約6ｍの門がある。

SA 02～04　ほぼ併行して東西に延びる柵列で、E35°Nを測る。遺物が少なく、時期差を明確にできないが、検出状況からみてSA 03が若干他の2条に先行するものと考えられる。

SA 05　SB 10を囲むように検出された逆L字状の柵列で、北端はさらに延びる可能性はあるが、西端はこれ以上延びない。南北22.1ｍ以上、東西19.2ｍを測る。南北方位N39°W、東西方位E39°Nである。

SK 01　径0.85ｍ、深さ0.8ｍを測る円形の土坑で、埋土の中位から板状木製品が検出された。木製品は上下2重になっており、その直上には直径50㎝、厚さ5㎝の灰色シルトがあり、円形の桶状のものが据えられていたものと推定される。

SK 02　長さ約1.7ｍ、幅約1ｍの長楕円形土坑で、深さ約1.2ｍを測る。土坑の下半は、長径0.9ｍ、短径0.7ｍの楕円形土坑で、この部分はSK 01と同構造である。

SK 03・04　長方形と不整楕円形を呈する土坑である。SK 01・02同様出土遺物が少なく、時期を明確にするには検討を要するが、平安時代～鎌倉時代に属するものと考えられる。

SK 05　長径1.9ｍ、短径0.8ｍ、深さ14㎝を測る隅円長方形の土坑で、埋土内から12世紀代の須恵器椀が出土している。

SK 06・07　直径約 2.2 ～ 2.6 m、深さ約60～70cmを測るほぼ同規模の土坑で、素掘りの井戸とおもわれる。埋土には人頭大以上の石が投棄されていた。遺物は少量ではあるが、SK 07 の坑底から平安時代以降と思われる丸瓦が 1 点出土している。

これらの掘立柱建物、柵列、土坑等は遺構の重なりからみて同時期に併存したものとは考えられない。ただ、遺構からの遺物の出土が極めて少なく、その変遷過程を確定することは現時点ではむつかしい。

しかし、これらのうち SB 02 と SA 01 の柱穴からは11世紀後半の、SB 03 からは12世紀代の、SB 09・10 からは13世紀代のものと考えられる土師器の小片が出土しており、SB 08 からは平安時代と思われる土師器の細片が出土している。

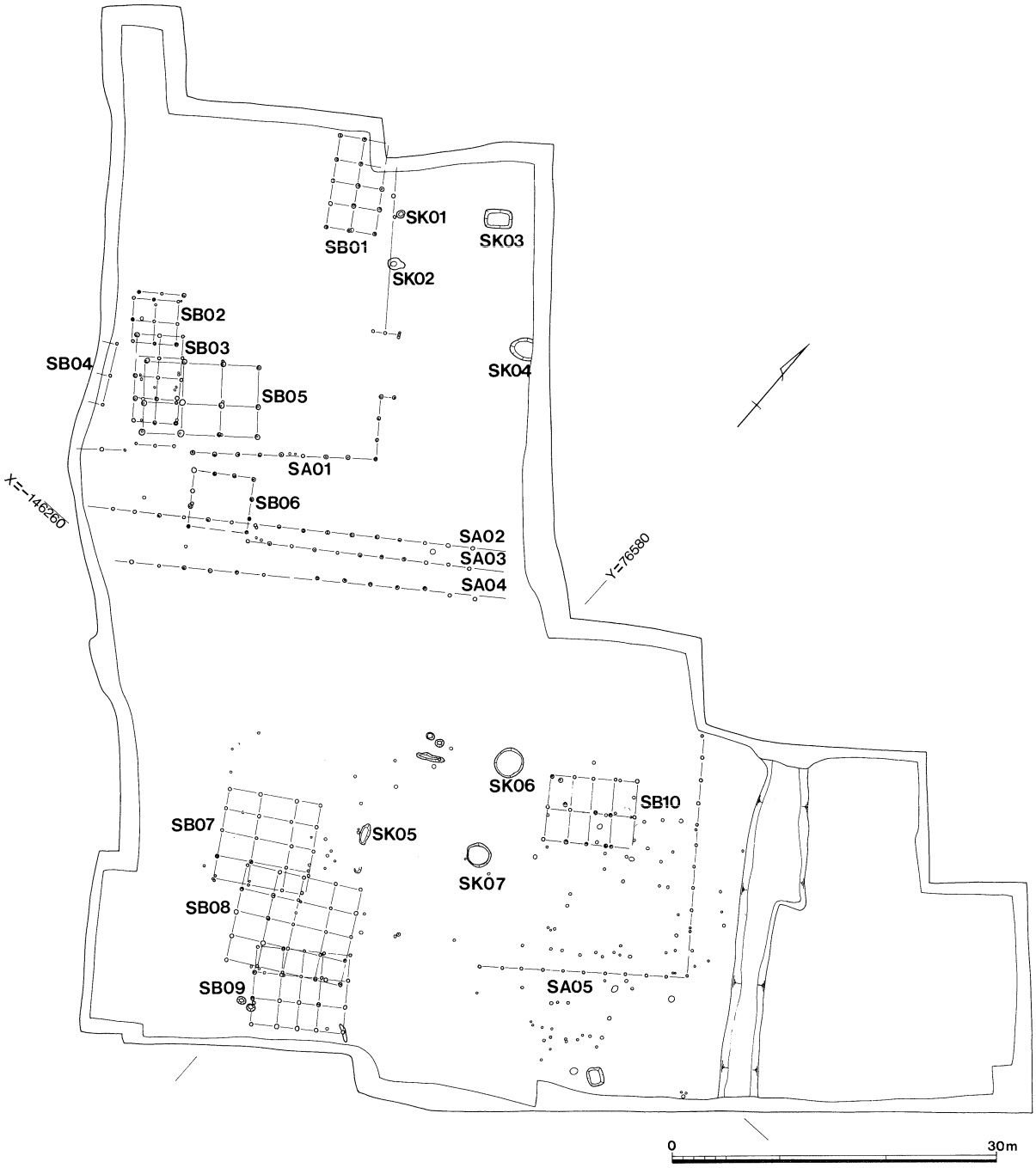


fig. 55　第 4 遺構面平面図

第5遺構面　第5遺構面は、標高約12～11mで検出された弥生時代～古墳時代の遺構面である。

古墳時代　Ⅰ・Ⅲ区SD 02からⅡ区の弧状に巡る溝SD 06の方向で、これらの埋土最上層を切って自然流路が検出された。弥生時代の土器類とともに、5世紀末～6世紀前半の遺物が出土した。

SD 07　幅約1.0～1.4m、深さ約0.4mの溝で、約40m検出した。西部の約12mは洪水により削平されており、底部が残存するのみで、その西側は消失している。東側は後世の削平で消滅している。古墳時代初頭の遺構と思われる。

弥生時代　弥生時代の遺構には、掘立柱建物、壺棺、溝、土坑等がある。掘立柱建物は計9棟復元できたが、さらに増加する可能性がある。

SB 01　2間×1間（4.1×2.5m、10.25m²）

SB 02　4間×1間（4.6×2.9m、13.34m²）

SB 03　4間×2間（5.1×3.9m、19.89m²）

SB 04　4間×3間（4.6×3.5m、16.1m²）

SB 05　2間×2間（4.4×3.5m、15.4m²）

SB 06　3間×1間（5.6×3.3m、18.48m²）

SB 07　2間×2間（3.8×2.9m、11.02m²）

SB 08　2間×2間（2.9×2.9m、8.41m²）

SB 09　8間×2間（8.5×3.8m、32.3m²）

この内、SB 05は総柱建物で、SB 07もその可能性がある。SB 09は北西～南東方向の長大な建物で、棟持ち柱を持つものと考えられる。SB 05・06も棟持ち柱を持つ可能性がある。

ST 01　ST 01は02と共に掘立柱建物群が集中する区域から、若干離れた所で検出された壺棺で、長径約60cm、短径約50cm、現存深さ約20cmの墓壙内に口を南西に向けた壺を安置する。口と底部は土器片で覆っている。

ST 02　ST 01の東に近接して出土した甕棺である。長径約55cm、短径約45cm、現存深さ約25cmの墓壙内に口を南西に向けた甕を据え置くもので、壺の大きな破片で口から底部まで覆っていたものと考えられるが、上部は後世の削平で消失している。

SD 01　幅約60cm、深さ約15cmの溝で、約30m検出した。弥生時代中期後半の遺物包含層上面から切り込まれており、弥生時代後期に下る可能性があるが、出土遺物が少量のため明確でない。

SD 02　幅約7m、長さ約45mを測るもので、検出部分では、その中央部が低くなっており、南東部は浅くなって消滅する。この付近は弥生時代以前から既に溝状の窪地になっていたものと推定される。弥生時代中期後半の土器が多量に出土した。

SD 03　幅約0.6m、深さ約0.5mを測るものでSD 02とSD 04を結ぶように掘削されている。

SD 04　幅約1.5～3m、深さ約0.3～1mの東から西に流れる溝状遺構である。東端部分は幅・深さとも縮小の傾向が見られ、この東側で収束するものと考えられる。埋土中から弥生土器、石器、炭等が出土した。

SD 05　SD 04とほぼ同じ位置で、これに切られた状態で検出された溝状遺構で、幅約2m、深

さ約 0.7 mを測る。

SD 06　Ⅱ区北半で検出した幅約 1.5 m、深さ約20cmの弧状を呈する溝状遺構である。東側は古墳時代の流路に削平され、残存状態が良好ではない。弥生時代後期～終末期の土器が少量出土した。

SK 01　SD 02 の西側で検出された土坑で、長さ約 2.5 m、幅約 1.2 m、深さ約 0.4 mを測る。深さ約 5 cmの小溝で SD 02 とつながる。

SK 02　SK 02 も SK 01 とほぼ同規模の土坑で、SK 01・02 ともに湧水層まで掘削されており、SD 02 に流入するようになっていたものと考えられる。

fig. 56　第 5 遺構面弥生時代掘立柱建物平面図

自然河道　Ⅴ区東半部分で検出されたもので、幅約５ｍ、深さ約１ｍを測り、途中２条に別れて南流する。埋土下層からは弥生土器と若干の縄文土器が出土しており、弥生時代の河道と判断した。土器類と共に、木の葉、ドングリ等が検出されている。

弥生時代の遺構は、SD 04・05 を境にして大きく二分される。北半部分は、掘立柱建物・壺棺・土器を多量に含む溝等があり、また遺物包含層も厚く堆積していた。一方南半部分は、SD 06 と SD 07 の交差付近でピットが約70か所検出されたが、建物としてまとまるものはなく、また、Ⅱ区の南隅部にも弥生土器の細片と炭を含む土坑群があったのみで、遺物包含層も薄く拡がるのみであった。

これから見て、SD 04・05 が集落の南端を限る役割を果たしていたものと考えられる。

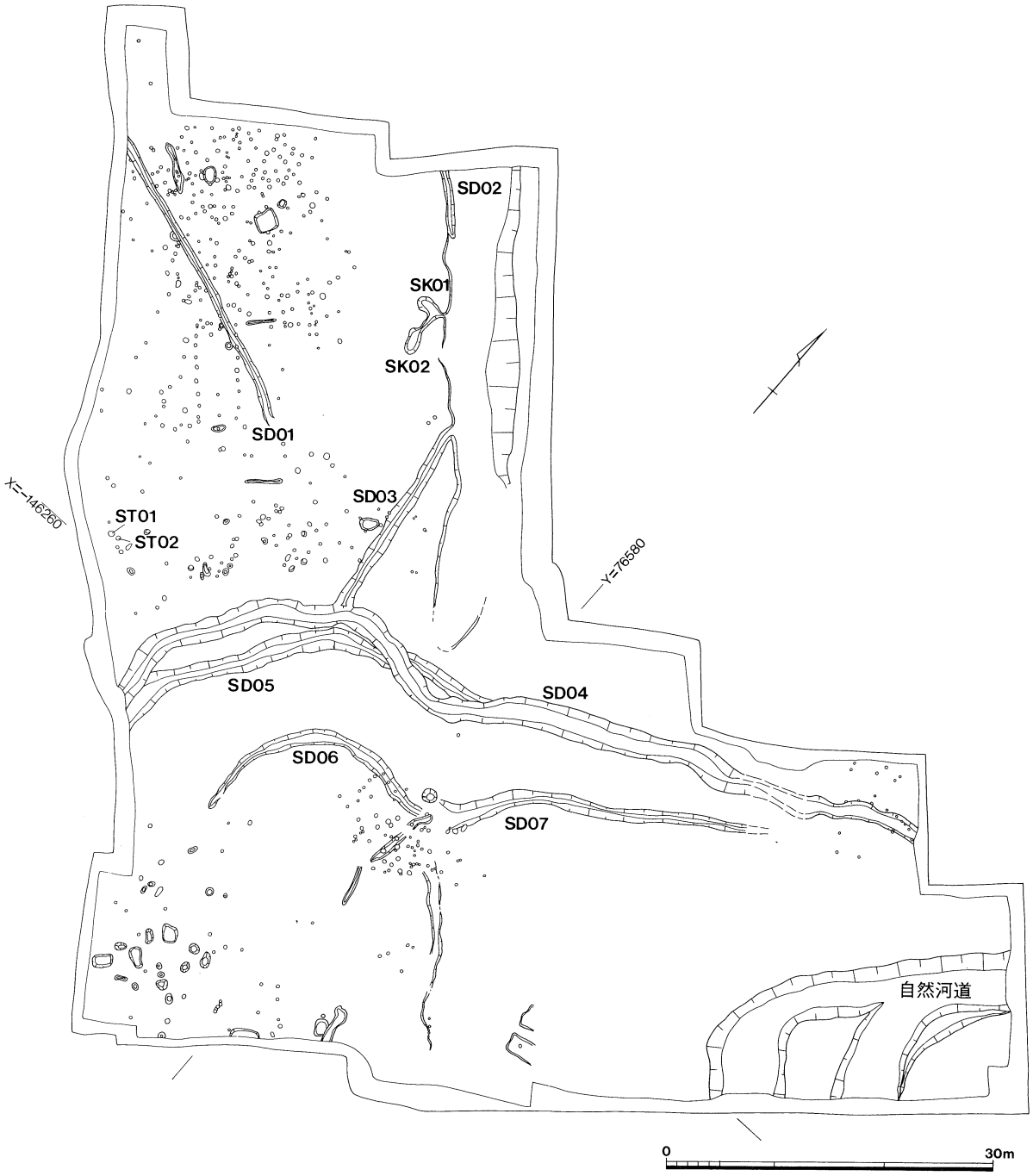


fig. 57　第６遺構面平面図

弥生時代の集落の広がりについては、SD 02 の多量の土器のほとんどが東側から流入していることから、当地の北東部に土石流によって破壊される以前に集落が立地していたことが推定される。

弥生時代の遺構の時期については、遺物の整理が完了していないので断定できないが、ほとんどが中期後半、畿内第Ⅲ様式（新）段階を中心とする時期と思われる。ただSD 04・05 からは畿内第Ⅳ様式と考えられる土器が出土しており、集落が廃棄されたのはこの頃と推定される。

第 6 遺構面　Ⅰ区～Ⅲ区にA～Mの計13本のトレンチを設定し調査を実施した。その内Dトレンチで縄文土器片が集中して出土する部分があり、そこを中心にして約 260 ㎡を面的に拡げ発掘調査を行った。またⅤ区は全面にわたって縄文時代の遺構面の調査を行った。

縄文時代には、当地は指状に礫層が北側から拡がり、凹地にシルト層が堆積する状況であったと考えられる。

土　坑　Dトレンチ南側、標高 11.804 mで検出した長径約80㎝、短径約60㎝、深さ約12㎝の土坑である。後期前半の土器片が出土した。

Dトレンチ　Dトレンチの西半区で後期と考えられる土器片がほぼ一個体分出土した。それらは長径

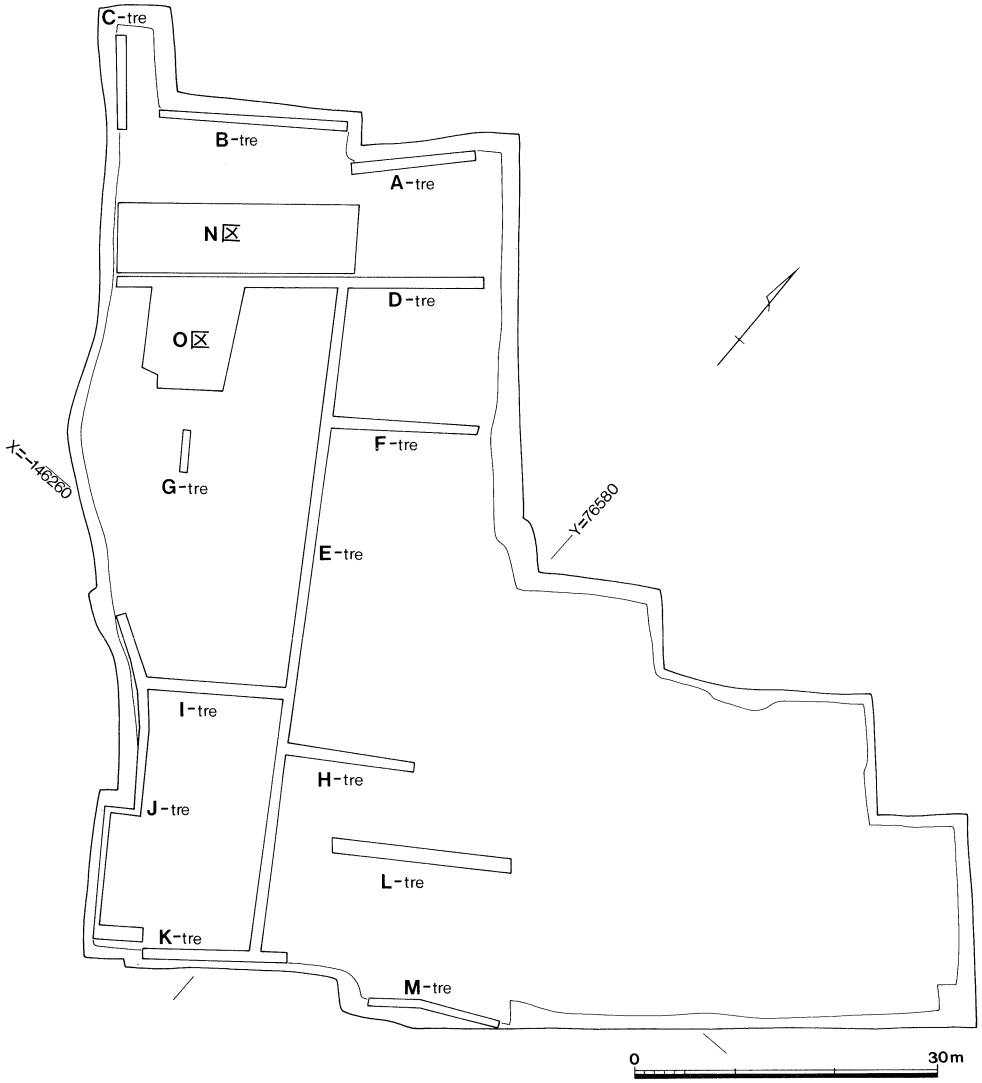


fig. 58
第 6 遺構面トレンチ
配置図

約 1.5 m、短径約 0.7 mの範囲にあり、標高 11.77 mから 11.45 mの間で検出された。

N・O区　Dトレンチで後期の土器片がまとまって検出されたため、北側と南側を拡張した。N区では縄文土器片がDトレンチ土器片とほぼ同じレベルで点々と出土したが、O区では極く少量の遺物が出土したのみである。これらはすべてシルト層内からのものである。

Eトレンチ　Eトレンチの中央部で、土坑様の落ち込みが検出され、その上面から凹み石が1点出土したが、明確な遺構として把握出来なかった。

V　区　V区の基本層序は、T.P. 11.8 m付近に無遺物の土石流層があり、その上に厚さ約20㎝の褐色砂礫層が堆積していた。この褐色砂礫層は縄文時代中期～後期の遺物を含む。後述の貯蔵穴はこの層の上面から切り込まれている。V区で検出された縄文時代の遺構は後期以降に属する4基の貯蔵穴（SK 07 ～ 10）のみで、住居址等は検出されなかった。

SK 07　長径約 1.3 m、短径約 1 m、深さ約 0.6 mの楕円形土坑である。最下部にアベマキ果実182 点が残存していた。果実包含層上面に黒色磨研の浅鉢があり、それを覆う土層からは小石・木の枝等が出土した。

SK 08　直径約 1.2 m、深さ約20㎝の円形土坑で最下層からイチイガシ果実37点、アカガシ果実537 点、トチノキ果皮1点等が出土した。

SK 09　直径約 2 m、深さ約 0.7 mの円形土坑で、最下層からイチイガシ果実32点、アカガシ果実 298 点が出土した。

SK 10　直径約 0.8 m、深さ約30㎝の円形土坑である。この土坑から果実等は検出されなかった。

遺　物　今回の調査で出土した土器・石器等の遺物量は非常に多く、28 ℓ コンテナで 230 箱以上となる。

縄文時代　縄文土器には、中津式、北白川上層式、元住吉山式、滋賀里Ⅳ式、船橋式、長原式や中期に属すると考えられるものがあるが、量的には北白川上層式のものが多いと思われる。

弥生時代　SD 02 の遺物量は今回の発掘調査で出土した土器総量の過半を占めており、今年度の作業でもそのすべてを整理することは困難であった。時期的には、畿内第Ⅲ様式新段階に相当する。

甕形土器はその大きさによって、小型、中型、大型に分類される。口縁端部は上方に拡張されるものが大半を占める。極く少量内面下半にヘラケズリを施すものが見られる。

fig － 5 は絵画のある長頸壺である。ヘラ描きの鹿が体部上半に1頭右向きに書かれており、頭部も胴部右上にその一部が残存していた。ただ後足は通常見られるものだが、前足の位置に一本のやや太い沈線と、細い沈線による格子文があり何を表現するのか解釈は困難である。また、体部の下半外面には煤が付着しており、煮沸に使用されたことが知られる。fig － 3 は紀伊地方で多く見られる壺である。

動物形土製品　特殊な遺物として動物形土製品が出土した（fig － 8 ）。これは中空の鳥形を呈するもので長さ 5.9 ㎝、幅 3.3 ㎝、高さ 3.8 ㎝を測る。口の周りにヘラによる櫛歯文を施し、その外側に沈線を巡らす。頭頂部には、刺突列点文とそれをつなぐヘラ沈線がみられる。左面の口の周りにはなにも見られないが、溝内でこの面が上になっていたことを思えば、磨滅した可能性が考えられる。文様部分の一部には、赤色顔料とみられるものが認められるが明確ではない。また、これが「鳥」を表現するのかも現在断定出来ない。

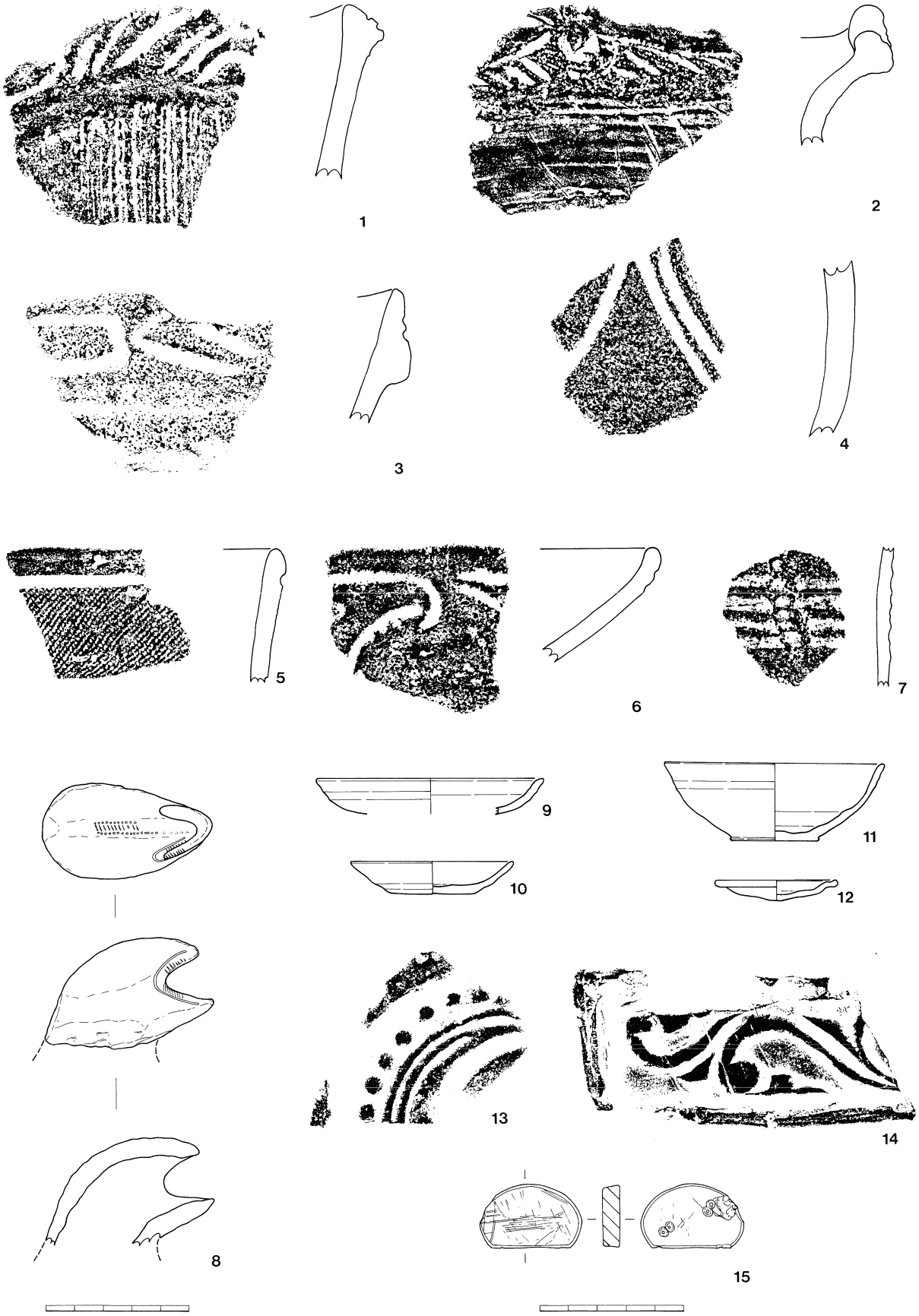


fig. 59　出土土器実測図（1～7：Ⅴ区出土縄文土器　8：第5遺構面 SD 02 出土動物形土製品　9：第4遺構面 SB 03 出土土師器　10：同、SB 08 出土須恵器　11：同、SK 05 出土須恵器　12：同、SA 01 出土土師器　13. 14：Ⅴ区出土瓦　15：Ⅴ区出土石帯）

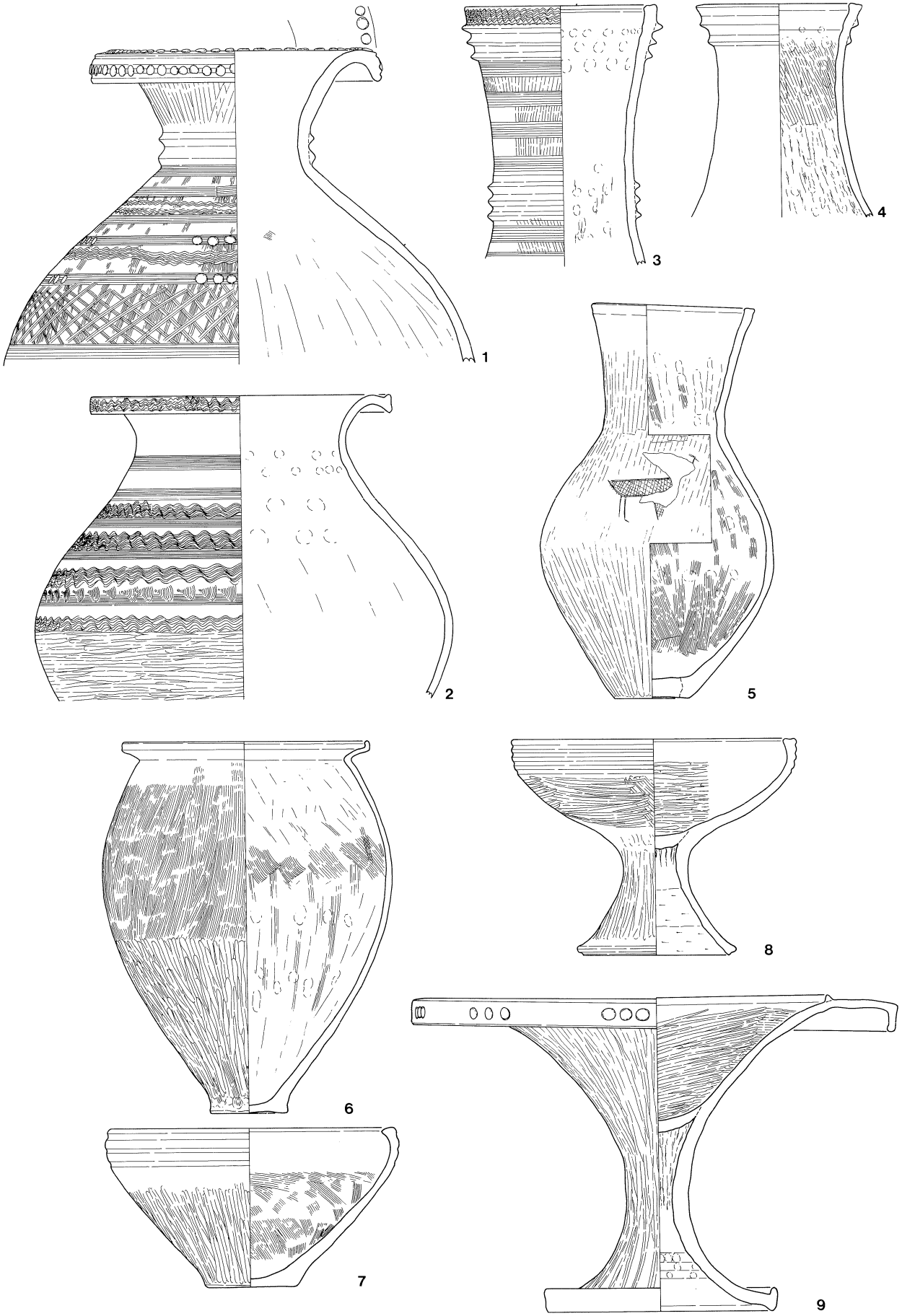


fig. 60　第5遺構面 SD 02 出土土器実測図

軟玉小玉　Ⅰ区の遺物包含層から、緑色の軟玉小玉が1点出土している。

平安時代石帯　Ⅴ区東辺部の近世耕土中から出土した。黒色を呈する丸鞆で、長さ3.6㎝、幅2.2㎝、厚さ0.6㎝を測る。

自然科学的分析

植物・昆虫分析　鎌倉時代の溝状遺構（第3遺構面）、弥生時代中期の溝や自然流路（SD 02・Ⅴ区河道1）、縄文時代の貯蔵穴や各時代のベース土採取の土壌サンプルや木器等に関してプラント・オパール、花粉化石、大型植物遺体、樹種、昆虫の分析・鑑定を行った。

縄文・弥生時代のプラント・オパール、花粉化石分析の結果では、当時の自然環境が開けた草地的景観を呈しており、温暖・湿潤な気候であったことが知られた。縄文・弥生時代の甲虫も草地に生息する種類であり、上記の景観復元を補強するものとなっている。縄文時代の貯蔵穴SK 07から検出されたアベマキ果実は特異なものである。アベマキの属するコナラ亜属の今回検出された花粉化石量は、非常に少なく周辺からアベマキ果実を採集することは決して容易ではなかったと考えられるからである。これは、当地の縄文人達の食糧獲得行動の復元に重要な資料を提示するものと考えられる。またアベマキはトチノキやナラ類と同様にアク抜きに東日本で成立したといわれる加熱・灰汁添加などのやや高度の技術が必要とされる事も注意される。

石器肉眼分析　主に弥生時代中期の石器・自然礫について肉眼により礫種を鑑定し、さらに他集落出土の石器との比較検討を行った。

石斧では閃緑岩の比率が大きく（14例中7例）、石庖丁では閃緑岩の使用は皆無である。これは石斧が比重3.0前後の重い石材を選択する傾向があることと、石庖丁が板状に剥離する石材を使用することが反映しているものと考えられる。

石庖丁では粘板岩・緑色片岩の比率が大きく（37例中各8例・6例）次いで砂岩（3例）、頁岩（2例）となる。粘板岩・緑色片岩の比率が大きいことは、六甲山系南側の集落出土石庖丁の傾向と一致している。

砂岩製の石庖丁は、播磨の明石川流域でその製作地が知られている。楠・荒田町遺跡で形態から播磨系と考えられる土器が出土している事を思えば、砂岩製の石庖丁も明石川流域から搬入された可能性も出てこよう。

石庖丁の石材としては、このほか六甲山系北部に広がる有馬層群中に産出する凝灰岩、砂岩、頁岩が互層となるものが検出されている。この特徴的な石材を使用し、石庖丁を製作していた集落址として北区塩田遺跡が現在までに知られている。楠・荒田町遺跡出土遺物中に塩田遺跡との関係を示唆する積極的資料は他に見られないが、この種の石庖丁の供給源として塩田遺跡を想定することは、この特徴的な石材から決して根拠のないことでは無かろう。

砂岩製や、塩田遺跡製と推定される石庖丁は六甲山系南側地域と明石川流域・六甲山系北側地域との交流を解明する上での貴重な資料となる。

さらに、緑色片岩製の石斧・石庖丁は六甲山系南側地域、明石川流域のみならず六甲山系北側地域（三田市）まで分布している。緑色片岩は和歌山県、徳島県等を東西に貫く中央構造線に産するもので、六甲山系南側地域、明石川流域に見られる紀伊系の土器との関係が強く示唆されるものである。

3．まとめ

縄文時代

明確な遺構は土坑と貯蔵穴のみであったが、中期から晩期にかけ断続的ではあるが、ここに生活の１つの拠点が置かれた可能性が認められたことは重要で、周辺に位置する縄文時代の集落との関係もより具体的に考えられるようになった。

Ｖ区で検出された縄文時代の４基の貯蔵穴のなかで特にSK 07は残存状況が良好で、食料保存方法を知る上で重要な事例となる。これら貯蔵穴は地下水位の高い場所にあり、またそれによって大型植物遺体が現在まで保存されたのだが、この様な場所の選定がなにによるのかが今後の課題となろう。ドングリ類を食すにあたってはアク抜き処理が必要となりその一方法として水漬けが行われるが、SK 07出土のアベマキは水漬けのみでは処理できないことを考えれば、貯蔵穴選地理由を他に求めねばならない。この問題に関してはさらに検討が必要と思われる。

弥生時代

当遺跡の中心となる時期で、多くの遺構・遺物が検出された。遺構では大型の棟持柱を持つ掘立柱建物や壺棺、集落を限る溝など、当時の集落景観や社会を復元するための貴重な資料が得られた意義は大きい。また、当地の西には同時期の高地性集落の東山遺跡があり、高地性集落という特殊なムラを生んだ母集落として、当遺跡を位置づけることが出来るようになったことも、意義深いものがある。

遺物では、播磨や紀伊との関係を示す土器や石器があり、これらの地域との交流を知る上で、重要なものである。また動物形土製品や、軟玉小玉、絵画土器等特殊な遺物があったことは、大型の掘立柱建物の存在を思えば、当地域でこの集落を営んだ集団が占めた社会的地位の高さを推定せしめるものがある。

平安時代～鎌倉時代

この時期の遺構も多く確認された。特に、11世紀～12世紀にかけて営まれた掘立柱建物群は、柵で囲まれた構造を持つ。全体の一部しか検出されていないが、当地の有力者の居館と考えることも出来る。

13世紀代の掘立柱建物は調査区の南半に立地する。SB 09・10とSA 02～04の方位はほぼ一致しており、この時期についても柵列で区画された建物群があったことが考えられるようになった。

また、SA 02～04は腐食した柱の根元を抜き取った後に、礎石を据え補修を施したものが多く、長期にわたる使用が推定される。

遺物では、平安時代の下級官僚の存在を示す石帯が、後代の耕作土からではあるが検出された。また、平安時代～鎌倉時代の瓦がⅡ区の土坑やＶ区の河道内、遺物包含層から少量ではあるが出土した。これらは、柵で区画された建物を持ち得た階層を推測する上で大きな意味を持つものと考えられる。

鎌倉時代～江戸時代

掘立柱建物群が廃絶した後ここは耕作地になるが、平安時代から鎌倉時代に至るまで居住地として機能していた当地が鎌倉ないし室町時代以降耕作地に転化されることは、当時のムラの在り方に何らかの変化が生じた結果とも考えられ、中世社会の解明に貴重な資料を提示するものと思われる。

また、鎌倉時代以来江戸時代を通じて、耕作作業の方向がほぼ一定であり、これが示すN55°Ｅの方位は、周辺の土地がこの方位を基準として区画されていたことを推定させるものである。

11. 楠（くすのき）・荒田町（あらたちょう）遺跡　第12次調査

1．はじめに　楠・荒田町遺跡は、旧湊川によって形成された中位段丘上に位置する遺跡である。弥生時代には西摂平野西端の拠点集落であることが知られている。

現在までの調査結果では、縄文時代後期（宮滝式）の土器を伴う土坑の他、弥生時代前期末～中期初頭の貯蔵穴や、第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式の方形周溝墓と木棺墓で構成される墓域の存在も確認されている。

今回の調査は、マンション建築に伴い実施したもので、調査地は第２次調査で確認された貯蔵穴群から東へ約30ｍに位置する。

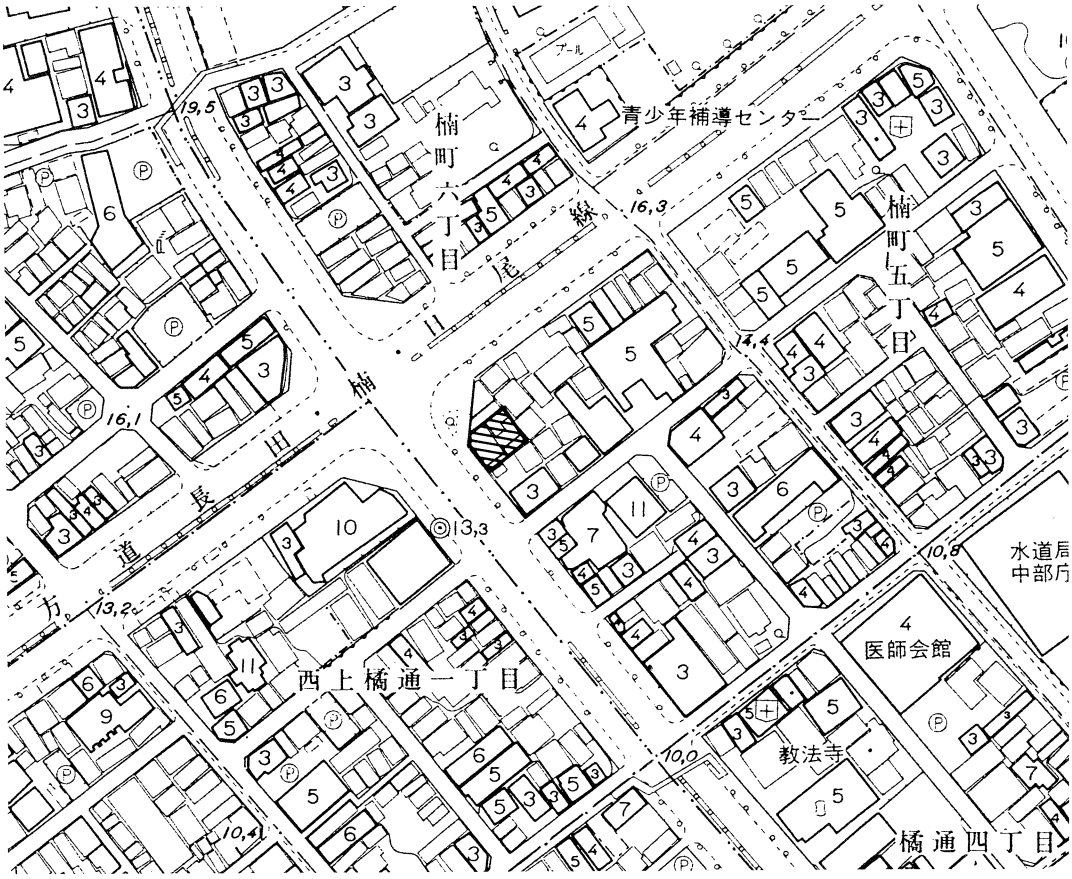


fig. 61
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　調査地域内の西側約 160 ㎡は削平を受け、遺構は遺存していないことが確認された。そのため遺構面の存在する東側約40㎡について調査を実施した。

盛土、遺物包含層の攪乱された２次堆積層の下層から、部分的に前期～第Ⅲ様式古段階の遺物を含む淡黒褐色細砂の遺物包含層が確認され、地表面下約30㎝で遺構面が検出された。遺構面は攪乱による削平を著しく受けているが、第Ⅲ様式古段階の方形周溝墓を確認した。

方形周溝墓　主体部等はすべて削平をうけて消滅していたが、北東角のコーナー部分を含む周溝の一部を確認した。しかし、方形周溝墓の確実な規模や構造については不明である。北東角のコーナー部分を観察する限りでは、他の方形周溝墓と周溝の共有関係は確認できない。

周溝は幅約 150 ㎝、深さ約40㎝で、東西方向に12ｍ、南北方向は４ｍまで確認した。埋

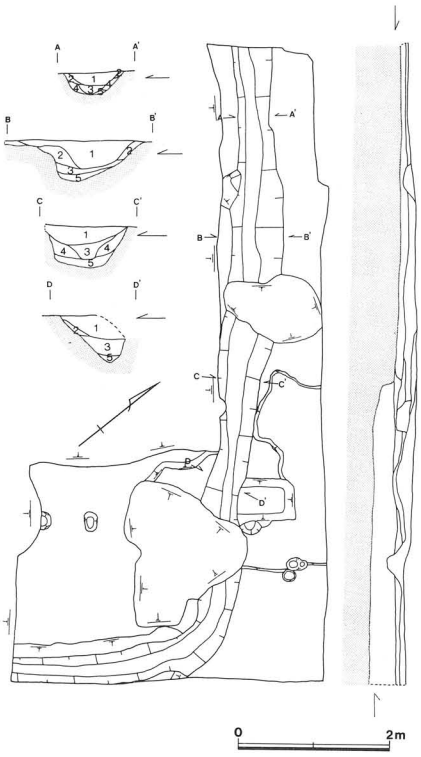


fig. 62　周溝平・断面図

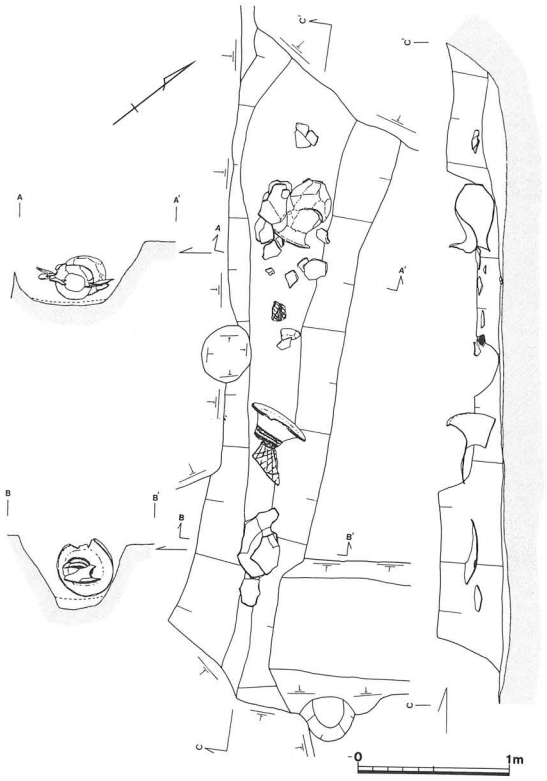


fig. 63　周溝内土器出土状況

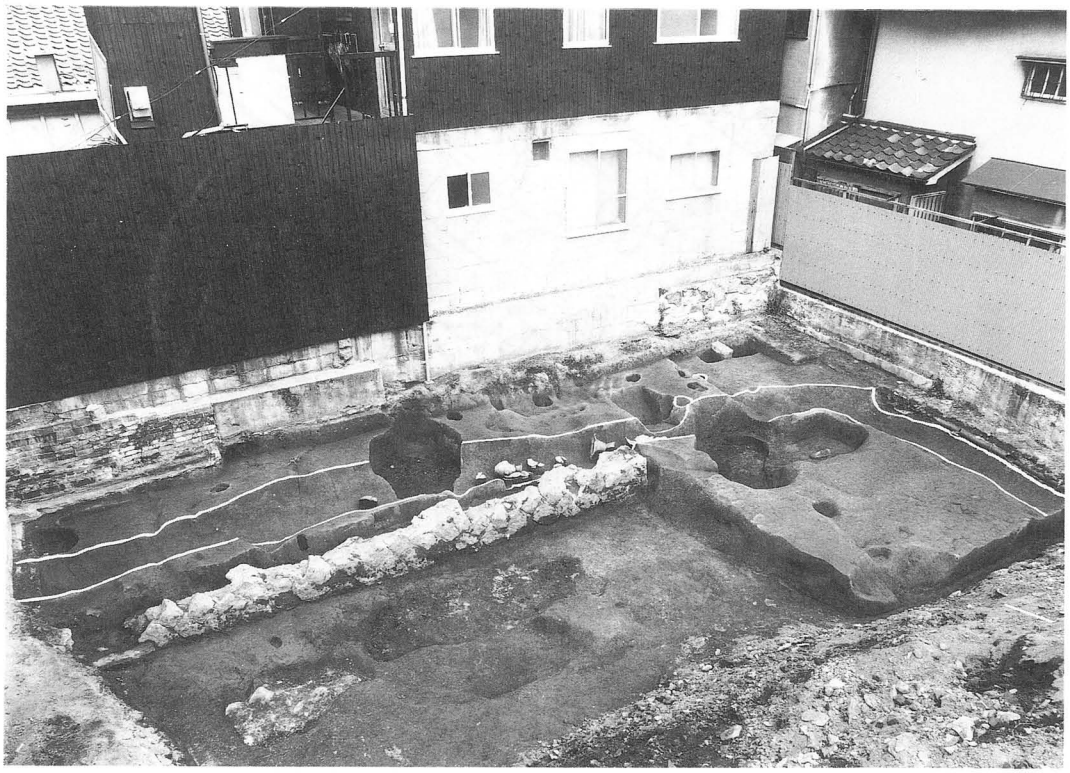


fig. 64
調査区全景

土は５層に区分できる。遺物は上層（１～２層）で多く出土している。特に１層から多く出土したが、東西方向の周溝のほぼ全域から遺物が確認された。第Ⅱ様式～第Ⅲ様式古段階の土器が出土してるが接合できる破片は少ない。石製品ではサヌカイト製の石鏃や緑泥片岩製の石庖丁が確認されている。石庖丁には両面に敲打痕が確認されたほか、刃部から

肩部にかけても打撃による細かな破損が確認され、転用されていたと考えられる。

下層（3～4層）からは、供献土器と考えられる第3様式古段階の広口壺形土器が2点出土し、この方形周溝墓の造営時期が判断できる。

最下層（5層）からは、遺物がほとんど確認されていない。

土　器　広口壺形土器（fig. 68）1は体部下半で1か所の焼成後穿孔を行っている。ほぼ完形に復元できるが、周溝内で幅約7mの範囲に破片が散乱する状態で確認された。これらの破片は口縁部分が5層埋土内の周溝底部付近まで食い込む他は、すべて3～4層埋土内から確認されている。

外面は口縁端部に綾杉紋をめぐらせ、2個一対の円形浮紋を7方向に貼付する。口縁部に2個1対の孔を5ヵ所あけている。頸部は縦方向の刷毛目調整の後、六条の断面三角形突帯をめぐらせている。体部上半は縦方向の刷毛目調整の後、3条の直線紋とその帯間に斜格子紋を施す。最下帯の直線紋部分に2個一対の円形浮紋を7方向に貼付し、その下方は刷毛目調整を撫で消した後列点紋をめぐらせる。体部下半はへら磨きを行う。上部を横方向へ磨いた後、下部に縦方向の磨きを行っている。

内面は口縁端部から頸部にかけて刷毛目調整の後、口縁部に2条の波状紋をめぐらす。その後、波状紋より下方に横方向のへら磨きを行う。体部はほぼすべてにわたり縦方向の刷毛目調整を行う。ただし下半について、その後軽くなでている。

広口壺形土器2（fig. 68）はほぼ器形を保つ状態で、下面が周溝底部からやや浮いた5層埋土内から確認されている。

外面は頸部が縦方向の刷毛目調整の後、体部との境に断面三角形突帯を1条めぐらせる。体部上半は縦方向の刷毛目調整の後、直線紋3条と波状紋2条を交互にめぐらせている。体部下半は刷毛目調整の後、へら磨きを行う。下部を縦方向に磨いた後、上部を横方向に磨いている。内面は口縁部から頸部にかけては撫で調整の後、口縁端部に半円形紋をめぐらせている。体部は頸部との境に指頭圧痕が見られる他は、縦方向の刷毛目調整を行っている。

広口壺形土器3（fig. 68）は口縁部分のみが破片で確認されており、流れ込んだ土器である可能性が高い。他の甕の小片についても同様である。

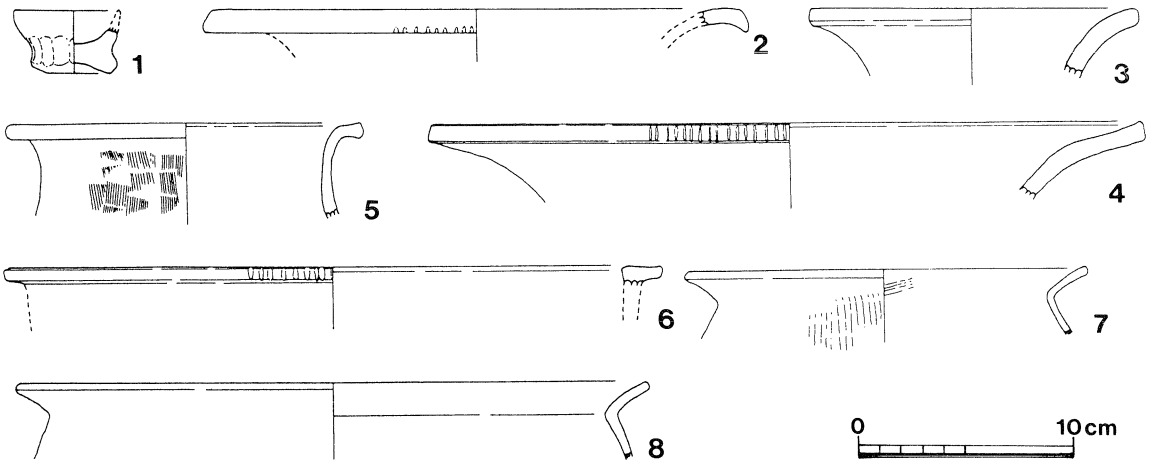


fig. 65　周溝上層及び包含層出土土器実測図

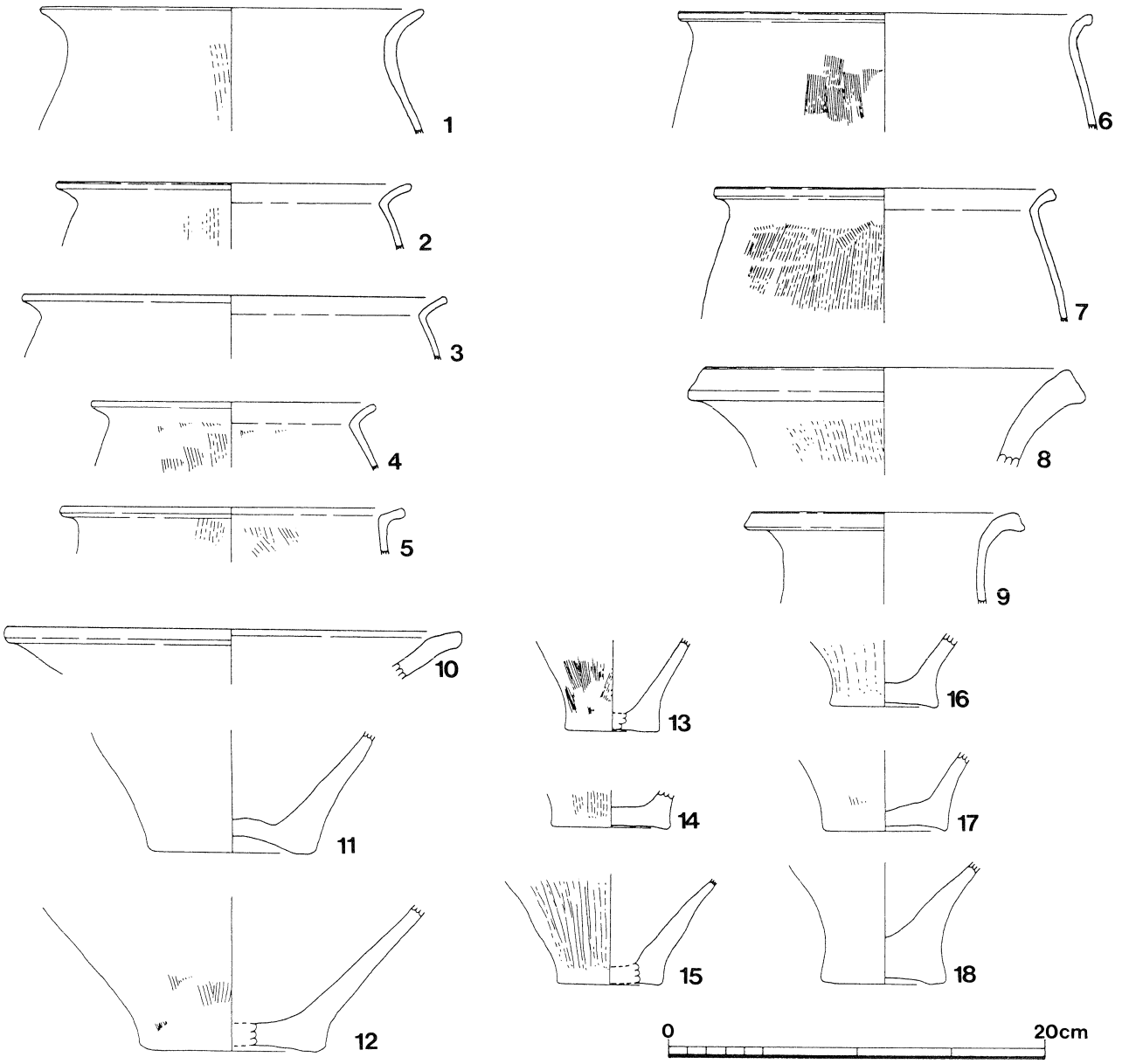


fig. 66　周溝及び包含層出土土器実測図

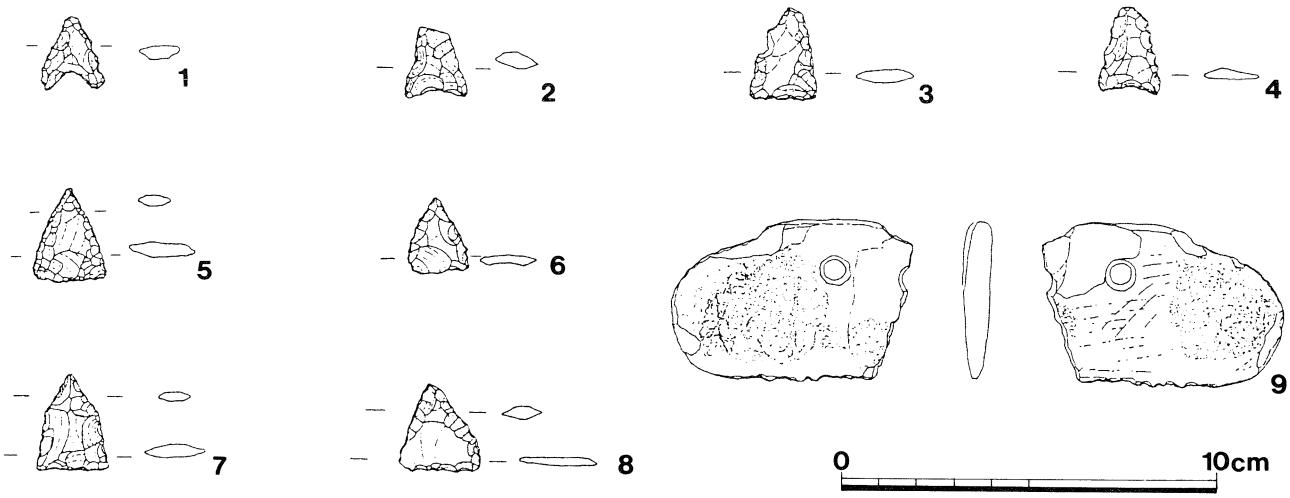


fig. 67　石器実測図（1：攪乱　2～5・9：周溝上層　6～8：周溝下層）

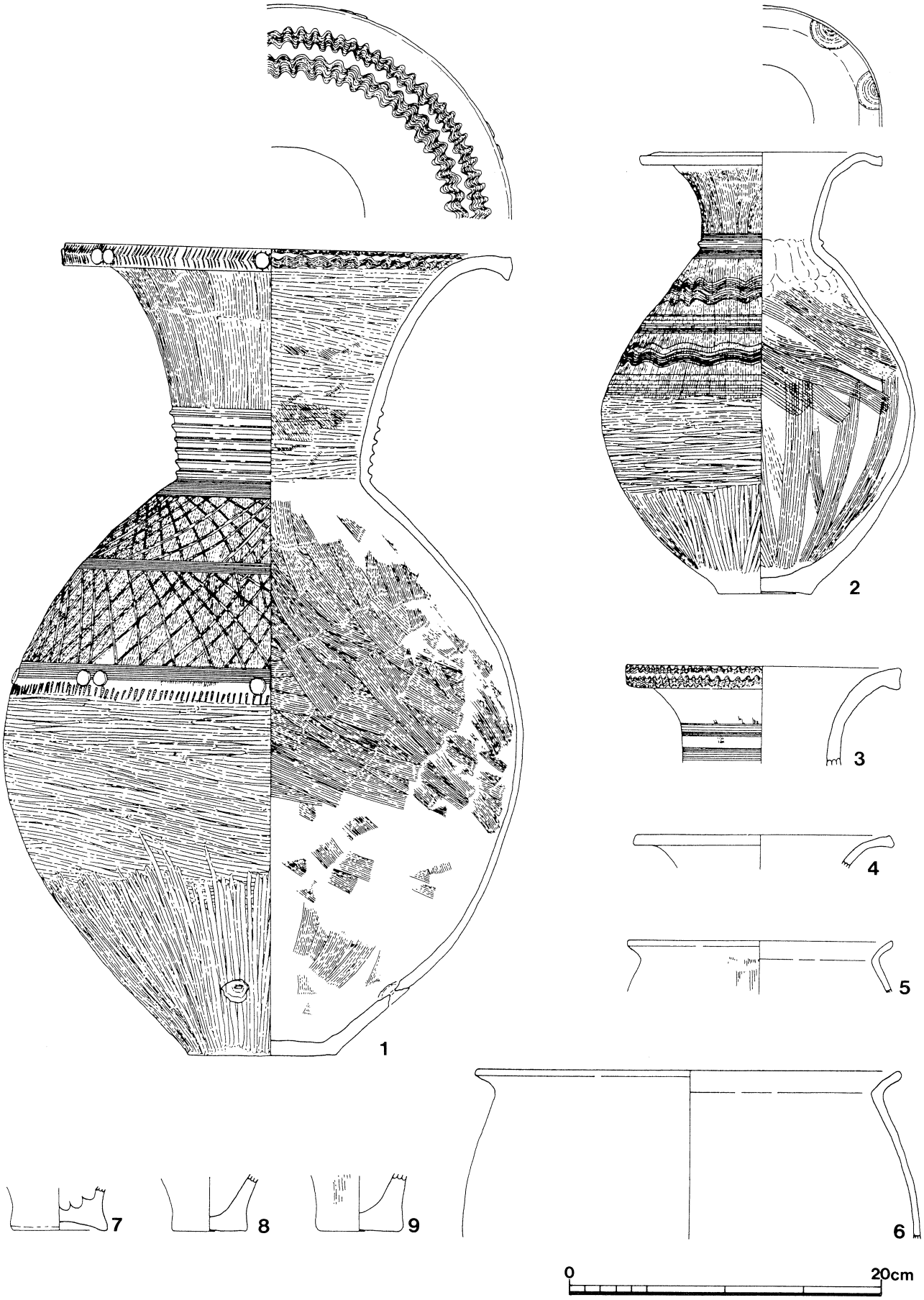


fig. 68　周溝内下層出土土器実測図

3．まとめ

削平を著しく受けているが、ほぼ直角に曲がるコーナー部分を持つ溝を検出し、供献土器と考えられる壺形土器が2点出土した。これらの調査結果から、弥生時代第Ⅲ様式古段階に属する方形周溝墓であることが考えられる。少なくとも一辺が12m以上あり、比較的大きな方形周溝墓である。

楠・荒田町遺跡でこれまで確認されている方形周溝墓には、周溝が再掘削される例がある。しかし今回調査された方形周溝墓では、周溝の土層断面を確認する限り、再掘削の形跡は確認されない。

またほぼ完形を保つ状態で出土した広口壺形土器2について、C－C’の土層断面を確認し広口壺形土器1の破片の散乱状況も確認したが、広口壺形土器2の周囲が再掘削により攪乱されている様子はない。以上の理由から、広口壺形土器2は周溝内埋葬に伴う土器ではないと判断される。

これまでの調査結果では周辺地域から、集落に関するものでは前期～第Ⅱ様式の貯蔵穴や第Ⅲ様式古段階の住居跡等が確認され、墓域に関するものでは第Ⅲ様式古段階の方形周溝墓となる可能性を持つ溝や第Ⅳ様式の方形周溝墓、第Ⅲ様式新段階の木棺墓が確認されている。

今回の調査で方形周溝墓が確認されたことにより、この墓域の成立が第Ⅲ様式古段階までさかのぼることは確実である。また第1次調査で確認された第Ⅲ様式古段階の方形周溝墓の可能性が高い溝についても、その判断の正しいだろうことを追認することができた。

これらの結果を合わせて判断すると、この墓域は少なくとも第Ⅲ様式古段階に居住域と接した東側で成立していたことは確実である。その後墓域の拡大に伴い、第Ⅳ様式には第Ⅲ様式に居住域であった地域にまで方形周溝墓が造営されていったものと考えられる。

fig. 69　周溝内出土状況

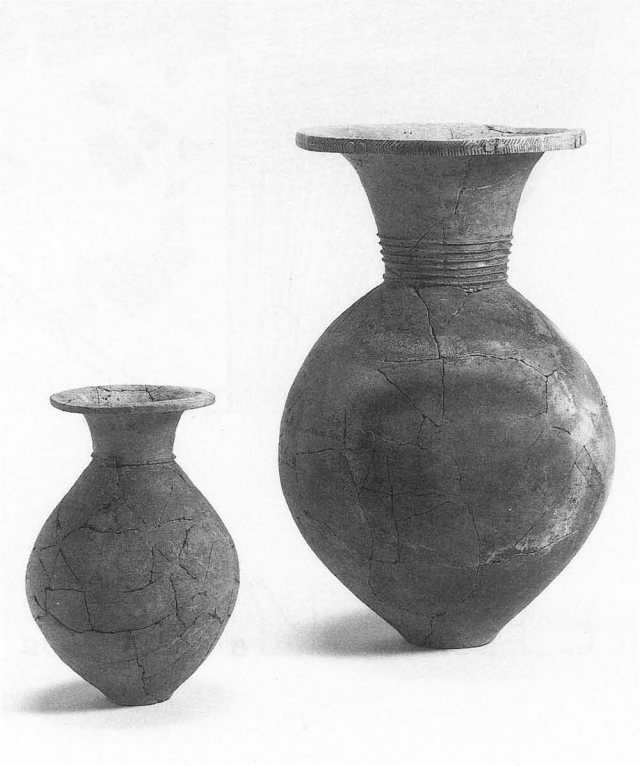


fig. 70　周溝出土土器

12. 塚本遺跡（つかもと）

1．はじめに　塚本遺跡はマンション建設に伴い、新たに確認された遺跡である。建設される建物の基礎と地中梁部分について、調査を実施した。

この遺跡は旧湊川により形成された沖積平野に位置し、大開遺跡に隣接する。

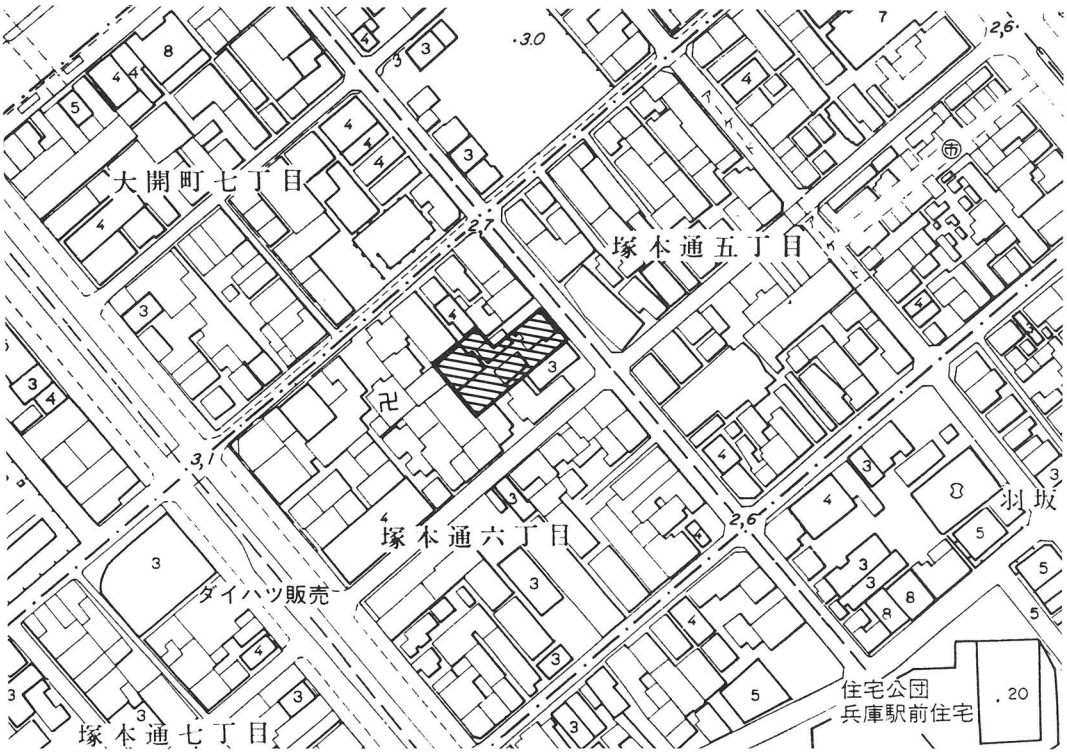


fig. 71
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　遺構面は、基本的に近世（一部は中世後期の可能性がある）と弥生時代中期の2面である。便宜上、調査区を南北両地区に区分している。

調査区の一部で断ち割調査を実施したが、遺構面の下層は厚さ約120㎝で細砂～中砂が堆積している。その下層はシルト層となり、さらに標高約0.4ｍで礫層へとつづいている。遺物は確認されなかった。

第1遺構面　近世～近代にかけての旧耕土の下面から、黄褐色中砂～粗砂と一部では灰色中砂～粗砂を遺構面として、2時期に区分される耕作痕や溝、自然流路を確認した。

耕作痕の一部は中世後期にさかのぼる可能性があるが、遺物の出土量はわずかであり、判断は難しい。

流路1　幅約5ｍ、深さ約90㎝の蛇行して流れる自然流路である。遺物の出土量が少なく時期について正確な判断はできないが、近世以降だと思われる。

耕作痕　耕作痕の方向から2時期に区別できる。

出土した遺物から明らかに近世以降と判断できる耕作痕もある。この近世以降の耕作痕に削平される、より南北方向に軸を振る耕作痕からは中世の須恵器と土師器が出土した。中世後期にさかのぼる可能性があるが、遺物の出土量が少ないため正確な時期は判断できない。

SD 101　幅約 110 ㎝、深さ約25㎝を測る溝である。中世の須恵器と土師器がわずかに出土している。近世以降の遺物は確認されていないが、溝の方向は近世以降の素掘り溝と一致する。これと同じく近世以降の溝となる可能性が高い。

第 2 遺構面　第 1 遺構面を一部で形成している灰色中砂～粗砂を除去した下面が遺構面となる。この灰色中砂～粗砂が存在しない部分では、第 1 遺構面と第 2 遺構面が同一遺構面で検出されている。調査の結果、弥生時代第Ⅳ様式の溝 1 条、落ち込み 1 、時期不明の弥生土器の細片を含む落ち込み 1 を確認した。

SK 201　北調査区の北端で確認した幅約50㎝、深さ約10㎝で約 165 ㎝の長さの溝状の落ち込みである。遺構面を覆う灰色中砂～粗砂が、落ち込み内の底部まで堆積している。落ち込みの上面付近から第Ⅳ様式の甕形土器が 1 個体出土しているが、流れ込んだ可能性が高い。

SK 202　南調査区で確認した幅約45㎝、深さ約13㎝で長さ約 150 ㎝の溝状の落ち込みである。SD 201 に一部を削平されている。灰色中砂～粗砂が堆積しており、弥生土器の細片が出土した。

SD 201　南調査区で確認した幅約80㎝、深さ約26㎝の溝である。溝の底部直上から第Ⅳ様式の土器が多く出土した。

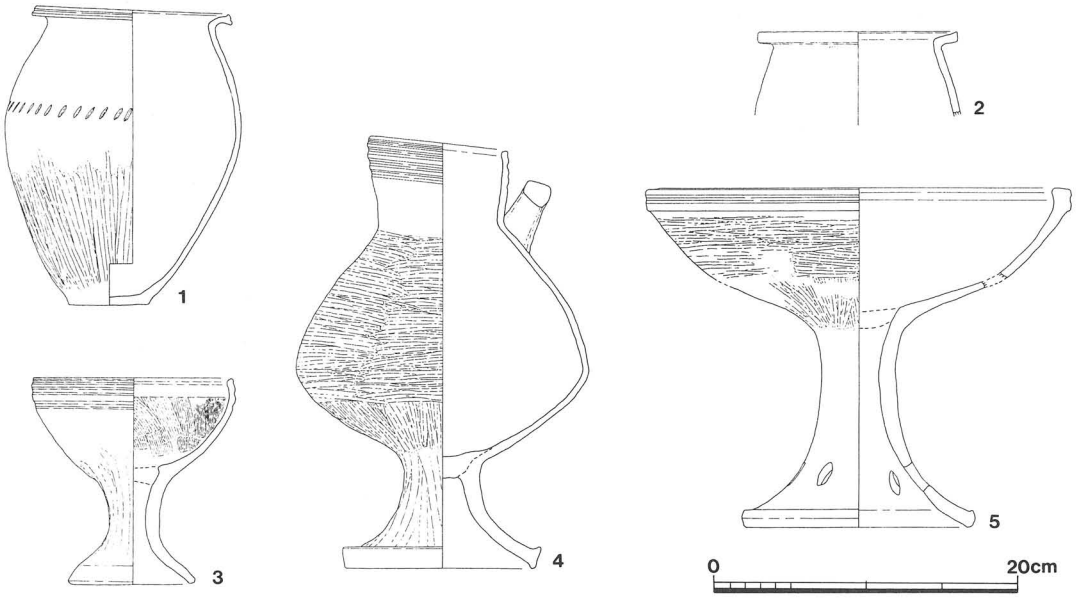


fig. 72　出土土器実測図（1：SK 01　2～5：SD 01）

3．まとめ

今回の調査では近世（一部は中世後期の可能性がある）の遺構と共に、第 2 遺構面から弥生時代第Ⅳ様式の遺構と遺物を確認している。

第 2 遺構面で確認した落ち込み（SK 201・202）は共に不定形であり、灰色中砂～粗砂が堆積している。洪水等により自然に形成された落ち込みの可能性がある。この落ち込みから出土した土器は周囲から流れ込んだ遺物であろう。ただし溝（SD 201）の底部直上から確認された土器は、完形ちかくまで復元できるものがほとんどである。あまり流れているとは考えられず、調査地付近において投棄された遺物であろう。この事実から周囲に第Ⅳ様式の集落が存在することは理解できるが、集落の規模や性格については不明である。遺構の遺存状況を確認する限り、多くの部分で削平を受けている可能性が高い。

13. 大開遺跡　第3次調査

1．はじめに

今回の調査地は、弥生時代前期の環濠集落として著名な大開遺跡（第1次調査）に隣接する。当地において、社団法人の事務所建設の計画がなされ、試掘調査を実施したところ、良好な遺物包含層を含む複数の遺構面の存在が確認された。この結果に基づき、計画上、埋蔵文化財に影響を与えると考えられる部分約450㎡について調査を実施した。

なお遺構及び遺構面の増大に伴い、再度協議の結果、設計変更が行われ、第3遺構面以下については、基礎フーチン部分について影響深度までだけの限定した調査とした。

fig. 73
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要

今回の調査地は、遺構面が4面以上存在する。

基本層序は、表土、耕土、旧耕土の下に阪神大水害と思われる洪水砂層があり、中世の土器を含む淡灰黄色砂質土を経て現地表下約70㎝で、第1遺構面のベースとなる褐灰色土となる。

さらに部分的に堆積する暗灰色土を整地層として、その下に第2遺構面のベース層である淡黄灰色シルトがあり、弥生前期の包含層である暗灰黄色シルトをへて、第3遺構面のベースとなる淡灰黄色土となる。なお調査区北西の南約4分の1ほどは弥生時代の洪水砂が淡灰黄色土にまで及んでいるため、第3遺構面は完全に削平されて、さらに一層下の第4遺構面のベース層である明黄灰色粘土層が露呈している。

なお、下層の断ち割りトレンチによって、さらに土壌化した土層が3ないし4層みとめられた。

以下、第1～3遺構面の主な遺構について略述する。

第１遺構面　第１遺構面においては、土坑10基、溝100条前後、およびピット数か所を検出した。12～13世紀に属すると考えられる。

溝　群　現在の地割りにほぼ並行、直行する幅15～30cmの溝群である。長さは数ｍ～10ｍ前後のものが多く複雑な切合い状況を示す。耕作に関連する遺構であると考えられる。断面形から、ごく浅いもの、10～20cm程度のＵ字形のもの、コ字形のものに大別される。

第２遺構面　第１遺構面より数cm下において、掘立柱建物４棟（建物１～４）および、まとまらないピット数基を検出した。

建物の主軸は、いずれも現代の地割りとほぼ一致する。

建物　1　調査区の東部に位置する、桁行３間以上×梁行２間の総柱建物で東西棟である。

建物　2　３×２間以上の規模をもつが東側は調査地外へ延びる。柱穴の切合いにより、建物１に先行するものである。

建物　3　桁行２間以上×梁行２間の総柱建物である。建物１、２とは若干、方向を違える。

建物　4　調査区南東部壁沿いにおいてピット３間分、１列が検出された。調査区外へ拡がるため規模は不明である。

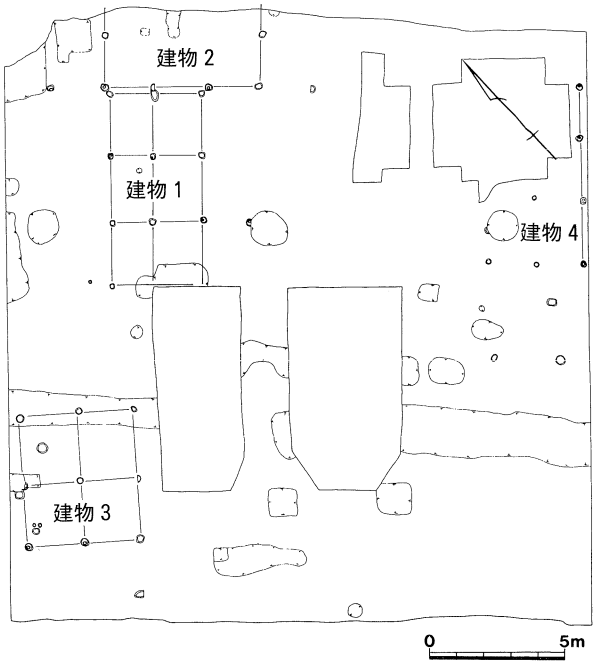


fig. 74　第２遺構面平面図

第３遺構面　竪穴式住居３棟、環濠の一部と思われる溝１条、土坑30基以上、ピット数か所などを検出した。弥生時代前期に属する。

SB 11　調査区北部において検出した。長軸4.6ｍ、短軸3.6ｍを測る平面形が楕円を呈する竪穴住居である。著しく削平を受けており、壁高は５cmほどである。ほぼ中央に35×25cmほどの楕円形の焼土坑がある。柱穴は焼土坑を取り囲むように４か所確認された。他に70×40cmほどの土坑が１基ある。周壁溝は確認されなかった。北側においてSX 11と切り合っている。

SB 12　調査区南東隅において検出された。長軸５ｍ以上、短軸4.0ｍほどの円形を呈する竪穴住居である。南側を溝状の遺構SD 203に切られるほか、約４分の１ほどが調査区外に拡がる。壁高

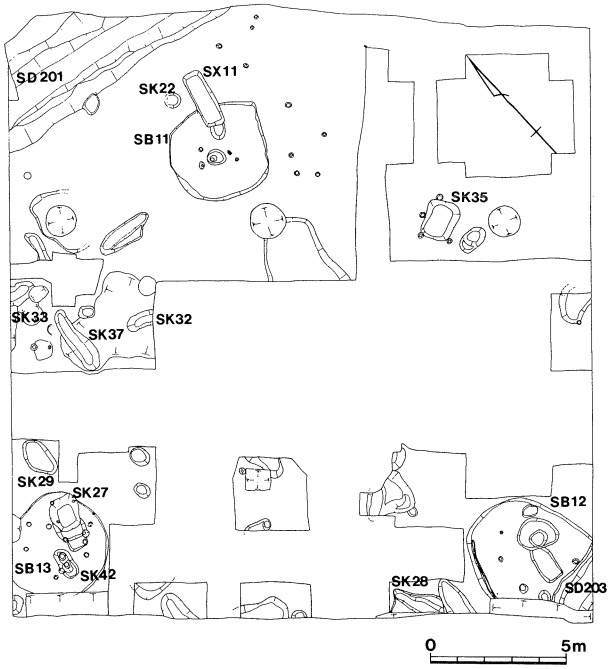
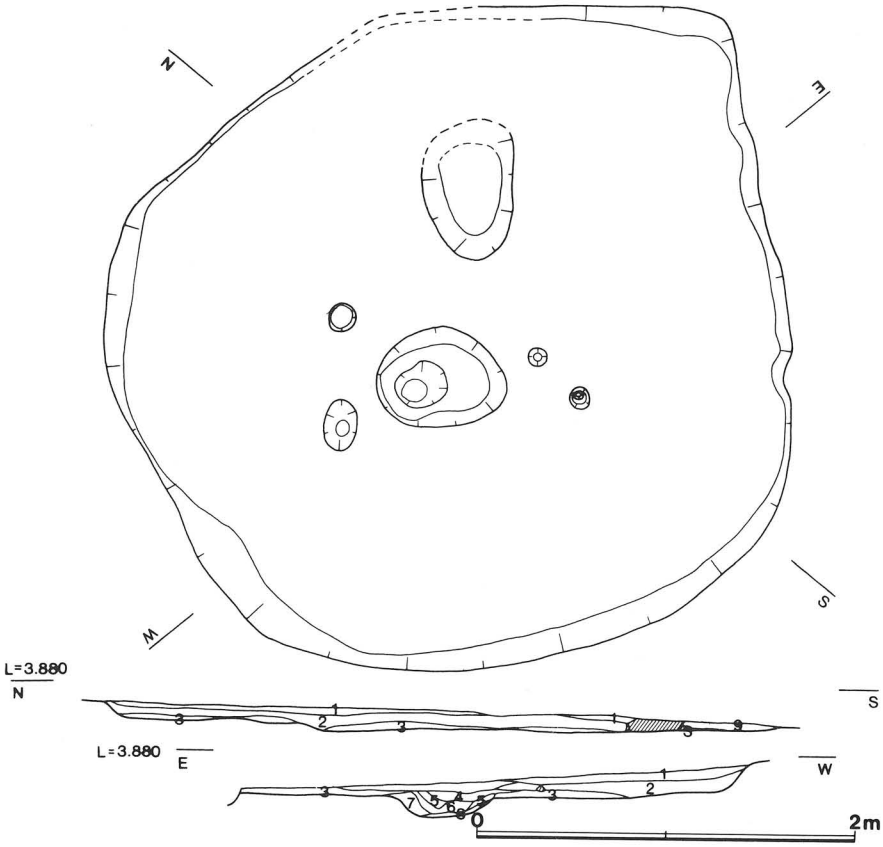


fig. 75　第３遺構面平面図

は18cmを測り周壁溝を一部にめぐらす。内部に土坑が1基、ピットは数か所確認されているが、柱穴の確定はできなかった。SK 46 および SK 47 と切り合い関係にあるが、上部の撹乱のため前後関係は不明である。

SB 13　調査区西部において検出された。長軸 4.5 m、短軸 4.0 m を測る平面形が楕円を呈する竪穴住居である。大きく削平を受けており、壁高は 5 cmほどである。周壁溝はみられないが、壁沿いにやや内傾した掘り込みをもつ、数cm～10cmの杭穴が 6 個確認された。SK 27 および SK 42 と切り合い関係にあり、これらの土坑に先行する。柱穴は 4 か所確認されている。



1．褐灰色土（炭混り）
2．褐灰色粘質土（炭混り）
3．灰褐色粘土
4．灰褐色粘質土（炭混り）
5．灰茶色土（炭混り）
6．褐灰色粘質土（炭混り）
7．淡灰褐色土（炭多く混じる）
8．炭層
9．明褐灰色砂質土

fig. 76　SB 11 平面図

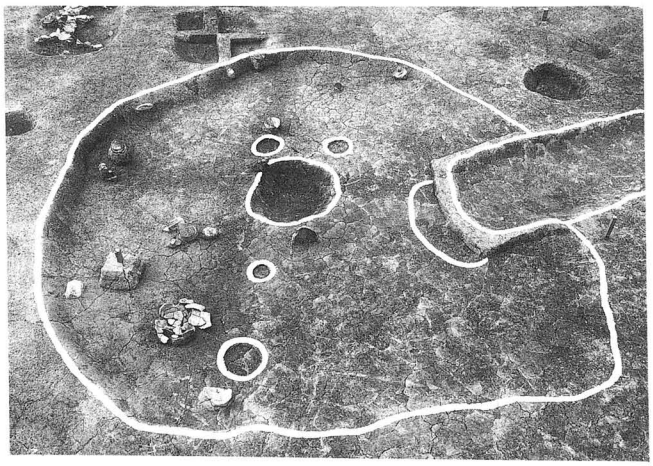


fig. 77　SB 11 全景

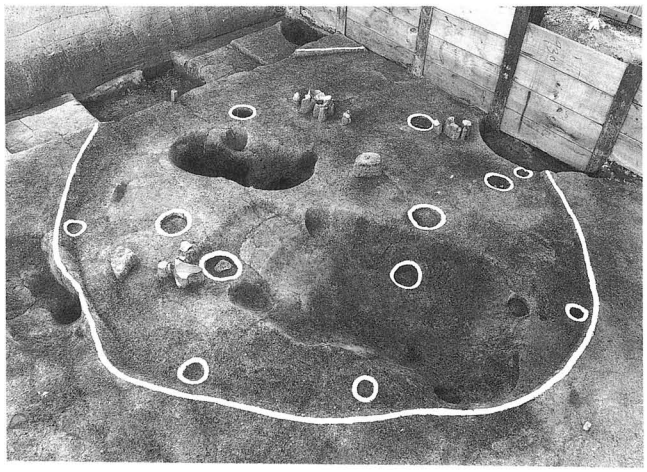


fig. 78　SB 13 全景

SD 201　調査区の北西部隅に位置する、幅 2.7 m，深さ 1.0 mを測る、断面「U」字形の溝である。北西方向から南東方向にかけて約10m検出されたが両端とも更に、調査区外に延びている。

埋土は大きく上、中、下層の 3 層に分けられる。上層においては、主としてこの溝が、機能を失ってから投棄されたと考えられる土器片が散在し、中層においては、植物遺体を豊富に含む泥炭層が何回かにわけて形成されている。下層はベース土と似た土の堆積であり、木器の未製品、板材などが出土している。

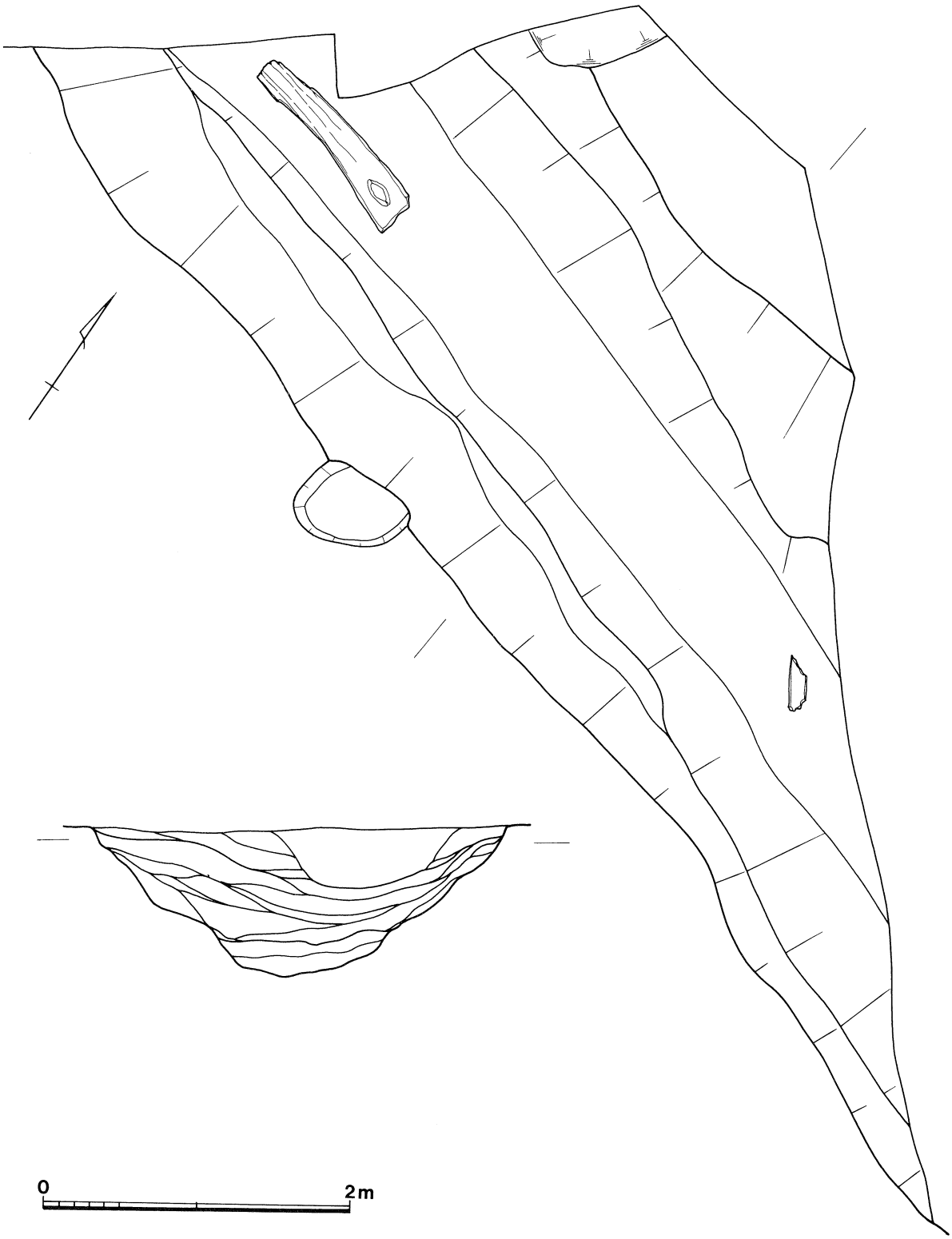


fig. 79　SD 201 平面図

SD 203　調査地の南東隅に位置する、幅1.5 m、深さ32cmを測る浅い溝と考えられる。断面形は上部が大きく広がり、底部がやや深くなる二段落ち状を呈する。

SK 27　SB 13を切る土坑で長辺1.6 m、短辺1.1 mの長方形のプランをもち、南側に40cmほど拡張した跡がみられる。深さ20cmで周囲に10～25cmのピットを4ないし5か所伴う。

SK 28　調査区西端で検出した不定形の土坑である。一部が調査区外へ拡がる。

SK 29　調査区西部で検出した長軸1.55 m、短軸0.9 m、深さ13cmを測る楕円形の土坑である。

SK 32　調査区中央部で検出した長軸1.0 m以上、短軸0.5 m、深さ14cmを測る楕円形の土坑である。周囲を洪水砂により削平をうけている。土器片が多量に含まれていた。

SK 33　調査区西辺で検出した土坑で、一部調査区外に拡がる。SK 32同様肩部が洪水砂によって削平されている。長軸1.2 m以上、短軸0.7 mの細長いプランを持つと考えられる。

SK 35　長軸1.45 m、短軸1.2 m、深さ25cm程度の隅丸長方形の土坑である。埋土は上から暗灰黄色土、暗灰褐色土、淡灰褐色粘土である。周囲に直径20cmほどのピットを4か所伴う。

SK 37　長軸5.0 m、短軸1.5 m、深さ48cmほどの細長い土坑である。船底状の掘込みで、下層には、炭化物、骨片などが含まれていた。

SK 42　SB 13内で検出された長さ1.2 m、幅0.5 m、深さ30cmの土坑である。底部には、さらに深さ35cmほどのピット状の掘り込みが2ヵ所みられる。削平のため不明確であるがSB 13を切っているようである。

SX 11　SB 11を切る土坑で、長さ2.1 m、幅0.7 m、深さ15cmの隅丸長方形のプランを呈する土坑である。

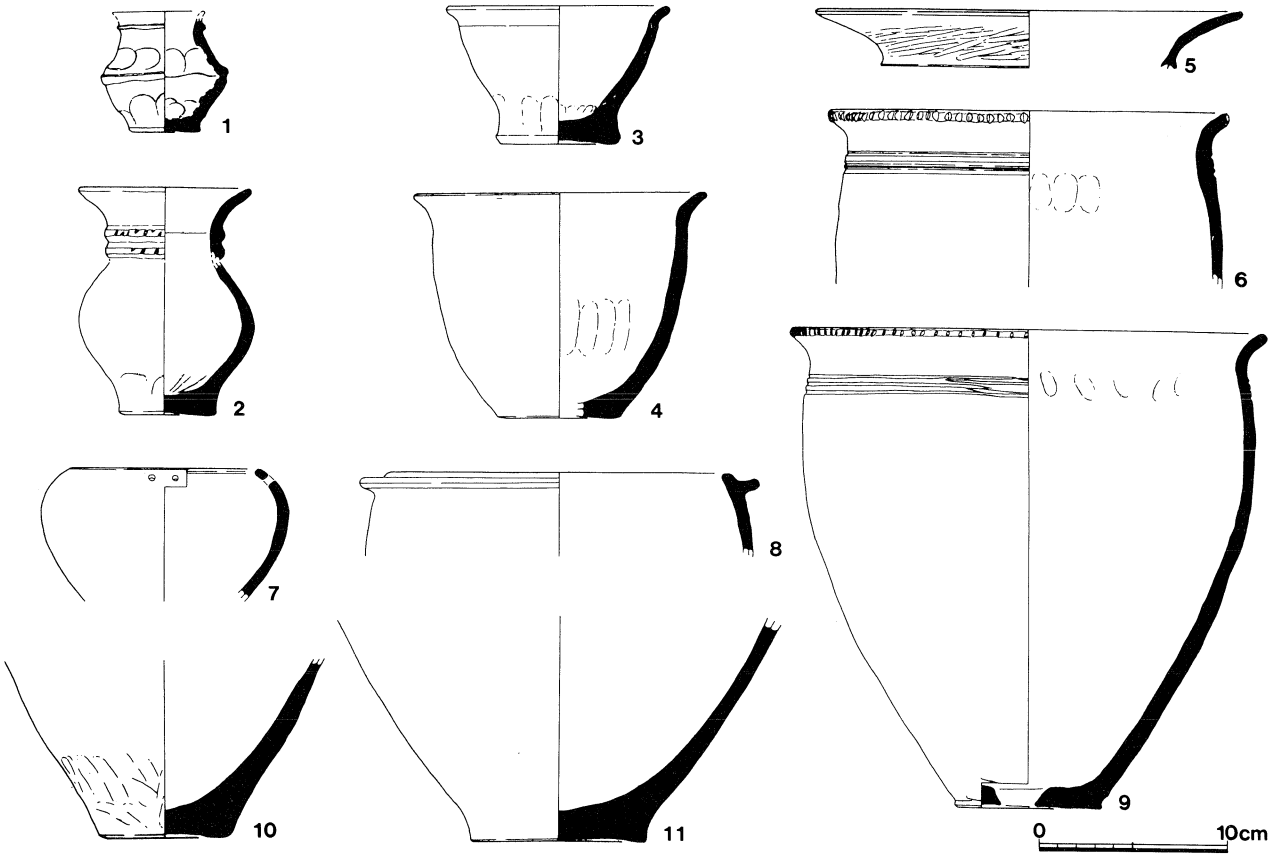


fig. 80　出土土器実測図（SB 11：4・10　SB 12：8　SD 23：3・11　SK 40：6　SK 45：9　SX 11：1　包含層：2）

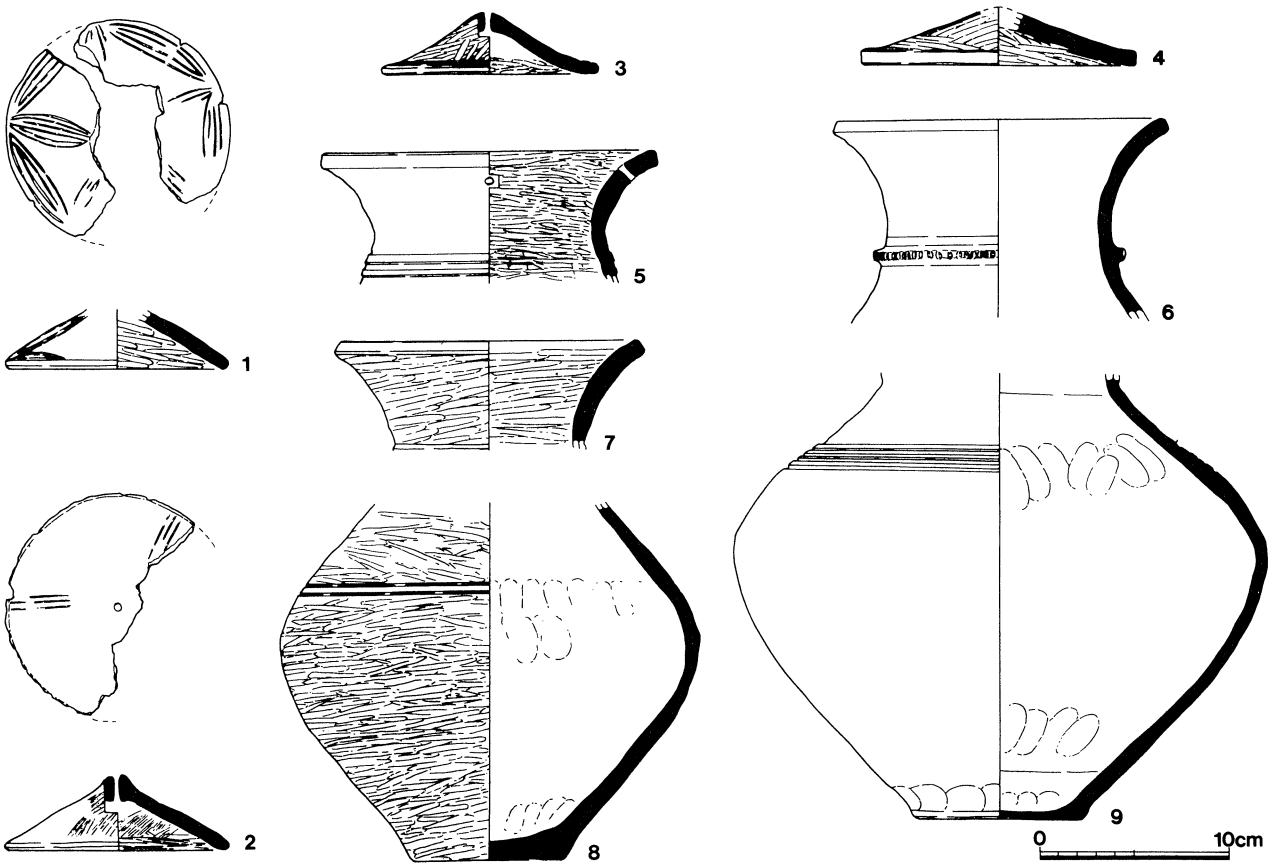


fig. 81　出土土器実測図（SB 11：8　SK 23：1・2　SK 45：4・5・6・7　SK 47：9　SD 201：3）

第4遺構面　自然流路1条とピットを検出した。

自然流路　調査区の東隅で検出した。北方向から南方向へ流れる。西側の肩部を検出した。

淡灰黄色粗砂を肩として暗灰色シルト土、淡灰白～灰緑色シルト、灰色砂、淡灰色シルトが堆積する。縄文時代晩期に属すると思われる土器が出土した。なお、河道の肩を構成する淡灰黄色粗砂においても同様の遺物を含んでいるため、さらに先行し、さほど時期を違えない河道が下層へひろがっていると考えられる。

ピット　グリット状の調査区の各所において径20～30cm程度のピットが数10か所散在した。いずれも遺物は、ほとんど含まない。

調査区北西において、第3遺構面の遺構と同時に検出されたピットも、概ねこの第4遺構面のものと思われる。

遺　物　遺物は弥生時代前期の遺物を中心に28ℓ入コンテナに約50箱が出土した。現在整理途中であるが、弥生時代の土器には、木葉紋を配するもの、ミニチュアの壺などがみられる。またサヌカイト製の石鏃が、多量に出土し総数は100点をこえるものと思われる。石器類では、他に叉状の石錐、磨製石斧などが出土している。

このほか、SD 201の埋土を洗浄した結果、多くの獣骨、歯牙が検出された。

10. まとめ

今回の調査地は、北西から南東にはしる緩い谷地形の上に立地する。このため立地上、居住域としては適さないものの、第1次調査において確認された環濠集落の生業域として水田などの存在が期待された。しかし若干の時間差をもった集落がさらに北東方向に拡がることが確認された。

14. 大開（だいかい）遺跡　第4次調査

1．はじめに　大開遺跡は、六甲山から大阪湾に流れ込む中小河川である旧湊川右岸の沖積地内の微高地上に立地している。海岸線までほぼ2km前後の地点で、標高は約4mをはかる。

大開遺跡が発見されたのは1988年の兵庫・大開小学校建設にともなう試掘調査である。大開遺跡はこれまでの調査によって縄紋時代から近世にかけての複合遺跡であり、とくに、中世・弥生時代が中心となっている。中世の遺構としては溝状遺構や掘立柱建物などが確認され、弥生時代前期の遺構としては環濠集落が確認されている。

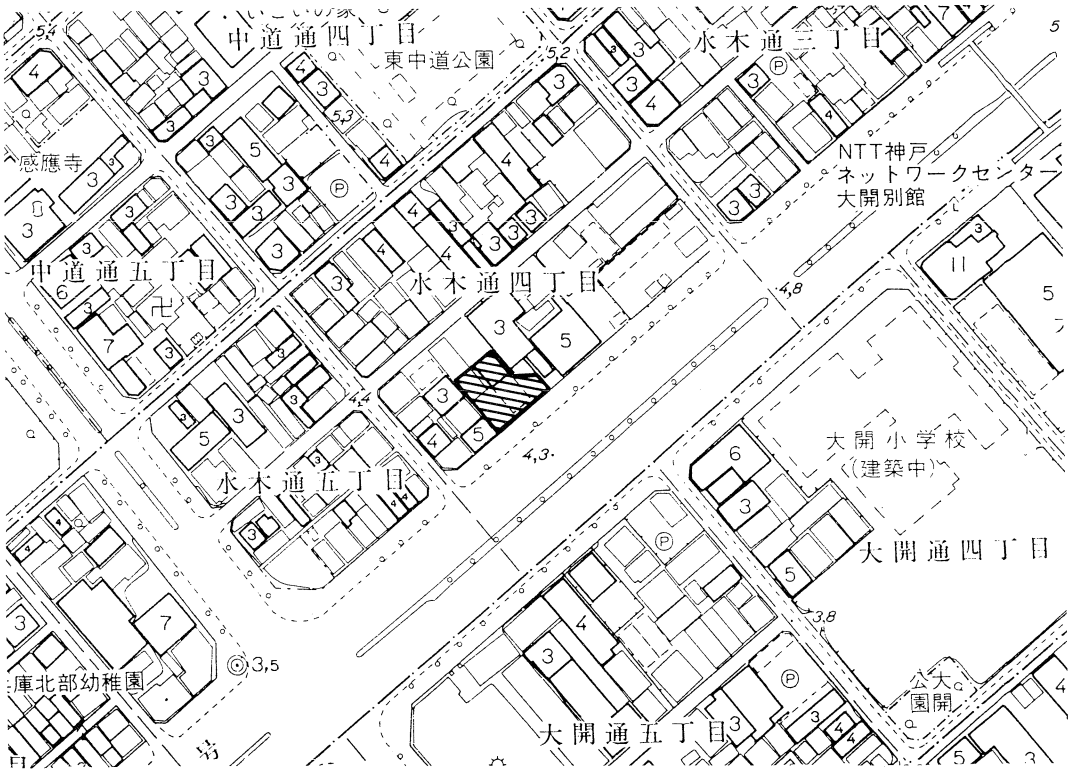


fig. 82
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　今回の発掘調査では中世の井戸5基のほか、水田畦畔を検出した。

調査地の基本層序は第0層撹乱・第1層旧耕土・第2層灰黄褐色シルト・第3層黒褐色細砂混シルト（平安時代後期の包含層）・第4層黄褐色中～細砂（上面が第1遺構面）・第5層黒褐色細砂混シルト・第6層黒色シルト（上面が第2遺構面）第7層中～細砂（弥生時代包含層）である。

第1遺構面　主な遺構は井戸5基、ピット、溝状遺構である。

SE 01　調査地中央で検出した円形の井戸である。底には曲げ物が据えられていた。

直径は45cmである。深さは、遺構検出面から70cmである。掘形は東西90cmで、遺構検出面下から急に狭くなり、底では井戸枠がちょうど収まる程度の大きさに掘られている。

SE 02　調査地中央で検出した内法が60cmの円形井戸である。井戸底から40cmまでは井戸枠が残るが、それ以上の部分は抜き取られている。底に近い井戸枠は曲物である。深さは遺構検出面から175cmあり、井戸枠を据え付けるための掘形は井戸底から90cmまでの範囲に残っている。井戸枠を抜き取るための掘形は東西140cm以上、深さ80cm以上の規模である。

SE 03　調査地中央で検出した内法が60cmの円形井戸である。井戸底から40cmまでは井戸枠が残るが、それ以上の部分は抜き取られている。底に近い井戸枠は曲物である。井戸底の深さは、遺構検出面から200 cmあり、井戸枠を据え付けるための掘形は井戸底から90 cmまでの範囲に残っている。井戸枠を抜き取るための掘形は東西 180 cm以上、深さ 110 cm以上の規模である。

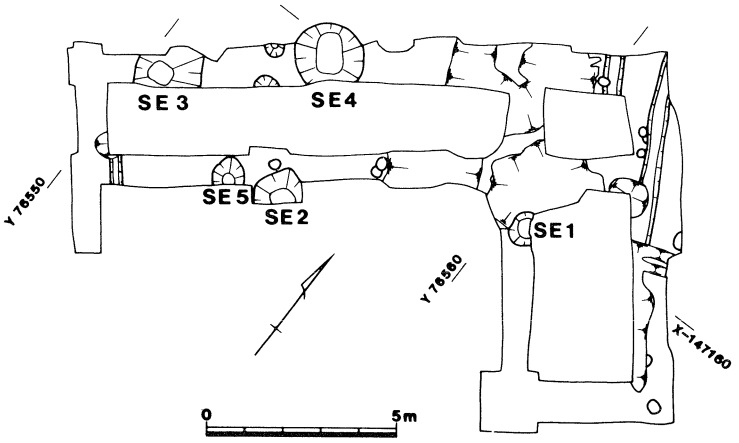


fig. 83　第 1 遺構面平面図

SE 04　調査地中央で検出した内法が60×80cmの方形の井戸である。井戸底にわずかに井戸の形態を示す痕跡が残されていた。深さは遺構検出面から 145 cmあり、井戸枠を据え付けるための掘形は井戸底から25cmの範囲に残っている。井戸枠を抜き取るための掘形は東西 180 cm以上の平面規模である。

SE 05　調査地中央で検出した井戸である。調査区縁辺にあたるため井戸枠の構造並びに規模等に関しては確認できなかった。

第 2 遺構面　調査区の北端で南北方向の水田畦畔を検出した。畦畔の上幅は55cmを測る。出土遺物に乏しく時期等は不明である。

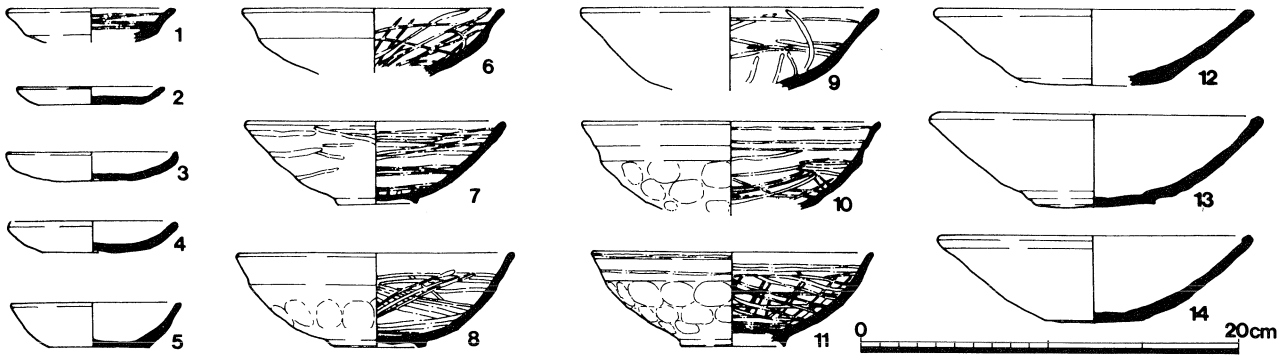


fig. 84　井戸出土土器実測図

3．まとめ

今回の調査は調査地が狭く、トレンチによる調査のため、井戸やピットを検出したが、建物の存在を確認するには至らなかった。しかし、大開遺跡について新たな知見も得られた。

まず遺跡の広がりについては当初、当調査地が大開遺跡の縁辺部に当たると考えられていたが、検出できた遺構の在り方からみて、相当北方に広がりをもつものと考えられる。

今回の調査においても井戸を 5 基検出したほか、ピット等を検出している。包含層からは神出窯産とみられる軒平瓦 1 点が出土している。これらの遺構は出土遺物から12世紀後半と考えられ、瓦の年代とも一致する。

15. 上津（こうづ）遺跡

1．はじめに　今回の調査は上上津地区の圃場整備事業に伴うもので、武庫川の支流長野川のさらに支流となる善入川沿いにあたる。

周辺の遺跡として知られているのは、善入川が長野川に合流するあたりに中世山城の茶臼山城が存在する。茶臼山城から約1㎞南の小丘陵では、平安時代の掘立柱建物4棟や縄紋時代の石鏃、多くのサヌカイト・チャートのチップが出土し、石器工房跡の可能性が考えられている竜ヶ谷遺跡が存在する。また、東側には縄紋時代から中世にかけての大複合遺跡である宅原遺跡群が存在する。

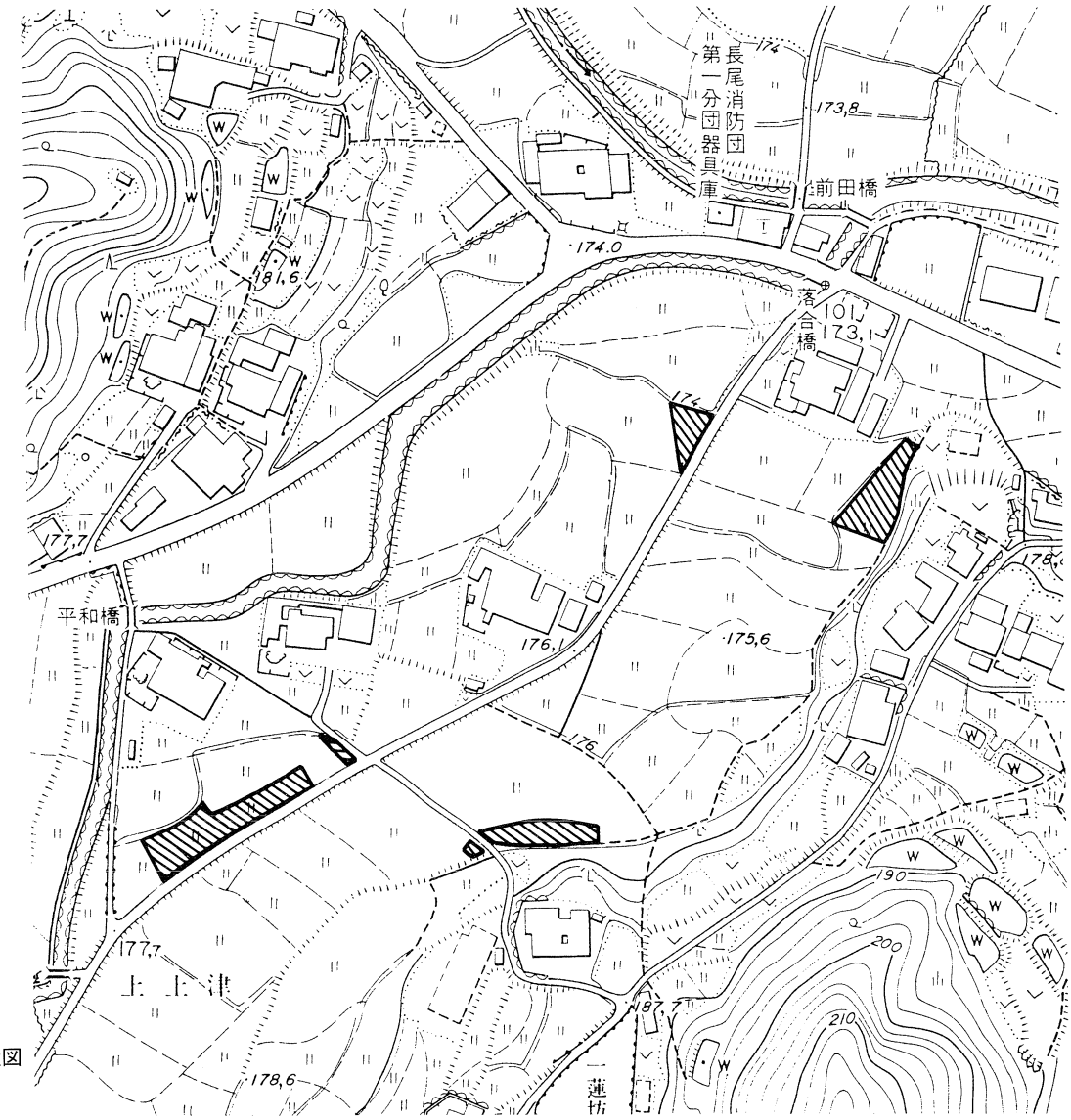


fig. 85
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　調査は6か所、それぞれをA・B・C・D・E・F区とした。基本層序としては数枚の旧耕土の直下に地山が存在する。一部では、地山直上に数センチの暗灰褐色シルトの包含層が残存していた。

A　区　調査区域の西端にあたり、茶臼山から緩やかに延びる丘陵の先端の微高地にあたる。調

査区の西半ではピット60か所をはじめ土坑数基を確認した。しかし、東半には遺構は確認出来ていない。東に隣接するＦ区では、溝を検出したものの、他の遺構が検出されなかったことから、ほとんどの遺構は中世以降の水田開発によって削平されたものとみられる。

SX 02　調査区西端に位置する不定形の落ちである。南北11ｍ、東西３ｍを測る。

SX 05　幅80㎝で、東西に走る溝状の落ち込みである。

SK 01　直径80㎝、深さ45㎝を測る円形の土坑である。

SK 02　直径80㎝、深さ45㎝を測る円形の土坑である。

B　区　　Ａ区の東、茶臼山の裾部から丘陵への変換点付近にあたる。現在は民家で塞がれているが、従来は南東方向への深い谷が切れ込んでいたものと考えられ、谷が開ける部分にあたる。調査区内は、善入川に向かい緩やかに傾斜している。調査の結果、谷をつたって流れ込んだ砂礫層が堆積しており、包含層ならびに遺構面と思われる地山面がほとんどが削られており、遺構は確認されなかった。また、調査区北東隅にはシルト層が堆積している部分があり、池状もしくは湿地状に水が溜まっていたものと考えられる。遺物は、砂礫層に若干の中世遺物が含まれている程度であるが、砂礫層掘削中に長さ 10.5 ㎝、最大幅 3.0 ㎝、厚さ 0.8 ㎝の有茎尖頭器が１点出土している。

C　区　　調査区域の北西端、善入川右岸の沖積段丘上にあたる。調査区内は、善入川に向かい若干傾斜しているが、北側は水田開墾のために削られており、旧地形を留めていない。東半で掘立柱建物２棟を検出した。また、西側は遺構面以下にシルト層・礫層の堆積があり、池状の水溜まりのようなものであったと考えられる。

SB 01　南北３間（7.0 ｍ）以上、東西２間（4.6 ｍ）以上の総柱の掘立柱建物である。南及び西の側通りは確認されているが、北辺は削平のために、東辺は遺構が調査区外へ拡がるために不明である。柱掘形は径約20～30㎝、深さは15～30㎝である。柱痕は確認されたが、柱根の遺存しているものはなかった。柱掘形及び柱痕内から遺物はいずれも細片で、概ね13世紀代のものと考えられる。

SB 02　南北３間（6.1 ｍ）以上、東西１間（2.5 ｍ）以上の総柱の掘立柱建物である。建物２についても西及び南の側通りは確認されているが、北辺及び東辺は不明である。柱掘形は径約40㎝、深さは30～50㎝で、建物１より若干、規模が大きいものである。柱掘形及び柱痕内から遺物が出土しており、ともに13世紀のものと考えられる。

また、Ｃ区の南は、平成３年度に県道山田・三田線の改良工事に伴い調査された第１トレンチにあたり、掘立柱建物１棟・土坑３基・溝２条・数十か所のピットを確認している。この内、SB 01 は、南北４間×東西２間以上の総柱の掘立柱建物で、今回検出した掘立柱建物の主軸とほぼ揃っている。また、SK 01 は今回検出した池状遺構に続くもので、規模は、短径10ｍ、長径10ｍ以上、深さ約50㎝である。

今回の調査で建物が、善入川に面した微高地の高台に存在することが確認され、さらに建物群が広がる可能性が示唆された。

D　区　　調査区域の北東端にあたり、茶臼山から緩やかにのびる丘陵の裾にあたる。調査区域は北東から南西に緩やかに傾斜している。まばらではあるが、ほぼ全域で遺構を確認した。おもな遺構は溝４条、土坑３、ピット40か所を数える。

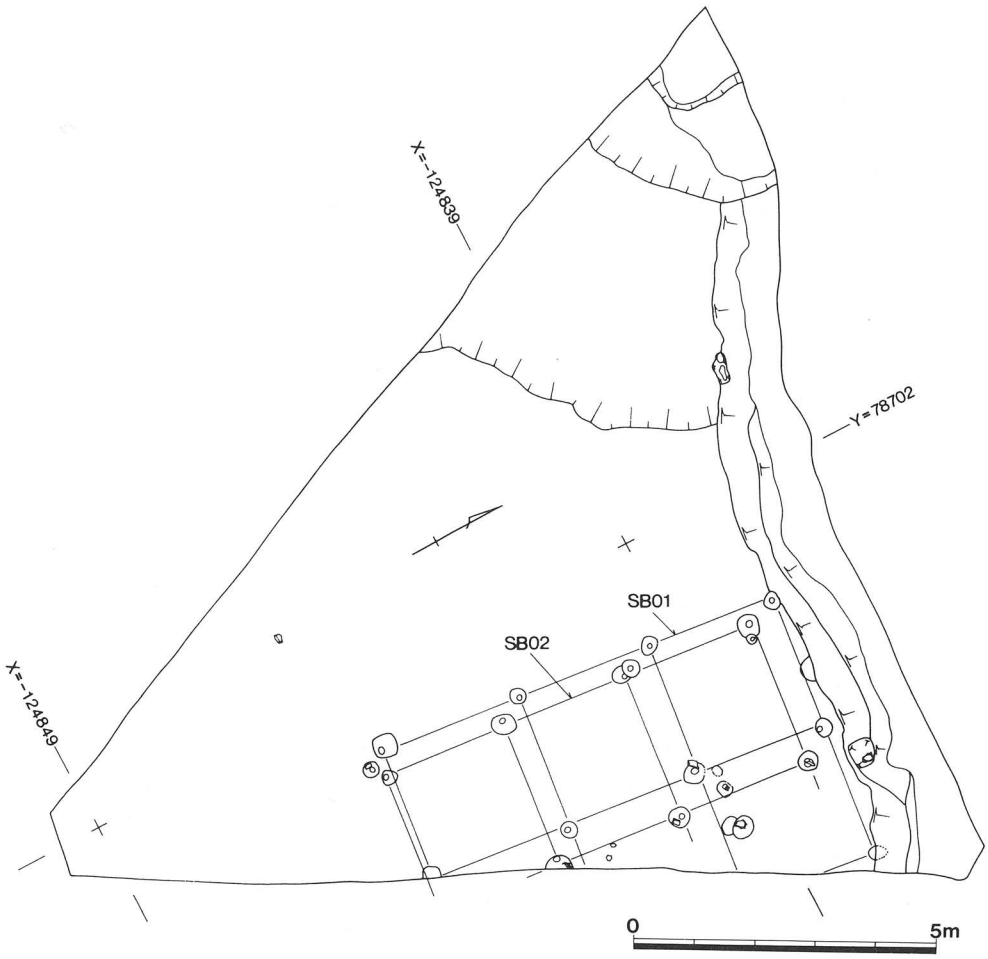


fig. 86　C区遺構平面図

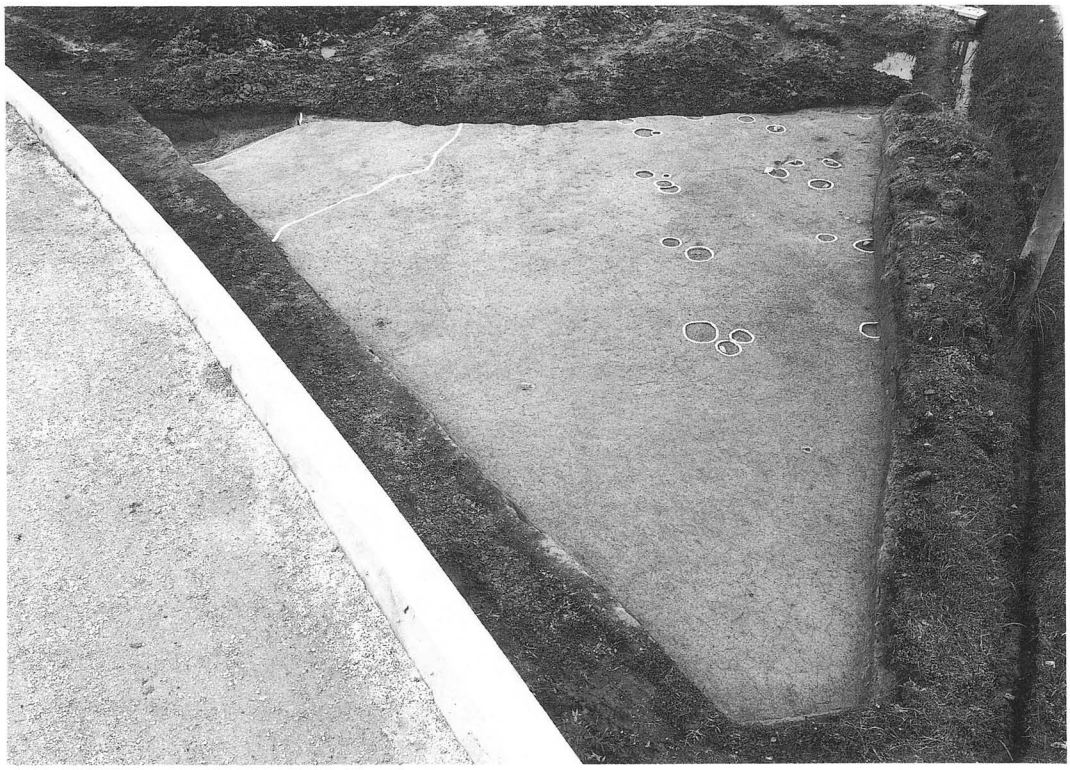


fig. 87　C区全景

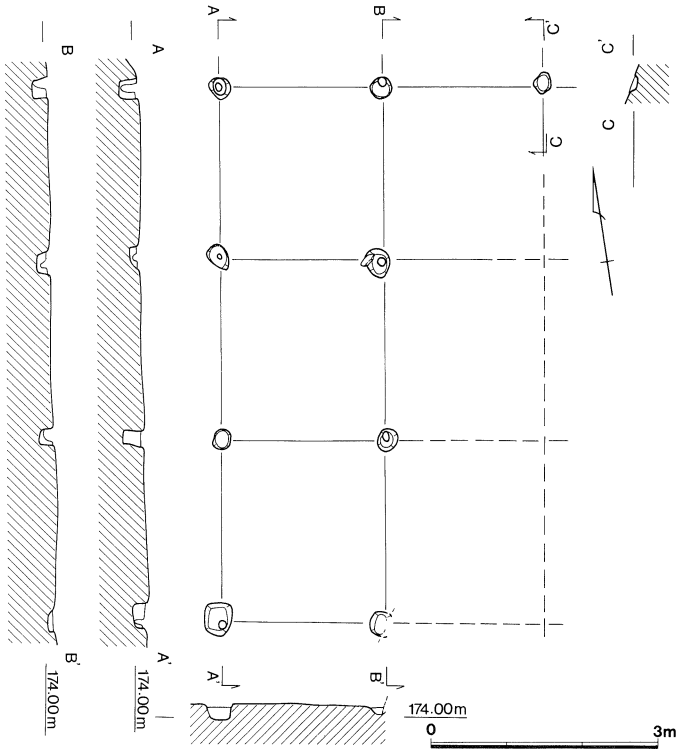


fig. 88　SB 01 平・断面図

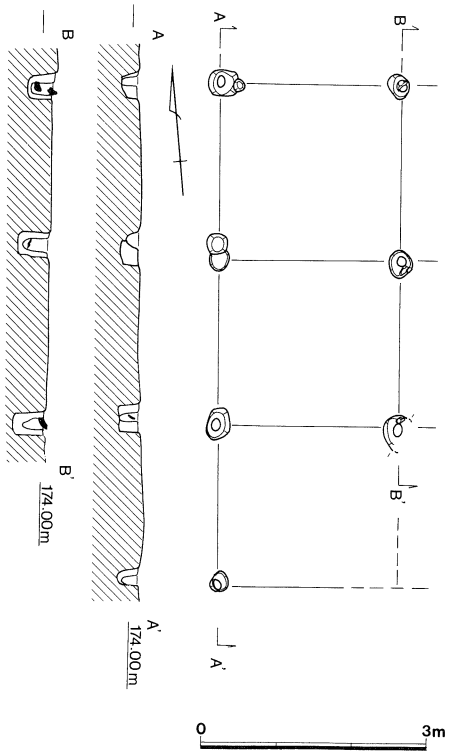


fig. 89　SB 02 平・断面図

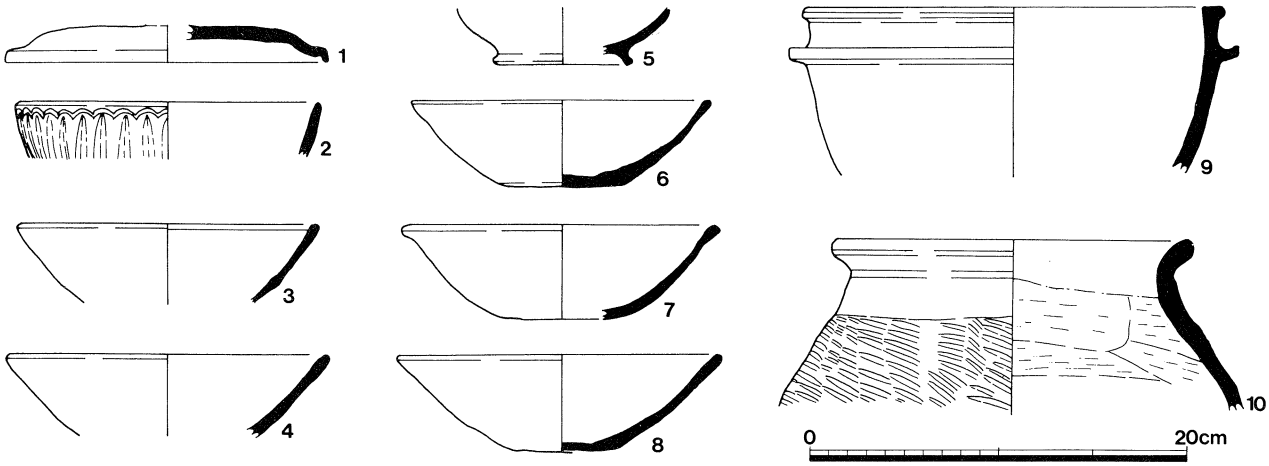


fig. 90　包含層出土土器実測図

SD 05　調査区の北端に位置し、ほぼ南北に走る溝である。幅45cm、深さ 8 cmを測る。

SX 01　不定形の落ち込みである。最大 6 mを測る。中世の須恵器とともに奈良時代の直口壺が出土している。

F　区　A区の北東に位置する。調査区は削平を受けており、ほとんど包含層は残っていなかった。調査区の南東端にて、幅 1.2 m、深さ 0.65 cmを測る溝を検出した。出土遺物等はほとんどなく、時期等は不明である。

3．まとめ

今回の調査では、善入川に面した微高地上に建物の存在することが確認され、さらに建物群が広がる可能性が示唆された。そのほかは、遺構が確認できているものの、遺跡の性格を把握するには至らなかった。ただ、出土遺物の中に鉄滓が出土したほか鉄鏃など山城との関連のあるものも出土した。

16. 宅原遺跡（えいばら）　宮ノ元（みやのもと）地区　第6次調査

1．はじめに

北区長尾町は武庫川の支流、長尾川によって形成された平野を生産基盤とする田園地帯である。横山峠のある丘陵をはさんで三田盆地の南に隣接する。長尾町の東、道場町には古山陰道に重なるのではないかとも推定されている大阪から福知山へぬける街道がはしり、東に八多町、西に大沢町が位置する。この長尾・道場・八多・大沢の4町が古の摂津国有馬郡幡多郷であると推定されている。

今回の調査地は、宅原の水田地帯に北面する丘陵を開析する谷部分にあたる。調査前まで谷水田として利用されていた。その上流には岡堂池がある。現在でも水をたたえ、2.0 haの水田に水を供給している。この池は江戸時代の絵図には記載されているという。

宅原の平野部には圃場整備が行われるまで整美な条里が残されていた。条里の年代は中世初めまではさかのぼることができるが、そのしかれた年代は今のところ明らかでない。

昭和55年、北神ニュータウン造成に伴い長尾町宅原におけるはじめての発掘調査が平池・掖谷地区で行われた。それ以降、道路建設・河川改修、58年から開始された県営圃場整備などの事業にともなって毎年発掘調査が行われ、縄文時代から現在にまで連綿と営まれた、人々の生活のあとが確認されている。

宮ノ元地区においては、これまでに昭和59・61・62・63年、平成3年度の5次にわたって発掘調査が行われている。過去に行われた調査では、縄文時代から近世にいたるまでの数多くの遺物・遺構が確認されている。とりわけ飛鳥時代～奈良時代の遺構・遺物にはみるべきものがある。

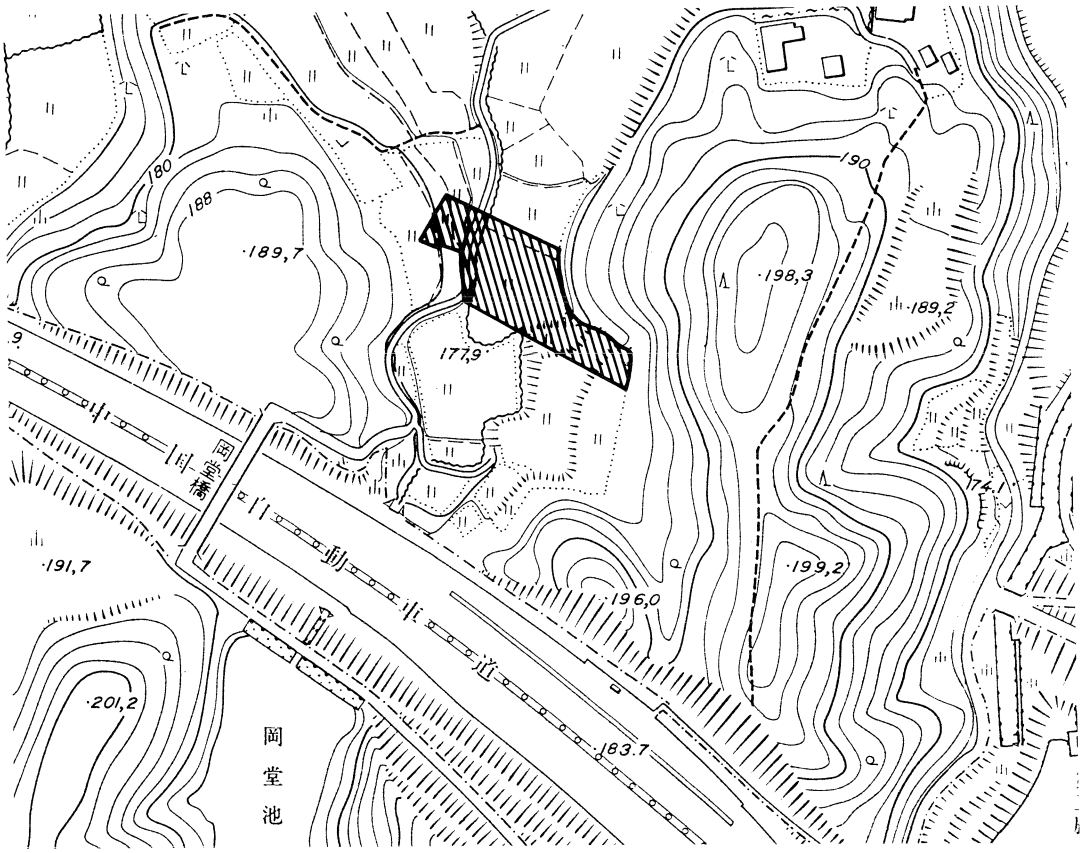


fig. 91
調査地点位置図
1：2500

昭和61年に行われた第２次調査では、飛鳥時代の掘立柱建物とともに検出された同じ時期の大溝から、人形・斉串・木製面・松明など律令祭祀的遺物が出土し、注目されている。これに加え、第４次調査で出土した円面硯や、東に隣接する岡下地区から昭和61年に出土した「評」と書かれた墨書土器の存在等とあわせて、この地域に飛鳥～奈良時代の官衙施設が存在した可能性の高いことが推測されている。

第４・５次調査は今回の調査地に隣接する西側の丘陵上で行われた。第４次調査では飛鳥時代・平安時代末の掘立柱建物、飛鳥時代・奈良時代・平安時代の土坑が検出された。第５次調査では５間×３間の掘立柱建物が検出された。この建物の柱穴は方形の掘形をもち、古代のものと推定される。このほかにも中世の掘立柱建物や火葬墓などが確認されている。

２．調査の概要　調査の結果、掘立柱建物１・流路２・溜め池１・土坑・溝が確認された。

掘立柱建物 01　谷の東側斜面において柱穴４つと雨落ち溝とも考えられる溝（SD 11）を検出した。

SD 11　南北方向で２間、東西方向で１間分を確認している。南北方向は調査区の南にのびる可能性がある。斜面地にあるため、谷底側の柱穴は流失している。柱穴出土の遺物から中世の遺構と考えられる。

SD 09　溜め池埋没後の谷底の西端を流下する幅約70cmの溝である。建築部材等がかたまって出土した。溝底から寛永通宝が３枚出土している。溜め池埋没後に営まれた水田の側溝と考えられる。

SK 11　谷の東側斜面において検出された。東西３ｍ・南北２ｍ・深さ40cmほどの不整形の土坑である。遺物の出土はなかった。

SK 09　谷の西側斜面で数か所の焚き火あとが確認された。土器類は出土していない。溜め池の下層整地土で確認された堤築造時の焚き火あとと関連するものかと思われる。

SX 01　西側の谷斜面で検出した南北 4.2 ｍ・東西 2.6 ｍの不整半円形の遺構である。遺構の底

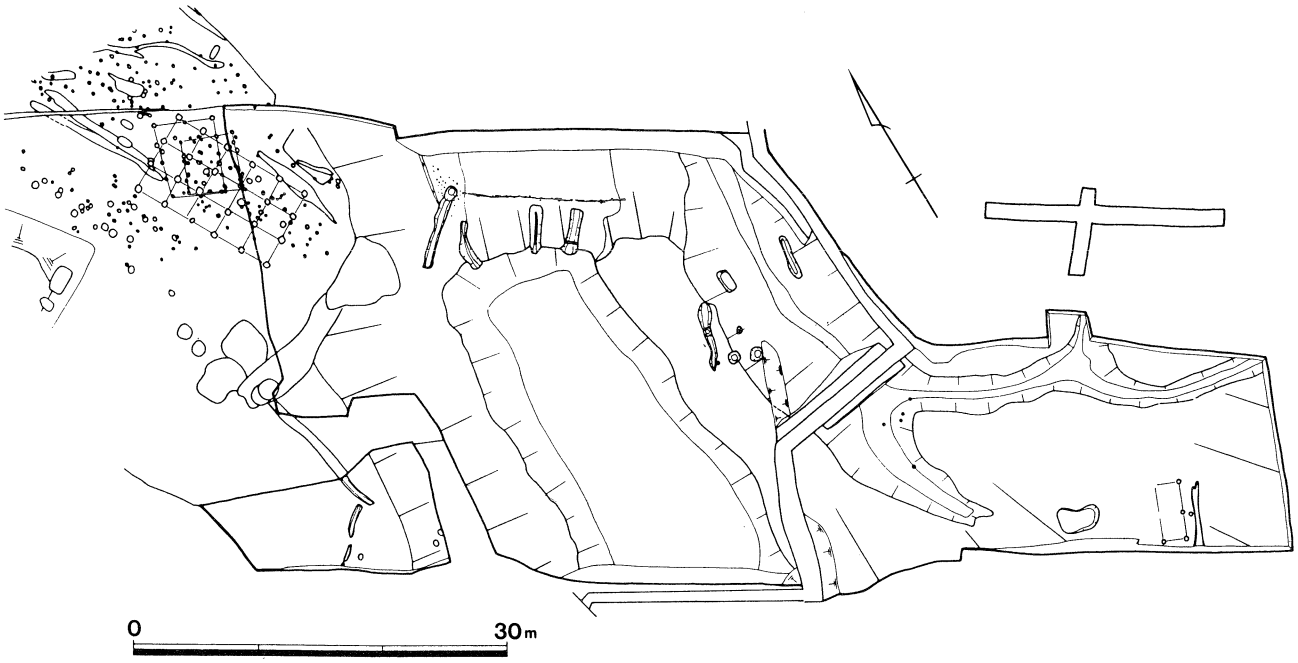


fig. 92　遺構平面図

面はほぼ水平で平坦である。遺構の西端には底面から浮いた状態で、礎石にもみえる平坦面を上に向けた大型の礫と根石状の小型の礫が出土した。埋土からは平安時代の土器が出土している。

流路01　調査区の東側を流れる谷状の流路である。東から西への細い谷と、南から北への細い谷が合流し、幅約10mの谷となって北へ流下する。細い谷の合流点付近では、古墳時代後期・飛鳥時代の土器がまとまって出土している。原位置を保っているものもあり、これらの土器は、谷の水源に対する祭祀の際、供献品を盛りつけた器と考えられる。この遺構の埋土は淀んだ状態での堆積土であり、調査区の下流に水をせき止める施設が存在する可能性がある。

堤　幅約13mの谷状の流路が流路02である。流路02の上流には現在の岡堂池がつくられている。流路02の谷口部分に基底幅約6m、高さ約80cmの堤が築かれる。調査の結果、この堤は奈良時代前半に築造され、その後、池底の堆積土を浚渫し、堤を修築しながら、鎌倉時代初めまで利用されたことが明らかになった。

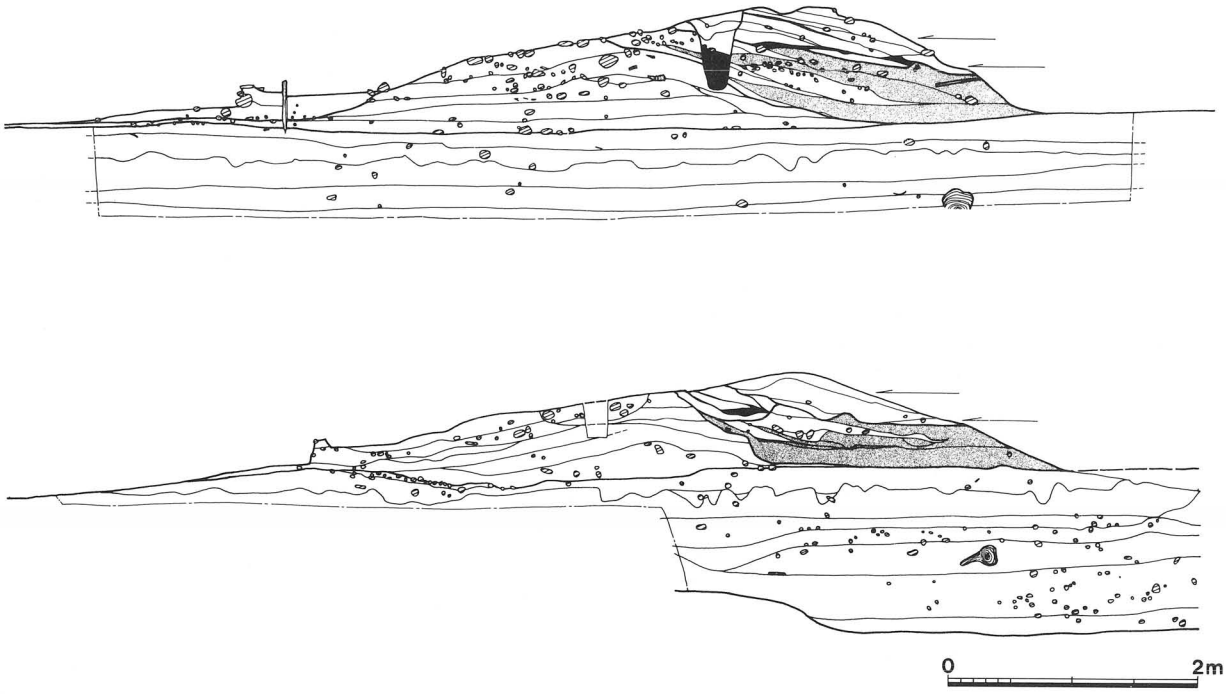


fig. 93　溜め池堤　南北断面図

土　層　堤の土層は5層に大別できる。

Ⅰ層は暗褐色砂質シルト層を基本とし、木質遺物や土器が多く含まれる。これらの土器から、この盛土は鎌倉時代初め（13世紀）のものと推測され、おそらく池底の堆積土を利用した盛土と考えられる。

Ⅱ層は地山の淡黄色シルトと土壌化したシルトを使った盛土である。堤の溜め池側でⅣ層によせるように厚さ3～10cm単位で斜めに盛られる。遺物はほとんど出土しなかった。

Ⅲ層は暗褐色を基本とする泥炭の堆積である。溜め池の底の堆積土である。多量の木質遺物や土器が含まれる。土器は平安時代後期（11世紀末～12世紀初め）のものであり、11世紀末～12世紀初めの修築の際に池の底に堆積していた土と思われる。

Ⅳ層は灰色を基本とする砂質シルトの盛土である。上半がより土壌化しており、下半はやや砂分が多い。奈良時代前期（８世紀前葉）の遺物のほか、拳大の円礫がかなりの比率で含まれる。この堤が当初築造された時の盛土である。

Ⅴ層は堤の下流側でⅢ層の上に盛られる土である。径１㎝以下の地山土シルトのブロックが目立つ。SK 12・14がこの層によって覆われ、杭列01がこの層の上から打ち込まれる。遺物から、平安時代後期の修築の際の盛土と考えられる。

fig. 94　溜め池全景

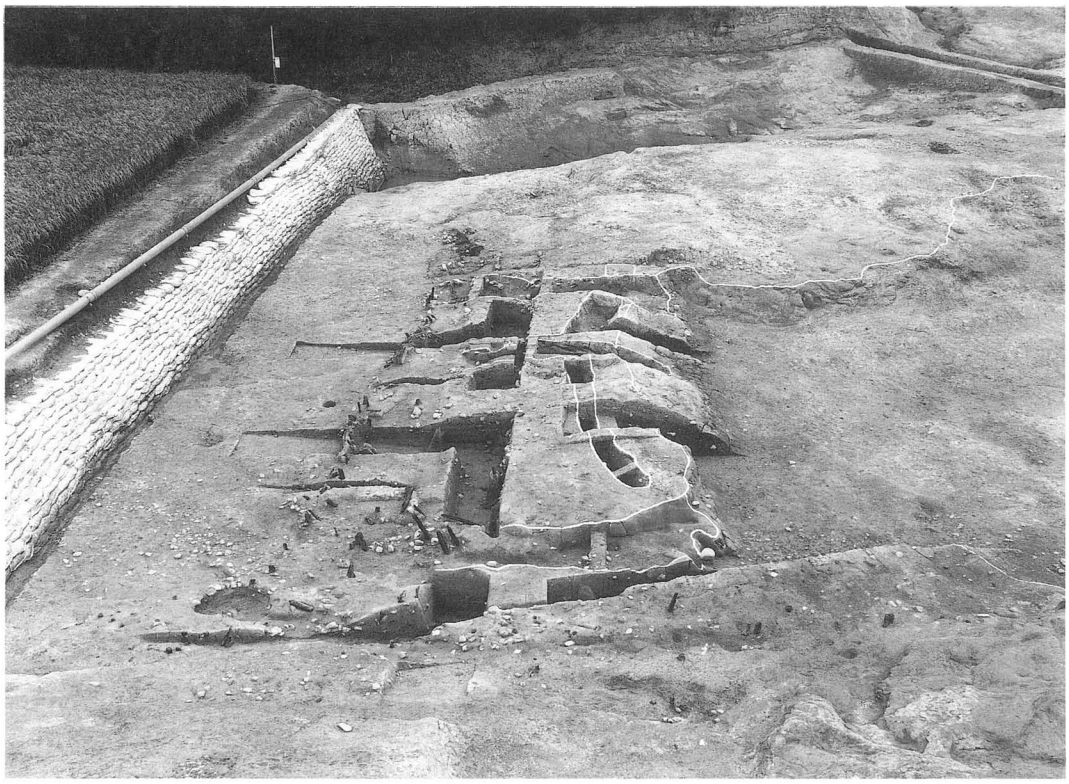


fig. 95　溜め池堤

堤関連の遺構　堤に関連する遺構として余水吐２か所（余水吐 01・余水吐 02）・樋２か所・刃金土１か所・土坑２基（SK 12・14）などがある。

余水吐 01　堤の東よりにある長さ５ｍの余水吐である。Ⅱ層と切り合い関係にあり、余水吐 01 の方が新しい。この溝は幅約 1.4 ｍ・深さ30cm以上と大きなかたちで掘り込まれ、その底と側とに厚く目の詰まった粘土～シルトが詰められる。漏水予防の効果をはかったものと思われる。また、この溝を横断するかたちで土坑（SK 13）が掘られ、２枚の板がはめ込まれる。大きなほうの１枚はヒノキで、もう一枚はモミである。板の裏側にも刃金土に使われているのと同質の黒色シルトが詰められる。これも、漏水予防のための工夫と思われる。平安時代後期の、修築の際に作られた余水吐と考えられる。

fig. 96　余水吐 01

fig. 97　余水吐 01 水位調節板

SD 10・12　淡黄色と極暗褐色のシルトを互層とする漏水予防のための刃金土を詰める溝である。SD 10 は堤の西半にのび、幅約30cm、深さ約60cm、長さ 4.5 ｍをはかる。Ⅱ～Ⅳ層を切り、SD 12・樋 01 に切られる。SD 12 は堤の東半にのび、幅約90cm、深さ約60cm、長さ 4.5 ｍをはかる。Ⅱ層を盛る途中で設置される。SD 10 を切り、余水吐 01 に切られる。樋 01 の裏込め土は SD 12 の刃金土と一連の作業で同質の土が詰められる。

樋 01　堤のほぼ中央部にあり、Ⅱ～Ⅳ層を切っている。また SD 10 とも切り合い関係にあり、樋 01 の方が新しい。ただし、SD 10 から出土した土器と樋 01 を納めた溝から出土した土器はともに平安時代後期のもので、時期差は認められない。

Ⅱ層・余水吐 01・SD 10・12・樋 01 などに切り合い関係が認められるが、これらは一連の工程のうちの微妙な時間差をもつにすぎないと思われる。

樋 01 の設置は、幅１ｍ、深さ45cmの溝にこぶりの礫を敷き、樋を置き、これを刃金土と一連の工程で、同じ淡黄色のシルトと極暗褐色シルトの互層にして埋めるという工程で行われている。

樋はくの字に曲がった径15cm、長さ 2.2 ｍの皮つきの栗材の丸太に溝を刻み樋身とし、幅12cmほどのヒノキ属の板２枚をのせて蓋とする。溜め池側の端には幅20cm・高さ28cmのヒノキ属の砂蓋が打ち込まれている。樋の下流側の端近くには、その両側に杭が打ち込ま

れ樋の位置を固定する。樋棒等は出土しなかったが、樋蓋にはこれを差し込む樋棒の穴と思われる部分が残存していた。樋身内面のレベルは樋口で標高 175.493 m、中ほどで 175.408 m、樋尻で 175.239 m。下流側が低くなっている。

樋を埋めた土はその直上部分が掘り返されて、その後灰褐色の土で埋め戻されている。樋の詰まりを掃除、あるいは蓋の取り替えなどを行った痕跡かと思われる。平安時代後期の修築の際につくられた底樋である。樋から田へ導水する水路は確認されなかった。

余水吐 02　堤の西よりにある長さ 4 m、幅80cm、深さ10cmほどの余水吐である。Ⅰ層がこの遺構の埋土を覆い、Ⅳ層をこの遺構が切っている。漏水予防の粘土などが張られた痕跡はうかがえない。この遺構を横断する形でⅣ層にモミ属の板 6 枚が縦に打ち込まれる。水位調節用の板かと思われる。この溝の下流側のⅤ層下で SK 12・14 が検出された。両者の関係は SK 14 が古く、SK 12 が新しい。SK 14 には拳大の礫が詰められ、両者ともに流水にともなう堆積土が認められる。余水吐 02 に関連した遺構である可能性がある。その構造やⅤ層との関係から奈良時代の当初の余水吐であ

SK 12・14

fig. 98　余水吐 02 水位調節板

fig. 99　樋 01

樋 02　堤築造時の谷底の整地層の上面におかれ、Ⅳ層がこれを覆うかたちで盛られる。奈良時代前半にこの堤が築造された際の樋である。その設置は、平地に先ず拳大の石を敷き、その上に樋を置き、側面も石でかためる。樋の両側に杭を打ち込み位置をきめることはしていない。これを木の枝、板材などで覆い、さらにこれを拳大の石でおさえ、Ⅳ層が盛られるという工程で設置されている。

樋身は長さ約 180 cm、幅13cm、高さ 6 cmの横断面矩形のヒノキ属の材に横断面形円半の刳り込みを入れるものである。樋身の先端が二股に分かれている。腐食したためなのか、樋棒を受けるための構造なのか判然としない。樋身内面のレベルは樋口で 175.168 m、中ほどで 175.178 m、樋尻で 175.156 m。ほぼ水平に置かれる。樋の北端から動物の歯が出

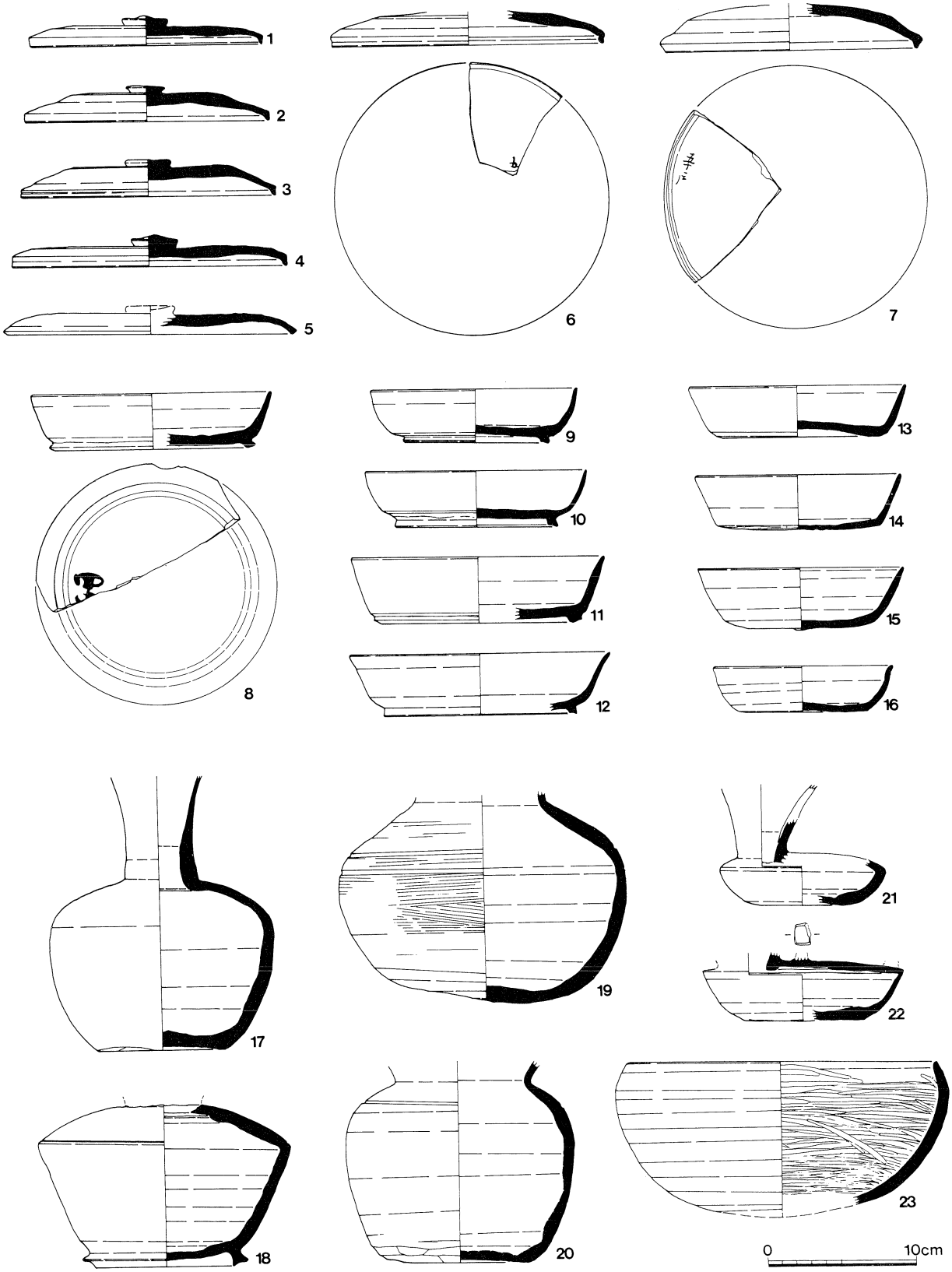


fig. 100　溜め池盛土及び盛土直下出土土器実測図

土している。

この上に樋蓋がのせられる。樋口寄りには長さ78cm、径約15cmの横断面半円形で、一方の端よりに抉りがあり、こけし状にみえるコウヤマキ材の内面を抉ったものが置かれる。樋尻寄りには幅5～6cm、長さ105～56cmのヒノキ属の板が3枚蓋として並べられる。この板の樋尻側は、腐食によりだいぶやせてしまっている。樋から田へ導水する水路は確認されなかった。

樋を覆う板・枝は、樋の主軸と直交する形で置かれる。その樹種はアカマツ・ヒノキ属・コナラ節・モミ属などがある。板材にはホゾ穴のあるものが2枚認められ、その樹種はカヤとヒノキ属がある。北側の裾には径1cm程度の棒が数本垂直に刺してある。樋を覆う板・枝がずり落ちないようにするためのものと考えられる。

さらにこれを拳大の石でおさえるが、その中から須恵器鉄鉢が出土している。

溜め池　溜め池部分の堆積土は木質遺物を多量に含む泥炭層となっている。丸太・杭・板・曲物などが蓮・さるのこしかけ、多量の自然木・種子、昆虫の遺体などとともに出土している。土器類は鎌倉時代（13世紀）のものがほとんどである。溜め池は池の底に堆積する土をさらえるということが行われる。基本的に一時期の土器だけで構成されるこれらの土器は、この溜め池の利用が停止された時期を示すと考えられる。また、さきに述べた平安時代の堤修築土（Ⅱ層）の下の堆積土（Ⅲ層）からは、平安時代後半（11～12世紀）の遺物が出土している。

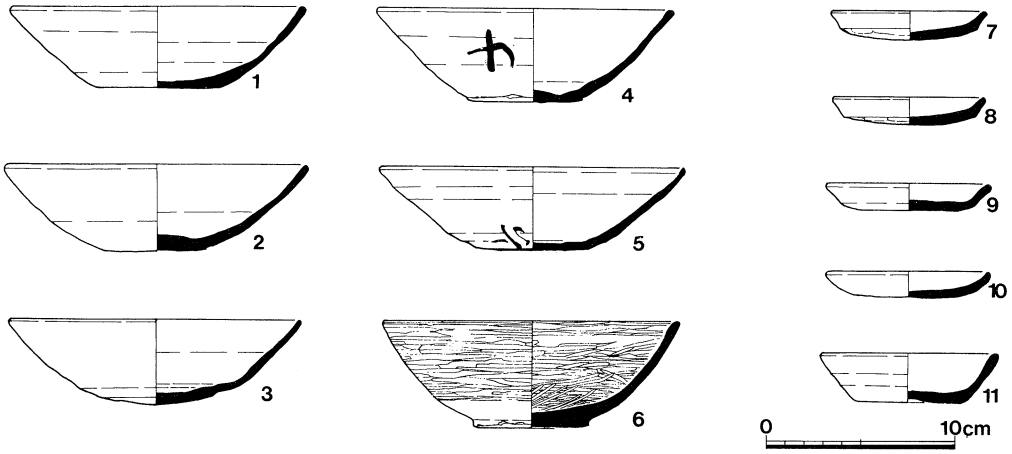


fig. 101
溜め池1出土土器
実測図

整地土　堤の下層および溜め池堆積土の下層の青灰色砂質シルト層と、その下層の青灰色シルト層は不整合をなしており、青灰色砂質シルト層は、堤を築造するにあたっての整地層と考えられる。この青灰色砂質シルト層と、下層の青灰色シルト層の上面からは、奈良時代前期の多量の土器類が堤の位置を中心に出土している。谷の上流側では出土しない。またこれらの土器は、現地で故意に打ち割られたような状況で出土しているものが多い。このなかには「池邊」・「疋」・「田木」・「五十戸」と墨書された土器や人面墨描土器がある。また、火を焚いたあとと思われる炭の広がりも数箇所確認されている。これらの遺物・遺構は、堤を築造するに先立つ地鎮のあとと思われる。

流路02　堤築造時の整地土の下層は、土壌化した灰褐色のシルトが厚く堆積しているが、この層は基本的に無遺物層である。この層の最下位およびその下層の洪水砂層から、飛鳥時代の

遺物が出土した。洪水砂層を除去すると、当時の地表面と溝が姿を現す。

谷底を蛇行して流れるこの溝は幅約１ｍの浅いものであるが、この中に木製品・板・建築部材・木材の加工の際にでたモミ属の手斧屑が土器などとともに大量に出土した。

溝沿いの平坦面では、火を焚いたことを示す炭層が確認され、破砕された須恵器、馬の歯などが木製品とともに出土した。また、アカガシ亜属など立木の株が、当時生えていたままの状態で検出された。

fig. 102　流路 02

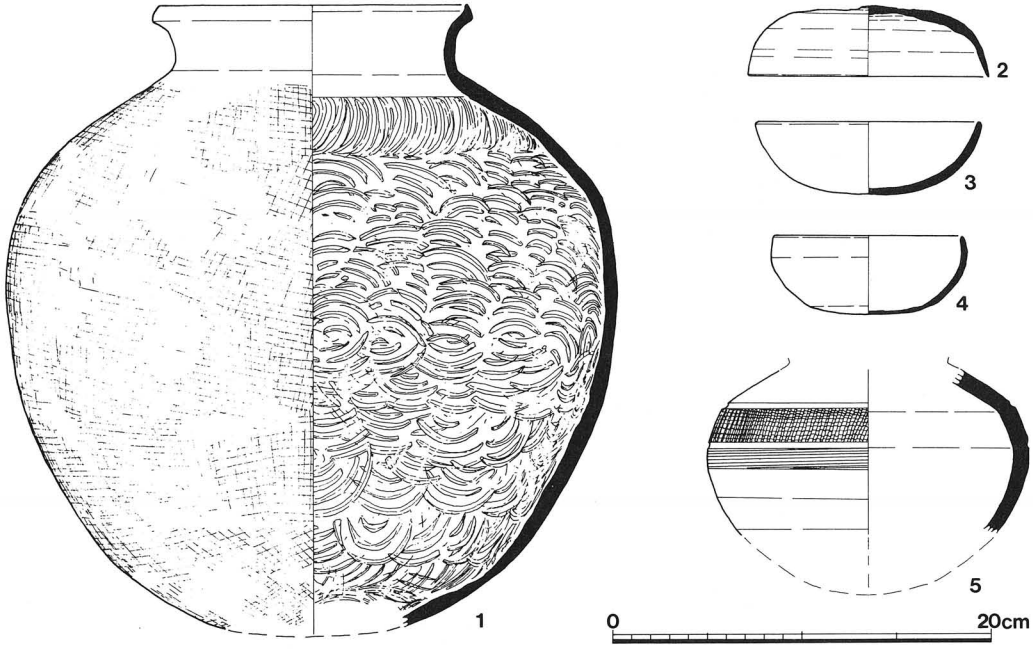


fig. 103
流路 01 出土土器
実測図

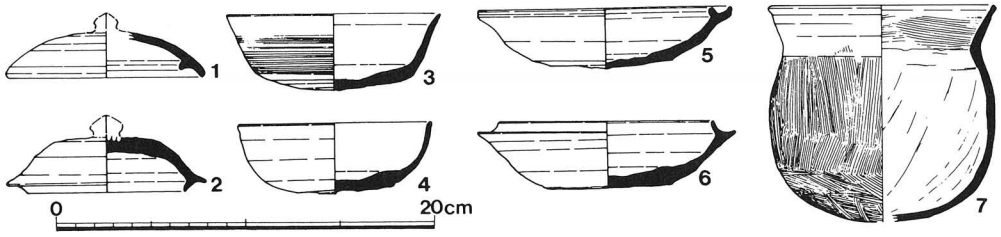


fig. 104
流路 02 出土土器
実測図

3．まとめ

奈良時代に築造された溜め池の調査例はごく少ない。鶴田池東遺跡では樋が出土し、土層観察から堤が遺存していることも確認されている。しかし部分的な発掘にとどまっており、堤全体として見た場合、不明な部分が多い。今回の調査例は、溜め池全体の様相が分かるものとして貴重である。

堤の奈良時代の盛土から出土した土器、地鎮祭に使用された土器は、平城Ⅱに併行するものであり、この土器型式は霊亀年間から神亀年間のものとして位置づけられている。この時期は養老6年に「良田百万町歩開発令」、同7年に「三世一身法」などが出され、墾田開発がすすめられた時代にあたっている。当地が官衙、あるいはその関連施設の置かれた地域と考えられ、律令祭祀に用いられる人面墨描土器が出土していることなどは、この遺跡が直接的に律令国家の組織につながるものであったことを示している。今回の調査で検出された溜め池が、こういった時代背景のなかで築造されたのは確かであろうし、直接「三世一身法」などを契機として築造されたという可能性も考えられないわけではない。

今回の調査で確認された溜め池は古代における土地利用の進展の状況およびその技術史的な展開を考える上で貴重な史料となる。

fig. 105　溜め池・流路出土土器

17. 北神（ほくしん）第4地点遺跡

1．はじめに　北神第4地点遺跡は昭和58年度に北神ニュータウン建設に先立つ大規模な試掘調査が行われ、弥生時代の集落が二つの尾根にまたがっていることが判明した。昭和59年度の調査では、弥生時代後期の竪穴住居3棟、箱式石棺墓2基を主体部とする台状墓、弥生時代中期の土坑数基、奈良時代の蔵骨器などが確認されている。また、昭和60年度には弥生時代中期の竪穴住居2棟、段状遺構、掘立柱建物1棟などが調査されている。

今回の調査地は現状保存が計られている地区で、公園整備によって文化財に影響を及ぼす範囲について調査を行った。また平成2年度には、保存地区内の管理用道路の計画予定地において発掘調査が行われている。

fig. 106
調査地点位置図
1：2500

2．調査の概要　擁壁基礎部分について、人力により行った。便宜上、調査区を座標軸に従い10mの方眼で区切り、北側からアラビア数字を、西側からアルファベットを付した。調査トレンチの基本層序は表土、灰黄褐色極細砂層の流土層、地山となる。流土中より若干の弥生時代中期の土器が出土し、地山面で遺構が検出された。

土　坑　遺構は竪穴住居、土坑、溝、ピットが調査対象地の尾根上のほぼ全域で検出できた。土坑については、15－E区で検出されたSK 03が今回検出された土坑のなかでは、多くの遺物が出土した遺構である。形状は楕円形である。出土遺物は弥生時代中期の土器で、器種は壺、甕、高杯と多種にわたるが完形品となるものは無く、破損後、投棄されたものと